



大地の力 プーミホン国王



大地の力 プーミポン国王
KING BHUMIBOL : Strength of the Land

Published by the National Identity Office
The Office of the Permanent Secretary
Office of the Prime Minister, Royal Thai Government
First published 2008 : 3,600 Copies

Japanese Edition
Copyright 2008 by the Office of the Permanent Secretary
All rights reserved
ISBN 978-974-9772-57-7

Supported by
Thai Airways International Public Company Limited

Printed by
Amarin Printing and Publishing Public Company Limited
Tel : (662) 882-1010 Fax : (662) 433-2742
E-mail : info@amarin.co.th Homepage : <http://www.amarin.co.th>

With Compliments of the Office of the Prime Minister



プーミボンアドゥンヤデート国王



プーミポン国王陛下在位60周年祝賀 ロイヤル・エンブレム

エンブレムの中央には、プーミポン国王の名前の中の3つの文字（ポー・ポー・ロー）が誕生日（月曜日）の色であるゴールドイエローで描かれている。文字は金色で縁取られ、背景には国王を象徴する濃紺色が用いられている。その周りを囲むようにダイヤモンドが配置されているが、これは賢人、宮廷作家、高名な職人、御座用の象、優美な侍女、勇敢な兵士、廷臣などを意味する。もっとも忠実な国王の家臣たちがダイヤモンドに例えられ、中心に国王がいるということは、国王はいかなる宝石も及ばないほどの至高の価値をもち、人種や宗教を問わずあらゆる国民の不幸を取り除き、幸福をもたらす存在であることを示している。

3つの文字はパッタラビット王座の上に配置されていて、上には王権の象徴である王冠を戴いている。中に幸運の印ブラウナロームが置かれた王冠は、左側（向かって右）のプラセーンカンチャイシー小刀とヤクの尾の毛の払子、右側（向かって左）の王の杖と団扇に囲まれている。

そして王座を支える台の上に描かれた王靴と合わせた5種の王具、すなわち①プラマハー・ピチャイ王冠、②プラセーンカンチャイシー小刀、③王杖、④団扇と払子、⑤王靴は、王権の象徴「ベンチャ・ラーチャカクタパン」と呼ばれ、在位60周年を慶祝する意味が込められている。下部を飾るピンクのリボンには金の文字で「仏暦2549年国王陛下在位60周年祝賀」と記されている。リボンの右端（向かって左）には白猿が、左端（向かって右）には白い顔と朱色の体をもつガルエダがおり、エンブレムの枠を手で掴んでいる。エンブレム全体の背景色である金色の混じったグリーンは、陛下の誕生日である月曜日生まれの人間の力を高めるとされる色であり、また陛下が力を尽くし守ってこられた豊饒な大地をも意味している。タイの歴代国王のなかで在位年数が最長となったプーミポン国王陛下の在位60周年を祝うために、このエンブレムは考案されたのである。

序

1999年12月5日、プーミボンアドウンヤデート国王陛下は72歳の誕生日を迎えられました。ナショナル・アイデンティティー委員会はこれを記念し、国王陛下を外国の人々にも広く知っていただくために英語版「**KING BHUMIBOL : Strength of the Land**」を出版しました。同書では1946年6月9日の即位以来、タイ国民の苦しみを取り除き、その幸福と国家の発展のために尽くしてこられた国王陛下の半生と活動、卓越した英知について紹介されています。その後、同書はタイ語に翻訳、編集され『**パラン・ヘン・ベンディン・ナワミン・マハー・ラーチャー（大地の力 プーミボン国王）**』としてまとめられました。

英語版「KING BHUMIBOL : Strength of the Land」に対しては、外国の人々から大きな反響が寄せられました。2006年6月9日、国王陛下即位60周年という記念すべき日を迎えたのを機に、当委員会は世界のより多くの人々に国王陛下について知っていただくこと、日、中、仏、独、露、スペイン、アラビアの7ヶ国語への翻訳、編集を行いました。

この日本語版『**大地の力 プーミボン国王**』を通じて、国王陛下に対する日本の皆様の理解が一層深まることを心より願っております。

タイ王国首相府

ナショナル・アイデンティティー委員会

目次

第1章	ご生誕.....	1
第2章	チャクリー王家.....	10
第3章	育まれた英知.....	22
第4章	愛の夢.....	36
第5章	母国へ.....	42
第6章	戴冠式.....	54
第7章	新時代の君主として.....	62
第8章	大切なひととき.....	86
第9章	大地の王.....	122
第10章	国民の自立へ.....	152
第11章	損失は「利益」.....	224
第12章	国民への愛.....	242
第13章	国民の健康を願って.....	254
第14章	チャイパッターナー財団.....	274
第15章	国王と環境問題.....	288
第16章	人工雨.....	310
第17章	開発プロジェクト.....	320
第18章	国民の危機に.....	404
第19章	親善訪問.....	414
第20章	尊敬する我らが国王.....	432
	Bibliography (参考文献).....	453
	Appendix : The Royal House of Chakri (チャクリー王家 系図).....	461



父君のマヒドン親王に抱かれた幼いプーミボン王子



第1章 ご生誕

19 27年12月5日、月曜日、午前8時45分。ある喜ばしい出来事が米国マサチューセッツ州で起きた。



プーミボンアドゥン
デート王子

この地ケンブリッジにあるマウント・オーバーン病院（当時の名はケンブリッジ病院）フィスク棟で、経験豊かな産科医**W・スチュアート・ホイットモア**はある出産に立ち会っていた。実際、新しい命の誕生はどんなときも喜ばしいことではある。しかも、この日生まれた赤ん坊が後に米国で生まれた唯一のタイ国王となることを知っていたら、ホイットモア医師や看護師たちはどれほど驚いたことだろう。冷え切ったその寒い朝、ホイットモア医師は看護師が男の赤子の体を手際よくきれいにしたのを見届けてから、笑みを浮かべて待っていた母親の胸にそっと置いた。その母親とは、つまり**ミセス・サンワーン・ソクラー**である。

誕生した愛らしい赤ん坊はおとなしい子だった。オーバーン病院で21日間お世話を担当したレイトン、フェイ、ウェルデン、そしてハリントンの4人の看護師たちによれば、よく眠る手のかからない子



ホイットモア医師（写真左）と再会したプーミボン国王（1960年）



国王陛下は王妃陛下とともにマウント・オーバーン病院を訪問し、陛下のご誕生に立ち会った医師や看護師たちと再会した（1960年）



マヒドン親王殿下



シーナカリンタラー殿下

で、皆に愛される存在であったという。赤ん坊は当時
シャムと呼ばれていたタイのチャクリー王家の一員、
マヒドンアドウンデート・クロムクンソンクラーナ
カリン親王（マヒドン親王）の第三子で、**ベビー・
ソクラー**と呼ばれていた。マヒドン親王は当時、
ハーバード大学で医学を修められていた。そのご子息
であるベビー・ソクラーは、直系でないために王位
継承権はなかったが、親王の弟君であるラーマ7世
プラチャーティボック国王陛下により、「**プラ・ウォ
ラウォン・ター・プラオンチャオ・プーミボンア
ドウンデート**（プーミボンアドウンデート王子）」¹と

¹ 1935年7月10日、兄君のアーナンタマヒドン王子が国王に即位したため、王子から親王に昇格。



命名された。「プーミボン」は「**大地の力**」という
意味であるが、そこには18年後にタイ国民にとって
重要な存在となることの予兆があったのかもしれない。
1946年6月9日、プーミボンアドウンデート
親王は¹、「**プラバート・ソムデット・プラバラ
ミンタラ・マハー・プーミボンアドウンヤデート
・マヒタラーティベート・ラーマーティボディー・
チャクリーナルボディン・サヤーミンタラーティ
ラート・ボロマナートボピット**（プーミボンアドウン
ヤデート国王陛下）」として即位されるのである。

シーナカリンタラー
殿下とお子様たち
(左からアーナンタマ
ヒドン王子、プーミ
ボン王子、カラヤー
ニワッタナー王女、
1928年撮影)

¹ 国王即位後に「アドウンデート」から「アドウンヤデート」
に改名。



アーナンタマヒドン国王（左）とプーミボン親王



ケンブリッジ病院の看護師たちは、自分たちが世話をしたその赤ん坊が、長じて第4回東南アジア半島スポーツ大会（SEAP Games）¹のセーリング部門で優勝する唯一のタイ国王となることや、1964年10月5日にオーストリア・ウィーン音楽院²の名誉会員となることなど、想像すらしなかっただろう。23番目の会員となった陛下は、その音楽における功績により会員資格を与えられた初のアジア出身者でもあった。ときを同じくしてこの名誉を受けたのはイスラエルの著名なバイオリニスト、

第4回東南アジア半島スポーツ大会（SEAP Games）のセーリング部門に参加した国王陛下

¹ Southeast Asian Peninsular Games

² 現在のウィーン国立音楽大学。



ユーディ・メニューイン氏である。国王陛下が作曲された「ブルー・デイ (Blue Day)」は、マイク・トッドにより「ブルー・ナイト (Blue Night)」と改名され、1950年のブロードウェイミュージカル「ピープショー (Peepshow)」でも使用された。国王陛下に関する評伝では、陛下のジャズに対する興味について特別の関心が払われている。偶然なことに、サクソフォンを得意とする米国の優れたジャズ演奏家スタン・ゲッツも陛下と同じ年に生まれている。

看護師たちが想像できなかつたであろうもう一つのこと、それは1927年にケンブリッジ病院の新生児室で幸せそうに眠っていた赤ん坊が後に、世界の発明家・科学者リストに名を連ねることになったことである。1993年、プーミボン国王陛下は自らの発明により特許を申請、取得した世界初の国家君主となった。発明はごくシンプルなものである。

「チャイパッタナー水車」という機械を池などの水面に浮かべ、水車の回転によって水に酸素を加えるという仕組みである。



チャイパッタナー水車

この発明品はその後長年にわたり、環境の改善に大いに役立っている。この発明により、国王であっても実用的な手法で国を発展させることができるということ



プーミボンアドンヤデート国王広場の
オープニングセレモニーに出席した
チュラーポーン王女殿下(1990年4月)

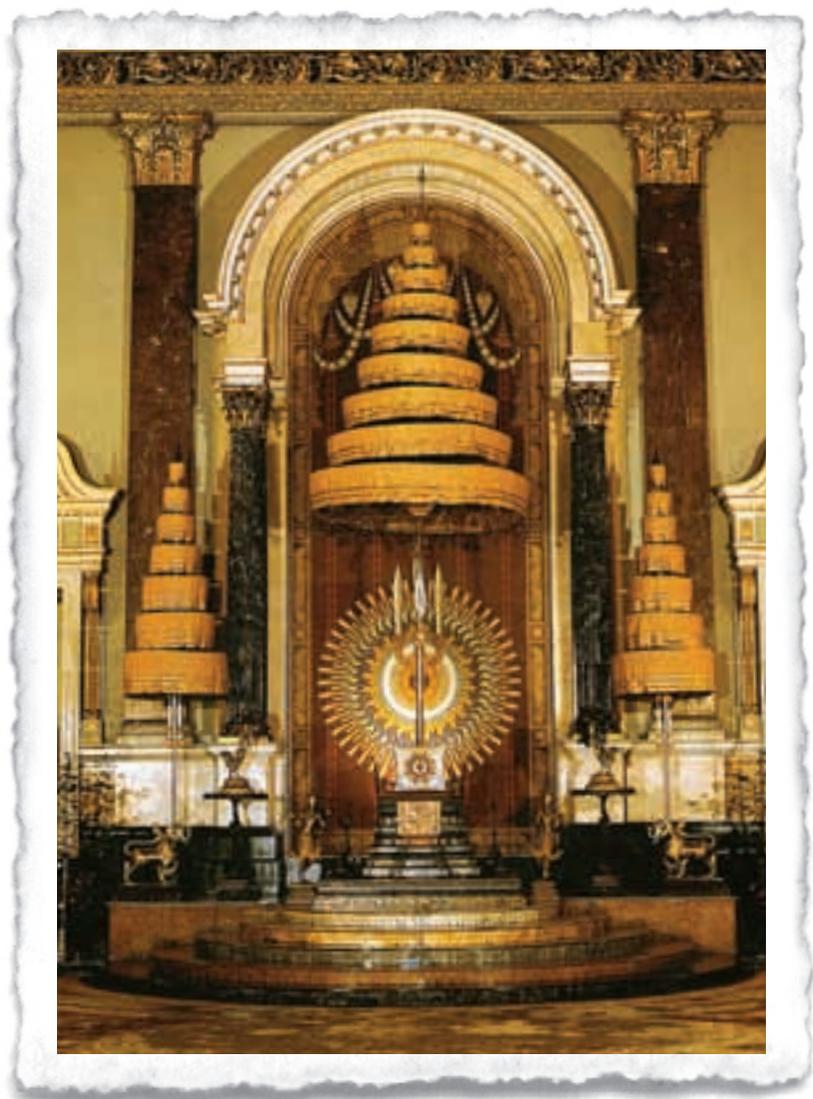
を世界に示したのである。また国王陛下はタイ国民に対し、自身がいつも国民のことを案じ、その生活や環境を改善することをつねに考えながら公務をされていることを示したのである。

今日、マサチューセッツ州ケンブリッジの緑豊かな道を歩く人は、とある角を曲がると「**プーミボンアドンヤデート国王広場 (King Bhumibol**



プーミボンアドゥン
ヤデート国王広場

Adulyadej Square)」を見つけて驚くかもしれない。この広場の名は、まさに自分たちの町が米国で唯一、国王が誕生した場所であることを誇りとするケンブリッジ市民の長年の思いの表れである。プーミボン国王の活動に長い間関心を寄せてきた市民たちは、1990年、ケンブリッジを国王陛下ゆかりの地として祝福することになった。ご生誕の地であることの証として、陛下は自身の名を広場の名称として使われることを許可され、オープニングセレモニーには陛下の末娘であるチュラーポーンワライラック王女殿下が臨席された。



チャクリー・マハー・プラサート宮殿内プラ・ローン・クラーン（中央ホール）にあるプッターントム王座。王座の背後にはチャクリー王家の紋章が描かれている



第2章 チャクラー王家

チャ

クラー王家は1767年のアユタヤ滅亡後、ラーマ1世プッタヨートファーチュラーローク王がバンコクをシャム王国の首都と定めた

1782年以來、今日まで続く系譜である。



1996年、在位50周年祝賀式典で国民の前に姿を見せられた国王陛下

1988年7月2日土曜日、タイ国民は、プーミポン国王の在位年数がタイの歴代国王のなかで最長となったことを祝福する機会に恵まれた。1年後の1989年11月13日にはリヒテンシュタイン公国のフランツ・ヨーゼフ2世が崩御し、プーミポン国王は「世界でもっとも長く王位の座にある国王」となった。2番目は1949年に即位したモナコ公国のレーニエ3世である。¹

1996年、タイ国民にとって喜ばしい機会が再び訪れた。プーミポン国王が即位50周年を迎え、イギリスのビクトリア女王（在位64年）や日本の昭和天皇（同63年）など、長期在位を誇る国王として歴史に名を残す君主の仲間入りを果たしたのである。

¹ レーニエ3世は2005年4月6日、崩御。



国王陛下は即位初期からしばしば地方を訪問した

タイ国憲法の規定では国王に政治的な役割はないものの、国が危機に瀕し、国民が困難に直面したとき、陛下はいつも苦しみを取り除いてこられた。陛下の役割は国の指導者であり、国民が仲むつまじく暮らせるように国民の統合と団結をはかることである。

タイは政治的課題をたえず抱えていたため、これはきわめて困難な役割である。しかしながら陛下



は、どんな問題でも、いつのときも良い方向に解決してこられた。陛下が国民の尊敬を集めるのは、財産や権力、地位ではなく、その勤勉な活動によるためである。陛下は自身にふさわしいと思われる役割を進んで引き受け、貧しき者、教育の機会に恵まれなかった者、病人など、自分をもっとも必要とする人々のもとに足を運ばれた。こうした活動は国の発展につながるだけでなく、政治にも間接的な影響を与えている。

国民に敬愛され、世界でもっとも多忙な国王ともいわれるプーミポン国王ではあるが、公務とのバランスをとりながらスポーツマンとして、また芸術家として多様な分野に関心を寄せてこられた。また陛下は国王としての名目的な役割を果たすことだけに満足せず、貧困の改善や国民の生活水準の向上を通じて国家の発展を支えてこられた。陛下は靴が泥まみれになるのもいとわず、山奥の遠隔地へと足を運ばれる。そこにはコーヒーの新芽やモモの木やアスパラガスをお見せしたいと陛下の来訪を心待ちにしている人々がいるからである。陛下の導きによりさまざまな物事が成し遂げられていく様にはだれもが感心させられる。ただ単に計画の立案を命じたり、プロジェクトの実施を他の者に任せたりするのではない。こうしたプロジェクトにはしばしば陛下個人の資金が投じられる。また、



陛下はすべてのプロジェクトをみずから周到に考案し、その後、関係者に指示し、実行するように求められるのである。信じがたいことに、陛下のバンコクでの住まいである**チットラダーラホーターン王宮**（チットラダー王宮）の堀と鉄柵に囲まれた敷地内には、牛を飼育する実験牧場や本格的な研究施設、水田までが備わっている。

プーミボン国王の王位継承は予想されたことではなかったが、この役目を果たす準備がまったくなかったわけではない。父君のマヒドン親王はラーマ5世王の子息であり、国王陛下もまた、王家の一員として指導者の才覚を受け継いでいるからである。

チャクリー王家の系譜は**トーンドワン**というアユタヤ王朝の高級官吏まで遡ることができる。トンブリー王朝タークシン王（1767-1782）に仕えたトーンドワンは目覚しい活躍により昇進を重ね、総大将の地位に就いた。歴史には11度の戦に勝利したと記録されており、現在のタイ国軍の最高司令官にあたる高位「**チャオプラヤー・チャクリー**」をタークシン王より与えられた。この位階名が現在まで続く「チャクリー王朝」の由来となった。その後「**ソムデット・チャオプラヤー・マハー・カサットスック**」へと昇格し、1782年に王座に就いた。



アナンタサマーコム宮殿のドーム天井部分に描かれたチャオプラヤー・チャクリーの肖像

チャクリー王朝初代の王、**ラーマ1世**は即位したとき既に46歳であり、6年にわたるビルマ（現在のミャンマー）や国内の反乱勢力との戦いを経験していた。タイの伝統を重視した国王は、長年にわたる戦乱でばらばらになった国民の心を1つにするためには強固な愛国心を育てることが必要であると考えた。国王は愛すべきかつての都クルン・シーアユッタヤー（アユタヤ）をモデルに、新都「**クルンテープ・マハーナコーン¹（天人の都）**」を築いた。外国

¹ クルンテープ・マハーナコーン・アモーンラッタナコーシン・マヒンタラーユッタヤー・マハーディロッカポップノッパラット・ラーチャターニーブリーロム・ウドムラーチャニウエートマハーサターン・アモーンピマーンアワターンサティット・サッカタッティヤウィサヌカムプラシット



ラーマ1世

人に**バンコク**という名で親しまれているこの都市を訪れる人々は、古くからある寺院や宮殿の多くが、その少し北にある古都にちなんで名づけられていることに気づくだろう。

先王のタークシン王はチャオプラヤー河西岸のトンブリーを首都と定めたが、外敵の攻撃を防ぎにくいと考えたラーマ1世は1782年、東岸に都を移した。その中心は現在王宮が建っている地点である。新しい都は周囲を取り囲む城壁を越えて拡



バンコク

大し、全盛期のアユタヤを偲ばせる国際的な大都市へと発展した¹。世界各国の船が入港し、東洋と西洋の商人たちが交易を繰り広げた。バンコクは極東貿易の交差点として、重要で洗練された都市となったのである。

¹ 17世紀のアユタヤの人口は200万人、同時代のロンドンやパリの人口より多かったという。



18世紀末になると、ラーマ1世治下のシャムは国家としての安定性を増し、中国との貿易によってもたらされた繁栄を享受するようになっていた。当時、国内各地には権力をもつ者たちがおり、バンコクの王朝よりそうした地方権力の意向に従う者もいた。ラーマ1世の長男**チム¹**はいつも父親に付き従い、各地での戦闘を経験しながら成長した。ラーマ1世が1809年に崩御すると、王位はこの皇太子によって継承された。即位のとき、**ラーマ2世**は41歳であった。

200年以上の歳月が流れ、タイを変えるさまざまな出来事があった。初期のチャクリー王家と現国王との特徴的なつながりを想像することは難しいであろう。最初の2人の国王である**ラーマ1世**と**ラーマ2世**には、絶えず侵入する外敵から国を守る戦いを続けた戦士というイメージがある。ラーマ2世の治世は父王の時代よりも平和になっていたとはいえ、つねに死と破壊に満ちた戦場のなかにあつて王の心は硬化していた。

しかし興味深いことに、2人の王は**卓越した詩人**でもあった。ラーマ1世時代にはタイの文化、芸術の復興が早くも始まり、アユタヤの滅亡で失われた

¹ 1802年、イッサラスントーン王子に、1806年、パウウォーンサターンモンコン皇太子へ昇格。



ラーマ2世

とされていた『**ラーマキエン**』、『**イナオ**』という2つの古典文学を国王自身が再び書き改めた。その子息であるラーマ2世もまた優れた感性をもつ詩人であり、**ストーンプー**をはじめ同時代の詩人たちとも交友を深めた。国連教育科学文化機関(UNESCO)は1968年にラーマ2世を、1986年にはストーンプーを、「**世界の偉大な詩人**」として称賛した。



初期の2人の王が戦士でありながら、かつ詩人でもあったことは、チャクリー王家に受け継がれている不思議な特徴であろう。百戦錬磨の勇者という国王のイメージは、詩作というかけはなれたような分野での才能を併せもつという事実によって、より穏やかなものとなっている。プーミポン国王もまた、国家の発展と国民の統合に強固な意志をもって取り組む一方、画家、写真家、ヨットマン、そして音楽家としても優れた業績を残されている。陛下は「世界でもっともクールな国王」¹と評されたこともある。

時が流れ、暴動や反乱が日常の出来事であった時代が遠く過ぎ去ってからも、チャクリー王家は比類なき卓越した国王の継承を続けているのである。

¹ 『Sawasdee』1987年3月号。ハリー・ロルニックがアメリカの著名なジャズ演奏家ライオネル・ハンプトンの発言として引用。



「世界の偉大な詩人」ストーンブー (1786-1855) の像



シーナカリンタラー殿下と幼い頃のプーミボン国王



第3章 育まれた英知

幼

少時代のプーミポン王子にもっとも大きな影響を与えたのは、母君のシーナカリンタラー殿下である。殿下が1995年7月18日に逝去されたとき、



少女時代のシーナカリンタラー殿下

タイ全土が深い悲しみに包まれた。世紀の節目にあたる1900年10月21日に生まれたシーナカリンタラー殿下は、9歳のときに金細工職人であった父親と母親を亡くした。長女のカラヤーニワッタナー王女殿下が書かれた『母が話してくれたこと』¹によると、シーナカリンタラー殿下は無口で考え事の好きな

少女であった。両親を失った殿下は生活の場を移さなければならなかった。最初はワライアロンコーン内親王の元に身を寄せ、その後ある高級官僚の保護を受けることになった。

思慮深く、現実的な考えの持ち主であったシーナカリンタラー殿下は13歳のとき、看護師になることを決意された。1916年にシリラート看護学校をわず

¹ カラヤーニワッタナー王女殿下『母が話してくれたこと』教育省教員評議会出版局、1982年。



米国留学時代のシーナ
カリンタラー殿下
(左から3人目)と友人たち
(カリフォルニア州にて)

か3年で卒業し、クラスで最年少の助産師となった。当時は第1次世界大戦の最中であった。まだ**サンワーン・タラバット**という名前であったシーナカリンタラー殿下は、未来の夫の母君であるプラ・シーサワリンティラー・ボロマラーチャテーウィー王妃陛下（サワーン・ワッタナー王妃陛下）から奨学金を授与され、米国留学へと旅立った。

1917年8月に海を渡ったミス・サンワーンは、カリフォルニア州バークレーで新しい生活を始めた。ミス・サンワーンは米国社会のさまざまな側面に強い印象を受けた。家庭教師の勧めでメソジスト教会や日曜学校にも足を運んだ。ここで聖書の物語に興味をもった殿下は、後にマサチューセッツ州ケンブリッジに移り**シモンズ・カレッジ**に入学すると会衆派教会に通うようになった。そうした生活の中で



(左) シーナカリンタラー殿下 (結婚後にロンドンにて撮影)
(右) マヒドン親王殿下

タイ人としての自分を意識するようになった殿下は、次第に仏教へと傾倒し、その学習に多くの時間を費やすようになった。

シモンズ・カレッジで看護学と経済学を専攻し、卒業にむけ研究に励んでいた頃、この美しい看護学生は当時**マヒドンアドウンデート・クロムクンソクラーナカリン親王殿下**(マヒドン親王殿下)という位階名であったマヒタラーティベートアドウンヤデートウィクロム親王殿下と出会い、恋に落ちた。英国の**ハロー・スクール**を卒業し、タイ海軍とドイツ海軍の双方で少尉の階級をもつ親王殿下は、



医者になるために海軍の職を辞し、米国ハーバード大学に留学中であった。2年にわたる親密な交際の後、親王殿下は異母兄であるラーマ6世モンクットクラオ国王陛下から結婚の許しを得た。1920年、**ハーバード大学**から公衆衛生学の修了証書を授与された親王殿下はミス・サンワーンとともに帰国、**サパトゥム宮殿**で結婚式を挙げた。後年、プーミボン国王が結婚式を挙げられたのと同じ場所である。ミス・サンワーン・タラパットは結婚後、**サンワーン・マヒドン妃殿下**と称された。

新婚の二人は頻繁に引っ越したため、家族として落ち着いた生活を始められたのは結婚から3年後のことであった。1923年5月6日、二人が住んでいたロンドンで長女の**カラヤーニワッターナー王女**がお生まれになった。その2年後の1925年9月20日にはドイツのハイデルベルクで長男の**アーナンタマヒドン王子**がお生まれになった。

2年後、マヒドン親王一家は米国に渡った。住まいはブルックリンのロングウッド通りにあった。1927年12月5日、次男の**プーミボンアドウンデート王子**がお生まれになった。その翌年の1928年、マヒドン親王は医学博士課程を首席で卒業し、一家はタイへ帰国された。殿下は長年の目標であったチェンマイ・マッコーマック病院の医師となった。



シーナカリンタラー
殿下とアーナンタマヒ
ドン王子（左）、カラ
ヤーニワッタナー王女
（右）

「**モー・チャオファー（ドクター・プリンス）**」の愛称で皆に慕われた親王殿下は不幸にも腎臓の病に侵されており、余命いくばくもないことにみずからも気づいていた。マヒドン親王殿下が1929年に逝去された後、サンワーン・マヒドン妃殿下は家長として3人の子どもを育てていくことになった。末っ子のプーミボン王子はそのとき、まだ2歳であった。

最愛の夫を突然失った29歳の妃殿下は、どれほど悲しく、心細い思いをされたことだろう。それでも殿下はスイスという外国の地に移り住み3人の子を



育てるといふ困難な仕事を成し遂げられた。また後年には2人の国王の母親にもなるという重責も負われることになった。殿下の優れた能力は広く尊敬を集め、またお子さまたちの発言や活動に見られるように、その英知はしっかりと受け継がれていった。

1932年に起きた政変の翌年、幼いプーミポン王子は母、兄、姉とともにスイスに渡った。そこには心を和ませる美しい草原や湖、山や谷の平和な風景があった。新鮮な空気は優れた知性を育くむのにもよい影響をもたらした。

プーミポン国王陛下の勉強熱心な性格は父君と母君から受け継いだものである。プーミポン王子がバンコクで一時期通っていたカトリック学校、マーテー・デーイー校の教師であった**シスター・マリー・ザビエル**は、王子が音楽の才能に特に秀でており、周りのすべての物事に興味を示し理解しようとする生徒であったと述懐している。

あるとき、プーミポン王子は電気仕掛けのおもちゃの電車がほしくなった。他の子どもならおもちゃ屋へ買いに走るところだが、王子は家の中にあるハンガーやワイヤーなどあらゆるものを利用して自分で作られた。モーターも銅線を磁石に巻いて自作された。忍耐強さと物事に対する真摯な姿勢は



ローザンヌ市街を自転車で走るアーナンタマヒドン国王(左)とプーミボン親王



陛下の際立った性格の1つである。国王になられた後、貧しい人々のために尽力し続ける姿にもその性格は表れている。

プーミボン王子は1935年までスイス南西部ローザンヌの**ミアモント**小学校に通い、その後シャイイにある全寮制の中等学校**エーコル・ヌーヴェル・ドゥ・ラ・スイス・ローマンド**校に進学された。ローザンヌはジュラ山の南麓、ジュネーブ湖という名でも知られる三日月形のレマン湖畔に位置し、13世紀に建てられた大聖堂や司教の館がある。ヨーロッパの他の街に比べ落ち着いたたたずまいのローザンヌは小規模工業の町でもあり、化学製品、衣服、革製品、ラジオ、ワイン、木工品などの工場が市内に点在していた。



プーミボン王子が山に囲まれたスイスの古都を通学されていた1935年、タイは政変後の立憲君主制の時代を迎えていた。1934年3月2日、ロンドン滞在中のラーマ7世**プラチャーティボック国王陛下**は退位を決断された。国王の退位はタイの歴史上、かつてない出来事だった。

プラチャーティボック国王陛下は正式な後継者指名を拒まれたものの、プーミボン王子の兄君である**アーナンタマヒドン王子**を次の国王にしたいとの考えがあったとされている。プラチャーティボック国王の退位を受け、チャオプラヤー・ウォラポンピパット宮内大臣は、英国滞在中の国王陛下の摂政を務める**クロムプラヤー・ナリサラヌワッティウォン親王**（ナリット親王）に後継者候補のリストを提出した。そして、アーナンタマヒドン王子がチャクリー王朝の8代目の王、ラーマ8世として即位することになった。

このとき、アーナンタマヒドン王子はスイスで修学中であった。シーナカリンタラー殿下は王子が学業を終えるまでスイスに残ると決断したため、タイでは国王の代理を務める摂政団が任命された。一家は当時住んでいたローザンヌ市内ティソット通りの質素なアパートから、近郊のプイイという小さな町にある大きな屋敷へ引っ越すことになった。



9歳のアーナンタマヒ
ドン国王

新居は3階建てで、王族の邸宅として使用するために建てられたものであった。「**ヴィラ・ワッタナー**」とよばれるこの邸宅は、困難な一時期を経験したこの家族がゆったりとくつろいだり勉学に励んだりするのにふさわしい環境であった。近くには美しいレマン湖がある。松の木に囲まれた32,000㎡の敷地には、果樹園やシーナカリントラー殿下が家庭用に植えた小さな野菜畑があった。特に野菜畑の



ことは心に留めておかなければならない。国王陛下はいつも貧しい人々に対し、家庭菜園の大切さについて母君と同じことを説かれているからである。

寒い冬が訪れると、シーナカリントラー殿下は子どもたちを連れてアローザヘスキーに出かけられた。殿下はこのときみずから写真を撮り、大切に保管されていた。ローザンヌで公式に撮影された写真は非常に少ないのだが、我々は若き日の**アーナンタマヒドン国王**と**プーミボン親王**が、雪景色の中でスキーを楽しむ姿を見ることができるのである。1937年から38年の間、プーミボン親王はアー



ヴィラ・ワッタナー



スキーを楽しむアーナンタマ
ヒドン国王(左)とプーミボン
親王(1939年撮影)

ナンタマヒドン国王といつも行動をともにしていた。殿下も2人の息子たちが、学校が休みの間に仲むつまじく楽しそうに遊んでいるのをうれしそうに見守っていた。

1938年、アーナンタマヒドン国王は即位後始めて、家族とともにタイに一時帰国された。このとき国王は母君に対し、「ソムデット・プラ・ラーチャ
チョナニー・シーサンワーン殿下」という尊称を授けられた。



1945年に帰国されたアーナンタマヒドン国王（中央）とプーミボン親王（左）



アーナンタマヒドン国王がタイに2度目の帰国を果たしたのは1945年12月である。国王は1946年6月9日に崩御し、プーミボン親王が後継として国王に即位された。





第4章

愛の夢

16

世紀にフランソワ1世によって建てられたフォンテーヌブロー宮殿は、フランスの首都パリから南西に約60 km離れたところにある。

長い歴史のなかでこの場所は、多くの歴史的な出来事やロマンスの舞台となってきた。1947年、プーミボン国王陛下は MC¹ ナカッタラモンコン・キティヤーコーン駐仏タイ大使の令嬢と偶然ここで知り合った。この出会いはプーミボン国王の将来にとって重要な意味をもつものであった。

MRシリキット・キティヤーコーン嬢は15歳の清楚な少女で、パリで音楽とフランス語を学んでいた。王家の一員であるため、パリ滞在中に国王陛下にお目にかかることはそれほど珍しいことではなかった。しかし、この快活な大使令嬢が国王の心をとらえることに



¹「MC」は王族の名に冠して用いる尊称「モーム・チャオ」の略。国王と、王族以外の出身の母親の間に生まれた王子及び王女に対しては「モーム・チャオ (MC)」、その子は「モーム・ラーチャウォン (MR)」、さらにその子に対しては「モーム・ルワン (ML)」の尊称を用いる。「ML」の子の代以降は尊称を用いない。



なるとはだれも想像しなかったであろう。作曲家でもある国王陛下は1949年に、「**愛の夢、あなたの夢** (Dream of Love, Dream of You)」というワルツを作曲された。この曲には後年、次のような歌詞が英語とタイ語で添えられた。

ドライブを楽しまれるご成婚前のプーミボン国王とMRシリキット嬢

**毎夜、私の心は愛を夢見、あなたを夢見る
あなたは私の天使
神様が私に授けてくださった**

1948年10月4日、思いもよらない事件が起こった。スイス南西部のモルジュからジュネーブに向かって、1台の小さなオープンカーが走っていた。前方を走るトラックが道を横切る2台の自転車を避けるため急停車した。オープンカーの運転手は慌てて



ブレーキをかけたが間に合わず、トラックの後部に追突してしまった。その小さなオープンカーを運転していたプーミボン国王陛下は右目を負傷、同乗していたアラム・ラッタクン

セーリールンリット氏は頭蓋骨骨折の重傷を負った。事故のニュースは瞬く間に世界に伝えられた。タイ国民は皆、陛下の容態を伝えるあらゆるニュースをひと言も漏らさぬように聞いていた。遠く離れた外国での出来事であったため、怪我がどの程度深刻なのか詳細が伝わらず、タイ国民は最悪の状態になるのではと不安にかられた。

事故の知らせを聞いたMLブア・キティヤーコーン大使夫人は2人の娘、MRシリキット嬢と妹のMRブサバー嬢に伝えた。そして、国王陛下を看病するため長女とともに拝謁した。陛下の怪我はひどかったが、命にかかわるものではなかった。ジュネーブの眼の専門医は、陛下が視力を失わぬよう治療に全力を尽くした。治療には長い時間が必要であったため、シーナカリンタラー殿下は、MRシリキット嬢に、母上が帰った後もジュネーブに残って陛下



婚約を間近に控えて

の看病を続けるようお願いされた。MRシリキット嬢はローザンヌの**リアン・リーヴ**学校に入学し、ヴィラ・ワッターで陛下とお茶をご一緒するため、特別に許可を得て、午後には学校を休んでいた。

1949年8月12日金曜日、ロンドンのタイ王国大使館でMRシリキット嬢の17歳の誕生日を祝う特別なパーティーが開かれた。ちょうど夏休みの時期で



あったが、お2人が招待した親しい友人たちを前に、国王陛下はM.R. シリキット嬢との婚約を発表された。祝福の声に包まれるなか、陛下はシリキット嬢にプレゼントを手渡された。それは小さなハート型のダイヤモンドがちりばめられた指輪で、母君のシーナカリントラー殿下がかつて夫君のマヒドン親王殿下から婚約指輪として贈られた物だった。微笑むMRシリキット嬢に、陛下は優しく話しかけられた。

ヴィラ・ワッターナーのバルコニーから外国人記者たちに応える2人

「これはとても大切な物です。あなたに差し上げます」

婚約のニュースはタイ全土を歓喜の渦に巻き込んだ。国民は国王陛下と美しい婚約者が帰国し、ご成婚される日を心待ちにした。

MRシリキット嬢は当時、外国の新聞記者によるインタビューに次のように答えている。

「私はまだ若く、これまで人を好きになったことがありませんでした。私にとって（陛下との婚約は）とても胸躍る出来事です」



プーミボン国王は婚約者のM.R.シリキット嬢を伴い帰国された



第5章 母国へ

19

50年3月、イースト・アジアティック社の蒸気船セランディア号は極東を目指して紅海上を航行していた。船上では大きな丸い眼鏡をかけ勤勉な雰囲気を漂わせた青年と美しい黒髪の女性がならんで景色を眺めていた。この2人こそ戴冠式を控えた若きタイ国王と17歳の婚約者、M.R. シリキット・キティヤーコーン嬢であり、母国への船旅を心ゆくまで楽しまれていた。

その1ヶ月前にローザンヌを汽車で出発された国王陛下とM.R.シリキット嬢は、フランスのヴィルフランシュからセランディア号に乗船された。目的地の母国、タイは陛下にとって初めての地ではないが、慣れ親しんだ場所というほどでもなかった。今回の帰国は単に結婚のためではなかった。不確かな将来と国家に対する重大な責任が待ち受けている。それでも船が港を離れるとき、船に乗り合わせた人々は2人の笑顔を目にすることができた。

スエズ運河兩岸の景色はあまりに美しく、2人は我を忘れて楽しまれたに違いない。船はエル・ク



シール、アラビア砂漠付近、ポートスーダンを通過、マンデブ海峡を経てアデン湾へと抜け、シンガポールへと進んだ。シンガポールからマレー半島東岸を北上する旅はあっという間で、チャオプラヤー河の河口まで来ればバンコクはもうすぐそこだった。

セランディア号の
デッキにて

河口では王室専用船**シーアユタヤ**号が待ち受けており、国王陛下とM.R.シリキット嬢はセランディア号から哨戒艇を使って乗り移られた。1950年3月25日の早朝のことであった。何千人もの国民が両岸に並び、あるいは手漕ぎ舟に乗り、国王陛下の姿をひと目見ようと集まっていた。それはまるで英雄の帰還を迎えるかのような光景であった。日が昇り、気温も次第に上がり始めた。群衆は紺色の綿



シャム湾洋上でシー
アユタヤ号に乗船さ
れる国王陛下

シャツや白い洋風シャツにズボンという服装である。すべての停泊船、栈橋、河岸が人で埋まり、歓声がどよめいた。午後3時頃にはラーマ1世橋近くにある木製の栈橋が人の重みに耐え切れず水没し、少々早めの「水浴び」をするはめになった人々もいたが、これも幸福な1日を物語るエピソードである。

船が姿を現わすと、集まった人々の表情が弾けんばかりの笑顔に変わった。敬愛する国王陛下が美しい婚約者を伴い帰国されたのだ！上空を3機の小型飛行機が旋回し、国王陛下の上陸と同時に群衆に向かってコメを降り注いだ。コメを撒くのは伝統的な祝福の慣わしであるが、飛行機からというのはめったにないことである。それはちょうど、ニューヨークのパレードでビルの窓から紙テープを投げるようなものであろう。

シーアユタヤ号がラーチャウオラディット栈橋に到着すると、出迎えた**チャイナートナレントーン** **摂政**や首相、閣僚らが歓迎の言葉を奏上した。国王陛下は人々に挨拶された後、王宮内のプラ・シーラッタナサーサダーラーム寺院（ワット・プラケーオ）へ専用車で移動した。陛下が寺院内で蠟燭と線香に火を灯し、三宝に向かって祈祷すると、**ワチ** **ラヤーンナウォン・サコンマハーサンカパリナー**



ヨック大僧正と20名の僧侶が祝福の言葉を奏上した。それからアマリンウィニッチャイ宮殿でご先祖の遺骨に、パイサーンタクシン宮殿で亡き兄上であるアーナンタマヒドン先王陛下にそれぞれ祈祷した後、チットラダー王宮に入られた。

翌日午後、国王陛下はアマリンウィニッチャイ宮殿へお出ましになり、プラームブークウェン座前の王座に着座し、王族や政府要人に謁見された。そして帰国を祝福する「ウィエン・ティエンの儀(蠟燭を回す儀式)」に臨まれた。

若き国王にとってこの帰国は、4年前、群衆のなかから発せられたある呼びかけへの「答え」を証明する旅でもあった。

1946年6月9日の兄君アーナンタマヒドン国王の突然の崩御により国王に即位することになったとき、プーミボン国王陛下はまず大学を卒業することを優先しようと決意された。専攻科目は自然科学から将来国のために役立つようにと法律と政治学に変更された。即位が決まると、ラーマ5世の子息である尊敬すべき叔父、チャイナートナレントーン親王殿下が1946年6月16日に摂政に任命され、1950年に若き国王が戴冠式に臨むまでその重責を果たした。



1946年、国王の車がゆっくりと空港へ向かうとき、道の両側は新しい国王をひと目見ようとする国民で埋まった。敬愛する国王陛下がローザンヌで勉学を続けるためしばらくタイを離れることを聞き集まってきたのだ。車中から国民の姿を見ていたとき、群衆のなかから発せられた叫び声が、若き国王の心を鋭く突いた。

「国民を見捨てないでくれ！」

このとき陛下が心のなかで出された答えは、今も伝説のように語り継がれている。

「国民が私を見捨てないならば、どうして私が国民を見捨てられようか」



この出来事は即位したばかりの陛下にとって驚くべきことであったに違いない。国民が自分のような若い国王に対しこれほど大きな希望を抱き、必要としているなどとは想像されなかつただろう。群衆のなかから発せられた言葉は、国王を尊敬し、信じ続けるタイ国民の気持ちの表れであった。そして陛下の心にあった「答え」はいつものお言葉と同じように、簡潔で的確だった。

スイスへ戻るため空港に向かう国王陛下の車列を大勢の国民が見送った（ラーチャダムヌーン通り）

時が来れば、私は必ず戻ってくる。

1950年、陛下はそのお言葉どおりバンコクへと戻られたのである。

MRシリキット・キティヤーコーン嬢は父、



結婚の儀で祖母のサ
ワーン・ワッタナー
王妃陛下(写真右)に
供物を渡される国王
陛下



MCナカッタラモンコン氏の住まいであるテー
ウェート宮殿にご成婚まで滞在した。1950年4月
28日金曜日、午前10時24分、**祖母のサワーン・
ワッタナー王妃陛下**の主催による結婚の儀が始まっ
た。儀式は簡素なものであった。サワーン・ワッタ
ナー殿下は新郎と新婦の額にセンダンの木の粉で
香りづけした粉で3つの点を付けた。その後お2人
は家族やごく親しい友人ら、限られた数の参列者
から祝福の言葉を受けられた。最後に婚姻登録書に
署名され、参列者からの贈り物を受け取られて儀式
は終わった。ご成婚を祝して贈られた品々の中には
外国から届けられた物もあった。米国のトルーマン
大統領夫妻からは祝福のメッセージとともにラジオ
とレコードプレーヤーが贈られた。英国王ジョージ
6世、エリザベス王妃夫妻（エリザベス2世女王
陛下の父君と母君）から贈られたウスター陶器の



親族や近い友人との祝賀晩餐会に出席された国王陛下

セットには、参列できなかったことを詫びる手紙が添えられていた。タイの伝統的な習慣にしたがい、参列者に引出物としてシガレット・ボックスが配られた。その小箱にはタイ文字で、陛下のお名前のイニシャル「**ポー・オー**」とシリキット王妃のお名前のイニシャル「**ソー・コー**」が刻まれていた。翌朝、お2人はクライカンウォン宮殿のあるホワヒンへの新婚旅行のため王室専用列車でバンコクを出発された。



ทะเบียนการสมรส

รายการ	ชาย	หญิง
๑. นาม	สมเด็จพระเจ้าอยู่หัวภูมิพลอดุลยเดช	หม่อมราชวงศ์ สิริกิติ์ กิติยากร
๒. เชื้อชาติ สัญชาติ	ไทย - ไทย	ไทย - ไทย
๓. ถิ่นที่อยู่	ในพระบรมมหาราชวัง	วังหม่อมเจ้าลักขณธรรมาศ กิติยากร ถนนกรมเกษม จังหวัดพระนคร
๔. อายุ เกิด วัน เดือน ปี.	๒๓ ๕ ธันวาคม ๒๔๖๖	๑๘ ๑๒ สิงหาคม ๒๔๖๕
๕. ที่เกิด	วังแม่สสะสุเสถียร สหรัฐอเมริกา	จังหวัดพระนคร
๖. อาชีพ	—	—
๗. นามบิดา	สมเด็จพระเจ้าพี่นางเธอเจ้าฟ้ากัลยาณิวัฒนา กรมหลวงลพบุรีราเมศวร์	หม่อมเจ้านักขัตรมงคล กิติยากร
๘. ประเทศที่เกิดของบิดา	ประเทศไทย	ประเทศไทย
๙. นามมารดา	สมเด็จพระราชชนนีศรีสังวาลย์	หม่อมหลวงบัว กิติยากร
๑๐. ประเทศที่เกิดของมารดา	ประเทศไทย	ประเทศไทย
๑๑. ลายมือชื่อผู้ร้องขอจดทะเบียน	ภูมิพลอดุลยเดช	สิริกิติ์
๑๒. ลายมือชื่อผู้ให้ความยินยอม	—	หม่อมราชวงศ์ลักขณธรรมาศ กิติยากร
๑๓. ลายมือชื่อพระยาน	๑. วิมลวิมลประยูรศรี ๒. จอมพล.ป.พิบูลย์	วิมลวิมลประยูรศรี
๑๔. จดทะเบียน	เลขทะเบียน	พ.๑/๒๔๙๓
	วัน เดือน ปี.	๒๘ เมษายน ๒๔๙๓
	ลายมือชื่อนายทะเบียน	พ.น. วิมลวิมลประยูรศรี

婚姻登録書





プーミボン国王のイニシャル「ポー・オー」と
シリキット王妃のイニシャル「ソー・コー」の
文字が刻まれたシガレット・ボックス



戴冠式で国王の権威を象徴する品の一つである杯に聖水を注ぐ国王陛下



第6章 戴冠式

プー

ミボン国王陛下が即位されたのは1946年6月であったが、戴冠式が行われたのは結婚の儀から1週間後、1950年5月5日であった。この

とき、陛下は22歳であった。戴冠式は王宮内アマリンタラー・チャッカパットピマーン宮殿の中庭に儀式のためしつらえられた浴槽で沐浴することからはじまった。白い衣に着替え、東の方角を向いて座した陛下の肩に聖水が注がれた。ホーン・ルワン（王室の占い師）が勝利の鐘を鳴らし、軍の音楽隊が国王賛歌を演奏した。

その後国王陛下は神聖な存在であることを象徴する戴冠式の正装に着替えられた。そして全権の保持者として政府の代表者および国会議員との謁見に臨んだ。拝謁した代表者たちは国王に尊敬の意を表明し、国内の八方角にある重要な場所から取り寄せた聖水を献上した。バラモン教の儀式にしたがい2人の従者が跪いて2つの杯から天の水と大地の水を差し出し、王の第一の象徴である九層の傘蓋を献上した。



白衣に身を包んだバラモン僧が、ヒンドゥーの神々が儀式に加わり戴冠を見届けるよう呼び寄せる祈禱を行った。伝統衣装をまとった従者たちが王権を象徴する5種の王具と26種の武具を携えながら入場した。

陛下が白い七層の傘蓋を冠した八角形の王座に着座すると、ダイヤモンドや色とりどりの宝石がちりばめられた重さ7kgの金の王冠が頭に載せられた。胴鼓、ラッパ、法螺貝、勝利太鼓による演奏が鳴り響くなか、司祭が王権を象徴する品々を陛下に献上した。この儀式が終わると、戴冠が正式になされたことを国民に知らせるため101発の大砲が放たれ、国中の寺院では祝福の鐘が一斉に打ち鳴らされた。国王陛下は王座から立ち上がり、国王としての最初のお言葉を述べられた。お言葉には歴代の国王



がかつて述べられたのと同じ宣誓の言葉も含まれていた。

「シヤム国民の利益と幸福のため、正義をもって統治する」

戴冠の儀式が終わると、各国大使や政府高官との謁見の儀が行われた。陛下が王座に着座されて人々の前に姿を見せることは極めてまれであるため、拝謁した人々にとっては非常に貴重な機

会であった。数百年の歴史のなかでこうした機会を得たのは外国の君主の代理としてタイを訪れた外国人であった。陛下は金の刺繍の入った錦織の幕の奥に座していた。拝謁する者たちが着席すると幕がゆっくりと開かれ、壮麗な王衣に身を包んだ陛下のお姿が見えた。幕は再びゆっくりと閉じられ、謁見の儀は終了した。

この日、国王陛下はさらに2つの儀式に臨まれた。1つはシリキット王妃に「ソムデット・プラ・ナン・チャオ（王妃陛下）」の位階を授ける儀式で



あった。タイでは国王の妻となった者がそのままこの位階を授かるわけではない。この位階は今から100年ほど前に国王陛下の祖父であるラーマ5世チュラーロンコーン大王が取り入れたものであり、寵愛するスナンター妃に授けたのが最初である。

儀式ではシリキット王妃が国王陛下の前に跪き、「**ソムデット・プラ・ナーン・チャオ・シリキット・プラ・ボロマラーチニー**」、すなわちシリキット王妃陛下の位階を授けるとの勅令を宮廷職員が読み上げた。国王陛下は王妃陛下に王室の権威を象徴する品々を与え、頭上に聖水を注がれた。

この日最後の儀式では、国王陛下は王室専用馬車に乗られ、古代の宮廷服姿の従者の列を従えてプラ・シーラッタナサーサダーラーム寺院（ワット・プラケーオ）へと向かった。陛下自身も古来の王衣に革の帽子、ペルシャ風の飾り締め金のついた革靴



という姿であった。儀式では仏教僧の長である**ワチラヤーナウォン大僧正**（MRチューン・ナパウオン）が仏教の五戒を読み上げた。続いて国王陛下は仏教の保護者となることを宣誓された。これを受け全国でもっとも地位の高い80名の僧侶たちは、国王陛下が仏教寺院の最高権威者であり、またすべての宗教の保護者であることを承認した。

翌5月6日には王宮内で限られた人数の宮廷職員によるいくつかの儀式が行われた。そして5月7日、国王、王妃両陛下は各国の大使夫妻や外交官と謁見



戴冠式後、国民の祝福に応えられる両陛下



した。同日午後にはさまざまな宗教・宗派の代表者を含む外国人代表団が両陛下に拝謁し祝福の言葉を述べた。その後、両陛下はスッタイサワンプラサート宮殿のバルコニーに姿を見せ、集まった何万人もの国民の祝福に応えられた。

すべての儀式が終わったとき、陛下は1946年の即位の際にある者が投げかけた言葉に対する「答え」を証明されたのである。「決して国民を見捨てることなどない。学業を修めたら母国へ戻り、慈愛に満ちた心をもって国を統治する」というみずからの「答え」を。



国王の権威を象徴する衣装
「ボロマカッティヤラーチャブーシターポーン」を召された国王陛下



第7章 新時代の君主として

国

王陛下が帰国されたのは、前章で述べたように即位から4年後の1950年であった。そしてこの年の5月5日、王室の伝統に則り戴冠式が行われた。壮麗をきわめた儀式に、国中が歓喜に包まれた。若き陛下は立憲君主制の下での国王として、苦難を顧みずさまざまな仕事に全力で取り組まれた。1946年、スイスで勉学を続けるため国を離れるとき「決して国民を見捨てたりはしない」と固く心に決められたが、陛下を思い慕う国民の気持ちに応えるときがついにやってきたのである。

新しい国王が直面した困難は、歴代国王が有していた絶対的な権力をもたずに、どれほど国民を助けることができるか、というものであった。地球の裏側のベルギーでも、父君レオポルド3世の退位を受け即位したボードワン国王が同様の問題を抱えていた。第二次世界大戦終結から間もない当時、タイでもベルギーでも国民は文化的、経済的な混乱のなかにあった。両国の国王はともに、政治よりも国民の生活により多くの関心を注ぐことを選ばれたのである。



憲法の下での国王という役割を受け入れた陛下は、新時代の国王がいかにあるべきかということについて、兄君のアーナンタマヒドン先王陛下の考えから大きな影響を受けていた。それは「**国民に身近な存在としての国王**」というものであった。

ドンムアン空軍基地を訪問されたアーナンタマヒドン国王とプーミボン親王

「私の兄ラーマ8世は、第二次世界大戦とその終結直後の困難な時代にあって、多くのことを成し遂げるための時間はありませんでした。しかし陛下は、おそらく自身も気づかぬまま、新しい国王としての道を切り開かれたのです。国民は国家を象徴する人物の登場を待ち望んでいました。20歳という若さで亡くなられた陛下には輝かしい未来が残されていました。歴代国



プーミボン親王を伴いモスクを訪問されたアーナンタマヒドン国王



王は国民に姿を見せることが少なかったため、陛下は国民に新しい存在として映りました。陛下は国民に新しい空を開いてくれたかのようにでした。しかし陛下もまた、あまりに急いで逝かれてしまいました」¹

アーナンタマヒドン国王陛下は気さくなお人柄で、いつも微笑みを絶やさず、誠実な方であった。国民は新時代の到来を予感した。英字新聞「**バンコクポスト**」創刊者のアレクサンダー・マクドナルドが描写したように「ぴんと張り詰めたような規律正しさを備えている」が、芸術家が丹念に作ったような美しい姿で、若き国王は国民のことを真剣に考えられていた。ある日、陛下はプーミボン親王陛下を

¹ “Thailand’s Working Monarch”, *National Geographic Magazine*, October 1982, pp.486-533. 最後に「陛下もまた」とあるのは、ラーマ7世が民主主義体制への移行を受けて退位したことを念頭においてのお言葉である。



伴いバンコクの中華街ヤワラートを訪問した。中国系住民は、陛下が彼らを他のタイ国民と分け隔てなく扱われたことを喜び、熱狂的に歓迎した。この訪問は第二次世界大戦中、戦後を通じてあった民族間の緊張を緩和するうえで絶大な効果をもたらした。中国系住民は国王に対する忠誠の意を示すべく、通りを掃除したり、食事やお茶などを用意したりした。暑い日だったが、お2人はとてもいきいきとされていた。幼少の頃形式ばらない雰囲気なかで育てられたためか、公式な場では硬い表情を見せることの多いアーナンタマヒドン国王ではあったが、国民の生活に触れ、彼らの悲しみや希望に耳を傾けることができる機会があれば、積極的に

バンコクの中華街ヤワラートを訪問



王宮の外に出かけられていた。隣にはいつも弟君が静かに寄り添い、さまざまな状況を観察し、学ぼうとされていた。

プーミポン国王陛下にとって即位後間もない1950年代は、新し

い状況に自身を適応させていく時期であったが、生涯を捧げることになる仕事への情熱は高まる一方だった。タイへの帰国にあたり、陛下は国王としてさまざまな仕事をするため心の準備をされていた。信頼を寄せる米国人、**フランシス・B・セイヤー**¹に宛てた手紙で、陛下は次のように心情を打ち明けられている。

「心がくじけないように努めています。スイスにいた頃も望みを失いそうになりましたが…。しかし、自分が正しいと思うことを信じて進まなければならないと十分に自覚

¹ セイヤーはラーマ6世、ラーマ7世両国王が信頼を寄せた顧問であり、ウィルソン米国大統領の娘婿であった。タイと米国の領有権問題の調停のためにタイへ来たが、タイ政府に雇われヨーロッパ諸国との領有権問題にタイ側の担当者として取り組んだ。タイ政府はセイヤーに「ブライヤー・カラヤーナマイトリー」という位階を授けた。また、その功績を称えて旧外務省と国防省を結ぶ通りの名を「カラヤーナマイトリー通り」と定めた。



しています。私は最善を尽くすことを約束し
ます」¹

タイの国王が果たす役割には固有の性質がある。タイの憲法とヨーロッパ諸国において国王の役割を定めている法律との間には、その役割の性質および公務の内容について違いがある。過去数百年もの間、タイの国王は統治において全権の所有者であり、人民にとっては神と同じ存在であった。この考え方はタイの700年という長い歴史のなかで徐々に発展してきたものである。タイの国王が時代を超えて人民の敬愛の対象となってきたのは、父親が子に対して示すような偉大なる慈悲の御心を人民に示してきたからであり、その原点はスコタイが王都であった時代に見出すことができる。

スコタイ時代、民は王を父親のように慕い、敬っていた。アユタヤ時代初期にはこうした心情と土着信仰、吉凶の兆候を信じる風習が一体となり、王を戦いの英雄として崇めるようになった。当時の東南アジアの戦争では戦略を決める際、戦闘能力と同じほど呪術に頼っていた。民衆にとって呪文を唱えたり吉凶の兆候を信じたりすることは生活の一部であり、日常の営みに大きな影響力をもっていた。

¹ 国王陛下からセイヤーに宛てた1950年3月21日付の手紙。Joseph J. Wright, Jr., *The Balancing Act*, Asia Books, 1991より引用。



このため人々は、戦いに勝利した支配者は神によって力を与えられたのだと信じていた。リリット詩『**タレンパーイ**（ナレースワン大王のビルマ戦勝利）』¹には、16世紀に民衆を外国支配から解放したとして今も語り継がれるナレースワン大王が、ビルマの王子との戦いの前に神を呼び寄せ、みずからの味方となり守ってくれるよう祈禱を捧げた様子が描かれている。

戴冠式の冒頭、儀式を司るバラモン僧はヒンドゥー教の神が戴冠に立ち会うよう、呼び寄せを行う。儀式がこうした神秘性を帯びることにより、民衆は指導者が神のごとき慈悲の御心をもって国を率いてくれるものと信じていることができるのである。タイの国王は日本の天皇のように「太陽の神の子孫」



として生まれついているわけではなく、またイギリスのヘンリー8世のように神から授けられた王権のもとで支配するのでもない。「トサピットラーチャタム（王者の十正道）」と「チャクラワディワットラタム（王者の徳）」によって国を統治するのである。MRクックリット・プラモート元首相は次のように述べている。

¹ パラマーヌチットチノーロット法親王（1790-1853）作。



「国王は神であり、かつ人間でもなければならぬ。難しいのはこの2つの間の境界線をどこに引くべきか、ということである。神としての領域を人間としての領域よりも多くすべきか、あるいは神よりも人間としてあるべきか、国王はその比率を正しく定めなければならない。それを間違えれば、大きな損失がもたらされるだろう」¹

この困難はときとして国王を少なからず悩ますであろうが、それは他の人間の理解を超えたものに違いない。国王は国がおかれている状況や、どんな問題でも国王がすべて解決してくれるという人々の永遠の期待から逃れることなどできない。タイ国王が下すすべての決断は、それが政府や国民、外国に対して与えるあらゆる影響を考慮した上でなされなければならない。憲法には「国王は尊敬すべき地位にあり、何人も侵すことはできない」² との条文があるが、そこには国民の国王に対する忠誠と敬愛の念が込められている。国王がこれに従いみずからを厳しく律しておられていることはだれもが容易に理解できるだろう。

¹ Vilas Manivat, *Kukrit Pramoj : His Wit and Wisdom, Writings, Speeches and Interviews Duang Kamol, 1983.*

² 仏暦2540年(西暦1997年)タイ王国憲法第2章「国王」第8条。



ある高級官僚は次のように述べている。

「陛下は新しい統治体制である立憲君主制の下での最初の国王であり、それゆえ、あらゆる責務が重くのしかかってきます。これは極めて困難なことであり、決して楽しいものではないでしょう。陛下はくつろいだ態度をとっておられるが、あらゆる物事の最終判断をみずから下さなければなりません。たとえそれが電報の文言のような瑣末な事柄であろうとも」

民主主義制度下の君主として、プーミボン国王は憲法で定められた義務と責任を負っている。陛下は法にもとづく国家元首であり、タイ国民の象徴的指導者でもある。その一方、何世紀にもわたりタイの国王に課せられてきた慣習的な義務と責任も負っている。国民を思いやり、幸福な暮らしを守るという伝統的な役割も果たさなければならない。タイ国王であることから陛下は逃れられないのである。

プーミボン国王陛下は歴代の国王と同様、2500年前の仏陀の時代まで遡る古代の教え「トサピットラーチャタム（王者の十正道）」に従っている。¹その教えには、王は国の指導者として、またすべての人民の模範として正しい行いをしなければならないと

¹ 国王陛下へのインタビュー、*Leaders Magazine, Volume 5, Number 2, April - June, 1982.*



書かれている。米国の著名な作家である**ヘンリー・ミラー**が「**真の指導者は導く必要などない、方向を指し示すだけで十分なのだ**」と述べたとおりである。

出家された国王陛下
(1956年10月)

国王陛下がみずから「**王の十戒律**」と呼ぶこの教えによれば、王は彼を必要とする者がいればいつでも、どこへでも、どんな場合でも助けなければならない。また、困難なときには救いの手を差しのべ、苦しみを取り除かなければならない。この教えは国王陛下が半生を通じて捧げてこられた貧しい、恵まれない人々のための活動に反映されている。1995年、大洪水が起きたとき、国王陛下はバンコク郊外の貧困層が住む地域の支援に力を尽く



托鉢中の国王陛下

し、また政府に問題解決のための長期計画を立てるよう促された。タイ国民にとってそれは決して驚くようなことではなく、むしろ慈悲を与える国王への信頼と敬愛の念をより一層深めるものであった。

陛下は国民が日常生活のなかで必要とする事物に関心を払うことにより、王制に再び重要な役割をもたせることに成功した。即位後に勉学のためスイスに戻った陛下は専攻を工学から政治学と法学分野に変更されたが、それは正義による統治、そして国民が必要とするときに救いの手を差しのべることについて学ぶためであった。

「トサピットラーチャタム」によれば、王は徳を備えた高潔な人物でなければならない。王は民衆のために私利を犠牲にし、つねに正しい行いをしなければならないのである。陛下が幼い頃、母君のシー



ナカリンタラー殿下はすべての時間を他人のために
使いなさいと教えることで、陛下の道德心を育まれ
た。殿下は毎週子どもたちに与えるお小遣いの1割
を、家の中央に置いた募金箱に入れるよう命じられ
た。月末になると子どもたちを集めて会議を開き、
どの財団、盲学校、または福祉活動に寄付するべき
かについて自分たちで決めさせた。国王陛下は幼少
の頃からつねに、他人のために働くよう、自己の所
有物の一部を犠牲にして人々のために尽くすよう
という教育を受けられてきたのである。

洪水被害の状況を
視察

**「それこそが、陛下が戴冠直後から活動を始め
られた理由なのです」¹**

¹ 1994年3月、国王考案プロジェクト特別委員会のスメート・
タンティウェーチャクン元事務総長へのインタビュー。



陛下は即位後間もなく、チットラダー王宮の広大な敷地の一部を農業のための実験と研究に使用するために提供された。その5年後にはホワヒン郡の所有地をハートサーイヤイ農園設立のために寄贈されたが、これは1975年に土地をもたない小作農民に王室所有地を与える「土地改革プログラム」の先駆けとなった。

国王とは、みずからの理想に忠実であり、民衆のために誠実に働かなければならない人間である。正直で、謙虚で、温和で、控えめで、礼儀正しく、怒りや不満を表に出さず、他者に迷惑をかけず、平和と非暴力の推進者でなければならない。プーミボン国王は1956年に出家して以来、瞑想に深い関心をもち実践されてきた。

さらに、指導者たる者は勤勉であり、あらゆる事に全力を尽くさなければならない。質素な生活を心



スワン・チットラダー
プロジェクト



がけ、みずからを抑制することができ、忍耐力に優れ、また民衆の願いを妨げるようなことはしない。タイでは民主主義が長く続いてきたが、国家の重要事に関しては政府も国民も国王陛下の助言に頼ってきた。また陛下ご自身も積極的に民主主義を支える役割を担ってこられた。

「我々タイ人は他国の民主主義の真似をする必要はありません。タイには固有の文化と考え方があるのだから、我々独自の見識をもってタイ式の民主主義を作るべきです」¹

プーミボン国王のもとで進められてきた変革、そして陛下の平和で民主的な国家への希求を理解するために、1932年に起きた歴史的な出来事、専制君主制から民主制への移行という統治体制の変化を、新しい時代の視点で振り返ってみる。当時、国王から絶対的な権力を奪った革命団も含めたほとんどの人々が立憲君主制以外の政治制度を望んでいなかったことについて、疑問を抱く人がいるかもしれない。実のところ、当時ほとんどの国民は民主主義制度がどのようなものであるかをよく理解していなかった。政変が起こったとき、国家元首であったラーマ7世プラチャーティボック国王にとって権力の移譲は半ば予想していたことでもあった。国王

¹ Office of His Majesty's Principal Private Secretary, *A Memoir of His Majesty King Bhumibol Adulyadej of Thailand*, 1987.



タイ国初の憲法に
署名するラーマ7世

自身、国家統治の権限を徐々に国民に移譲することを目指して国を導いていたからである。国民が政治に権限をもつような方向へ少しずつ導いていたことは、1935年の退位に際し、ラーマ7世が書かれた手紙の一節に国王自身の民主主義者としての志向が如実に反映されている。

「私はみずからがもっていた権力を喜んで人民に与えましょう。しかし私は、それらの権力を民の声に耳を傾けず専横的に利用しようとするいかなる個人や集団にも渡したくはありません」¹

¹ Benjamin A. Batson, *Siam's Political Future: Documents from the End of the Absolute Monarchy*, Cornell University Southeast Asia Program, 1974.



いかなる民主主義体制においても、一国の指導者は時勢に精通していなければならない。世界各国の国王のなかでもプーミポン国王は語学に非凡な才能を発揮されている。スイスで育ったため、陛下はフランス語もドイツ語も堪能である。しかし世界的にもっとも多く使われている英語もみずからの意思で学ばれ、情報技術の進歩をフォローするために十分な能力を身につけられた。陛下は音声学に精通していたために言語の基本をよく理解されているのである。

現在、英語は王宮内で第二言語として使用されている。国王陛下はこの言語を極めて高度なレベルで使いこなされている。時間に余裕があるときには海外の雑誌を翻訳されたり、英語で執筆をされたりしている。著名な作品の大部分は1970年代のもので、主として政治に関する多様な考え方に焦点を当てたものであった。また1994年にはウィリアム・ステューブソン¹の『暗号名イントレピッド (A Man Called Intrepid)』¹を、翌年にはフィリス・オーティ²によるマーシャル・チトーの伝記『チトー (Tito)』²をタイ語に翻訳された。陛下が『暗号名イントレピッド』を選んだのは、第二次世界大戦下

¹ “Intrepid” (本名 Sir William Stephenson) 大戦中ニューヨークに置かれたイギリスの情報機関「BSC」の長官 (1896-1989)。

² “Tito” (本名 Josip Broz) ユーゴスラヴィアの政治家 (1892-1980)。



の連合国で活躍したスパイたちの黒子役に徹するという強い意志や勇敢さを読者に教えてくれるからである。そこには連合国の結束の固さと、それを守るための自己犠牲も描かれている。また陛下は、**仏教経済学**に関する論文集に掲載するため、**E.F.シューマッハー**の『**スモール・イズ・ビューティフル (Small is Beautiful)**』の一部をタイ語に翻訳された。

『**ブラ・マハーチャノック**』は仏教の聖典『三蔵』に記された説話である。マハーチャノックとマンゴーの木についての物語で、質が良いほど欲望の標的となり、危機に瀕するものだという教えが込められている。1977年、国王陛下はラーチャパーティカーラーム寺院の**マハーウィーラウォン僧侶**の説法でこの物語に接し、深く興味をもたれた。



タイ語版『暗号名イントレピッド』



タイ語版『チトー』



そして、タイ語の原文に手を加え読者にわかりやすいよう英訳された。

マハーチャノックは努力を怠らず、またそれに対する見返りを一切求めることがなかった。その結果、王座に就き、卓越した能力によりミティラーの国に繁栄と富をもたらした。

陛下はマンゴーの木に関する記述の箇所ですのように考えられた。マハーチャノックは悟りを求めるため王位を捨て、国を去ることを望んだが、ミティラーには十分な繁栄がもたらされておらず、まだその時期ではないと考えた。それは、総督から象使い、馬飼いに至るまであらゆる者が、知恵も

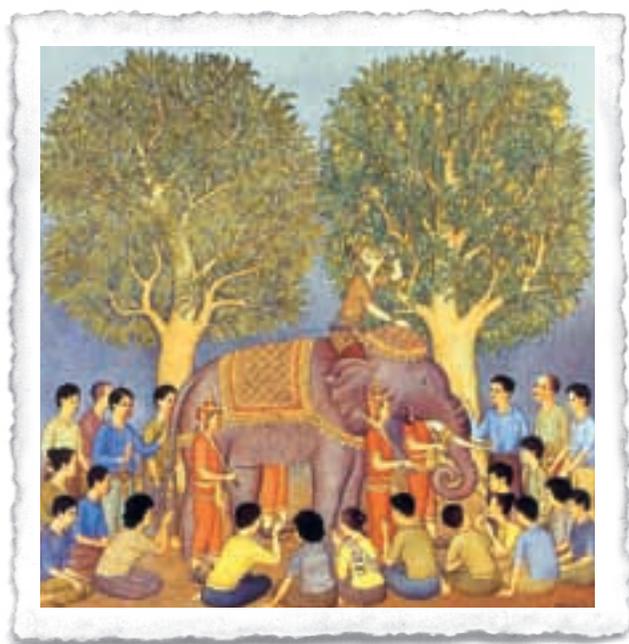


『プラ・マハーチャノック』



知識もなく、自分にとって何が有益であるかさえ理解できない「無明」の状態にあったからである。そのため、普遍的で広範な知識を学ぶための教育機関を作る必要があった。マハーチャノックは大学を設立し、またマンゴーの木の植え方や育て方、マンゴーの木を生き返らせる九つの新しい方法をみずから考案した。

国王陛下は現代の人々にも受け入れられやすいよう原文を一部修正し、マハーチャノックがすべての仕事を成し終えることにより、至高のタンマ（法）に到達することがより早くできたという自身の考えをつけ加えられた。



1988年に英訳が完成した『**プラ・マハーチャノック**』は、国王陛下の希望により在位50周年の記念すべき年である1996年に出版された。この本には、国民が建設的な思考をもって生きるための指針となるようにとの陛下の願いが込められている。また、この本を読むことで読者に忍耐力と英知、心身の健全がもたらされるかもしれない。

陛下はさまざまな言語を習得されたが、その才能は驚異的である。インドの古代言語であるサンスクリット語までも研究されたほどである。

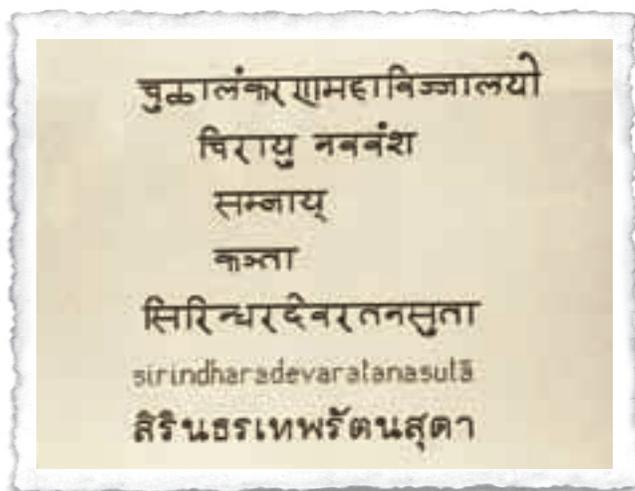
世界はコンピューター技術の進歩により急速に「地球村」化しつつあるが、国王陛下も早くから



コンピューターを研究されていた。陛下が最初にコンピューターを使われたのは1986年12月のことである。さまざまな楽器を用いて音楽の作詞と作曲を行われたが、作業にはかなりの時間がかかった。しかし、翌年になると「フォンタスティック (Fontastic)」というプログラムを使ってさまざまな大きさのタイ語と英語の字体をデザインされるほどになった。¹その後陛下は「**テーワナーカリー**」という字体の研究を始められた。パーリ語とサンスクリット語の専門家である**シリントーン王女殿下**や



¹ カンダー・タンモンコン『パリタット』第8部第2号、1987年。



国王陛下がデザインされた字体「テーワナーカリー」

MLチラユ・ノッパウオン氏を相談相手とし、みずからデザインした字体の監修も受けた。テーワナーカリーは「天人の都の字体」という意味で、サンスクリット語やプーラクリット語、ヒンドゥー語、マラティー語に用いられる。専門家の間でも文字数に関する見解が一致しないほどであり、初心者にとっては難解な文字である。陛下はこれ以外にもマッキントッシュ・コンピューター用のタイ語と英語の字体を2組デザインし、それぞれ「プーピン」、「タクシン」と名づけられた。



国王陛下が作られた新年の挨拶状





第8章 大切なひととき

国

王陛下はどんなことにも集中して真剣に取り組む性格の持ち主である。

それが個人的な楽しみであっても、

公務に対するのと違わぬやり方で完

璧に習得し、実践できるようになることを求める。

陛下の驚異的な集中力がどこから生まれてくるの

か、多くの人が不思議に思うほどである。

スイスのヴィラ・ワッターナーに住んでいた若き日

のプーミボン王子は手先が器用で、自分で

何かを作り上げることが好きだった。それは

例えば電動モーターにコイルを巻いたり、木を

削ってグライダーを作ったりすることであったが、

最高の仕上がりになるようあらゆる努力

を怠らなかつた。後年、水中に酸素を注入する

安価で効率的な装置「チャイパッターナー水

車」を発明されたのも、陛下が幼少の頃から

身の回りにある材料を用いた細かい作業をす

るのが得意であったことを考えれば不思議なことではない。

母君のシーナカリントラー殿下はいつも子どもたち

のそばに寄り添い、愛情をもって見守ってきた。



少年時代から多彩な趣味を楽しんだ



2人の息子はラジオを一緒に作ったこともある。陛下は**バドミントン**を愛好しているが、これは母君が健康のために親族や友人とされていたスポーツである。陛下が静養のため他の王族とともにクライカンウォン宮殿に滞在するときは、**セーリング**や**水上スキー**、それに**バドミントン**などのスポーツをされる。王宮の職員たちが一緒に加わることも珍しくない。

チットラダー宮殿内でバドミントンを楽しむ国王陛下。パートナーを務めるのは男子シングル元世界王者のウォン・ペンスン氏

写真撮影

シーナカリンタラー殿下は写真や映像を撮ることもお好きだった。国王陛下が8歳から**写真**を始めた



写真撮影は国王陛下の少年時代からの趣味であり、地方訪問の際は必ずカメラを携行される

のも殿下の影響である。陛下はグリーン地に黒い水玉柄の旧式箱型カメラ「コロネット・ミゼット」をわずか2スイスフランで購入した。初めて使ったフィルムの値段は25センチームだったが、現像してみると散々な出来だった。まともに写っていたのは1枚だけで、しかも他の人がどこか別の場所で撮影したものだった。しかしこの失敗は陛下が写真を熱心に学ぶためのよいきっかけとなった。持ち前の探究心を発揮し、カメラの仕組みや撮影技術を習得されたのである。

当時所有していたカメラには露出計がついていなかった。このため陛下は自分で光度を計測し、



正確な露出を定められるようになった。また、気に入ったレンズフィルターが市販されていないことを知って自作された。現在でも陛下はモノクロ写真を好んで撮影される。使っているカメラは新しいものではあるが、プロの写真家が使うような最高級モデルではない。かつて陛下は、タイのどこでも手に入る、普通の人が使っているようなモデルを使うのがよい、と述べられたことがある。

王妃陛下をモデルに
写真撮影中の国王陛下

国のために活動しているとき、陛下は類いまれな集中力を発揮される。この才能は写真撮影の際にも表れる。陛下は1つの事物や行為にじっと焦点を当てるという方法をとる。このテクニックは写真家の間で「インボルブメント・スタイル (Involvement

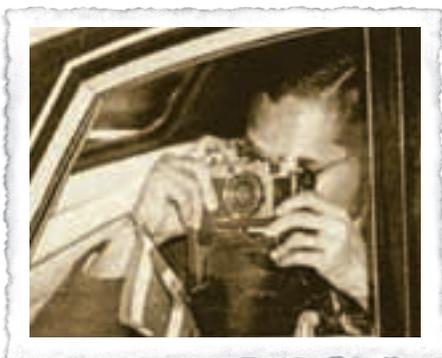


国王陛下が撮影された
王妃陛下のポートレ
ート写真

style)」¹と呼ばれ、被写体に対する撮影者の深い関心が作品に表れる。言うまでもないことだが、長年にわたり国王陛下の写真と絵画のお気に入りのモデルだったのは王妃陛下である。陛下の一連の作品の中でも特に印象深い写真がいくつかある。例えばウィーンのタイ大使館で撮影された作品では魚眼レンズが使われ、陛下の両手が大使館員たちをすっぽりと包みこんでいるように見える。また冬服姿の王妃陛下

を撮った「ウィンター・タイム (Winter Time)」は、キーライトの光を顔に集め、タッチライトを髪に当てることより、顔の表情、特に瞳の輝きが美しく際立った作品となっている。やはり王妃陛下を被写体にした「平和 (Peace)」という作品では「レンブラント照明」という技法が用いられている。顔の一部分のみに光を集め、背景は全体的に暗くすることで、作品の中央部だけが少しだけ明るくなる。これにより見る者の視線を興味を中心、つまり顔に集中させることに成功している。これらの作品からは、物事の核心を探り当て、明確な目標を定める陛下の姿勢を読み取ることができる。こうした姿勢は、あらゆる活動に反映されている。

¹ The Office of His Majesty's Principal Private Secretary, *A Memoir of His Majesty King Bhumibol Adulyadej of Thailand*, Bangkok Printing, 1987.



陛下は趣味を公務に有効に活用されている。写真は19世紀半ばにはタイで知られるようになり、ラーマ5世のお気に入りの趣味の1つでもあった。しかしワイドアングルの撮影技法を20年以上前にタイに紹介したのはプーミボン国王である。当時、陛下はどこへ旅行するときもカメラを携行された。1960年に両陛下が米国を訪問されたとき、陛下が車の中から集まった人々に向けてカメラを構えている姿が写真に収められている。また、1982年にバンコク遷都200周年祝賀行事のハイライトとして行われた王室御座船「スパンナホン」のパレードでも、船上から撮影する陛下の姿が見られた。タイ赤十字社やアーナンタマヒドン財団などの社会福祉団体を支援するため、陛下はみずから撮影した写真のスライドを寄付集めのためサイアム・ソサエティーやサーラー・チャルムクルン映画館で上映することを認められた。この活動は大成功を収め、数年にわたって続けられた。

(左) 米国を訪問した国王、王妃両陛下を歓迎する首都ワシントンの市民。
(右) 出迎えた市民の姿を写真に収める国王陛下



王室御座船スパンナホン



国王陛下のシンボルとしてもっともよく知られているのは**35ミリ版一眼レフカメラ**である。地方訪問の際、陛下はいつもカメラを首に提げている。地方の人々や風景を撮影するだけでなく、国王考案プロジェクトを立ち上げから記録するために利用している。また洪水や干ばつ、汚染の状況を写真に収め、新しい計画を立案したり助言を与えたりする際の参考にされている。プロジェクト実施地の地理的条件を記録した陛下の写真は、各機関との共同研究にも利用されている。一例をあげれば、南部ナラーティワート県バーチョの排水用運河プロジェクトでは国王陛下が工事の一連の過程を写真に記録されたが、これが後に現地担当者が住民と議論を行う際の有益な資料となった。このプロジェクトにより、湿地帯を干上がらせた後の酸性土壌で稲作が



地方訪問の際はカメラ
と地図を必ず携行する

できるようになった。また洪水を記録した写真は、多くの住民が危険で不衛生な状況におかれ、深刻な問題に直面していることを行政担当者に理解させるのに役立った。これらの写真は将来の計画立案の参考資料としても価値がある。

あるとき、国王陛下は同行のカメラマンたちに、彼らと自身の撮影法の違いについてこう述べられたことがある。



「カメラマンは国民の視点から私の活動を撮影しますが、私はまったく異なる視点から写真を撮ります。地方を訪れる際にはみずからの仕事に役立つ、必要と思われる写真を撮っています」

国王陛下は写真を撮るときはいつも真剣であり、写真がもつ媒体としての力をよく理解されている。タイ写真家協会に対し、美や娯楽のためだけでなく、社会のために写真を利用するよう勧めたことさえある。

「芸術は国の発展に貢献することもできるのです」

国王陛下の趣味は国民の間でもよく知られている。陛下がワット・プラケーオの壁画を撮影した写真集も出版されており、作品展も何度か開催されている。かつて陛下は撮影した写真を資料としてみずから管理されていたが、公務が多忙を極めるようになり、現在では職員が管理するようになった。

絵画

スイスで暮らしていた10歳のとき、写真を始めた直後のことだが、陛下は絵画にも興味を抱かれるようになった。この未知の世界に足を踏み入れるにあたり、陛下はいつものように十分な準備と研究を



王妃陛下をモデル
に肖像画を描く

された。本を何冊も読んで基本を学び、絵画の技法について尋ねるため画家のアトリエまで足を運んだ。¹ 実際に絵を描くようになったのは帰国後の1959年のことである。² 自由になる時間が限られているため絵を描くのは夜になってからのことが多かった。昼間の自然光の中で描いたものも何枚かあるが、たいていは人工の光を被写体に当てて描いた作品である。陛下は絵画にも多大な情熱を注がれた。作風はリアリズム、印象派、そして抽象画まで多岐にわたる。初期の作品は写実的であった。

¹ Chulathat Phayakharanon, “The King and Thai Art”, *Our King*, 1987.

² Bonnie Davis, “Paintings by His Majesty King Bhumibol Adulyadej”, Long Live His Majesty the King, *Bangkok Post*, December 5, 1989.



しかし次第に、小型、中型のキャンバスに鮮やかな色使いと力強く大胆な絵筆運びで描いた**抽象的、表現主義的な作品**が多数を占めるようになった。もっともよく知られている一枚に、年老いた女性の深い皺が刻まれた顔を描かれた1964年の作品がある。力強いタッチと大胆な色使いは、老いと貧困をどんな写真よりも見事に表現している。また何度も複製品が作られたため有名になったのが、色鮮やかな軍服姿の父君マヒドン親王と、王妃陛下の母君の肖像画で、いずれも1961年に完成した作品である。

(左) 国王陛下が描かれた王妃陛下の肖像画
(右) 王妃陛下をモデルにしたキュビズム風の肖像画

絵を描かれるとき、陛下は他の趣味のときと同様、他の人々も一緒に参加させ、自身が得た知識が彼らの役に立つよう心がけられている。チットラ



王妃陛下の肖像画

ダー王宮で働く職員のために絵画教室を開いたり、宮廷職員の肖像画をどれだけ早く描くことが出来るかを競うコンテストを開催したりもした。また著名な画家を招いて絵画や技法に関する意見交換も行われた。陛下の絵画に対する情熱は王宮の外ではほとんど知られていなかったが、1966年に開かれた第14回タイ国美術展に陛下の作品が数点出品され、



広く知られることとなった。人々は作品に感銘を受け、陛下が多様な分野で才能を発揮することに驚いた。

陛下の作品はタイの美術に貢献しただけでなく、タイ国民の間に美術を普及させるうえでも大きな役割を果たした。1965年には**シラパコーン大学**より陛下に**美術学の名誉博士号**が授与された。美術に関する国民の知識が深まり、多くの人々が関心をもつようになるにつれ、陛下の作品展をふたたび開いてほしいと願う声が高まった。これを受け1982年、**国立美術館**において陛下の47点の作品が公開された。この展覧会はおそらく、世界で初めて開かれた在位中の国王による個展であろう。

音楽

タイ国民に国王の趣味は何かと尋ねれば、ほとんどが「**音楽**」と答えるであろう。陛下の一番の楽しみは間違いなく音楽である。作曲家、演奏家、あるいは編曲者として、開発プロジェクトに対するのと違わぬ情熱を音楽に注いでいる。少年時代、陛下は音楽教師の家まで自転車でレッスンに通っていた。最初に学んだのは吹奏楽器で、10歳のときに小遣いでクラリネットを手に入れた。その後はピアノを習い始めた。当初はクラシックが好きだったが、



作曲中の国王陛下。
18歳のときに最初の曲「キャンドル
ライト・ブルース」
を作った

その後は当時人気の高かったジャズを好むようになった。陛下は**デューク・エリントン**に代表されるビッグバンドの演奏曲をもっとも得意としていた。若い頃の陛下はサックスを練習するとき、**シドニー・ベシェ**のソプラノ・サックスや**ジョニー・ホッジス**のアルト・サックスの曲を蓄音機で聴いていた。2人ともエリントン楽団のメンバーである。

陛下が作曲を始めたのはタイに一時帰国していた1945年、18歳のときである。兄のアーナンタマヒドン国王にブルースを作曲したらと助言を受けた陛下は、1946年に「**キャンドルライト・ブルース** (Candlelight Blues)」を完成させた。もっともこの作品が公表されたのは、陛下の著名な作品である「**夕暮れの恋** (Love at Sundown)」と「**フォーリング・レイン** (Falling Rain)」が発表された後のことである。

若き日のプーミボン国王を知る人はだれもが「控えめな若者」という印象を抱いた。スイス時代から



タイ帰国後を通じて仕えた職員は、母君のシーナカリンタラー殿下の教育が実際的な内容であったことに感心させられた。陛下は楽器の手入れについても学んでいた。

「陛下は楽器をすべて自分で手入れされています。近年では音楽家たちは他の者に楽器を運ばせ、手入れや調整も人の手に任せています。王宮内の楽団や、王宮を訪れる海軍や陸軍の士官学校、大学、警察などの楽団にとって、みずから楽器を選び、手入れをする陛下は見習うべき素晴らしいお手本となっています」¹

陛下の音楽活動はタイ社会にも大きな影響を与えている。あまりに広く社会に浸透していて、その役割に気づかないほどである。陛下は教育支援に力を入れ、学校の建設や奨学金の授与、研究センターへの援助などを行っている。しかしタイを代表する名門校であるチュラーロンコーン大学、タマサート大学、カセートサート大学の校歌が国王陛下の作曲によるものであることはあまり知られていない。これらの校歌は学生たちの愛校心とアイデンティティを育て、自分の大学に誇りをもち、団結する求心力となっている。

¹ 1994年、クワンケーオ・ワッチャロータイ氏へのインタビュー。



チュラーロンコーン大学の楽団と共演 (写真右)

国王陛下は多芸多才の持ち主であり、吹奏楽器からピアノまで幅広い種類の楽器を演奏される。陛下の音楽、特にジャズに対する愛情は、はかりしれないほど強いものである。ある日、侍医が背中中の痛みを訴える陛下にサックスの演奏をしばらく控えるよう求めたところ、陛下は軽くて座ったまま演奏できるクラシックギターの練習を代わりに始められた。陛下の音楽を愛する気持ちは深く、世界の著名な音楽家たちと共演する機会があればその好機を逃すことはなかった。レス・ブラウンは毎年陛下の元を訪れていたし、ベニー・グッドマン、ライオンネル・ハンプトン、スタン・ゲッツといった「伝説



ニューヨークでベニー・グッドマンら著名な音楽家たちとの共演を楽しむ(1960年)

的」な演奏家たちも招かれて陛下と共演した。陛下は音楽家、作曲家、演奏家らの一団に対し、芸術における成功の秘訣は自分らしい作品を創り出すことにあり、流行や他人の考えに左右されないことが大事であると述べられたことがある。

金曜日の夜は陛下にとって音楽のひとときである。**王宮内**で編成された自身の楽団との一夜の共演は、1週間の仕事の緊張を解きほぐしてくれる。王宮職員とプラチェンドゥリヤーンなど著名な音楽家で構成されるこの楽団は「**オー・ソー・ワン・スック**（ワン・スックは金曜日の意）」と呼ばれている。「オー・ソー」は陛下の設立したラジオ局がある「**アムポーンサターン宮殿**」のタイ語の頭文字をとって名づけられたものである。この楽団との共演は陛下にくつろいだひとときをもたらすだけでなく、陛下の活動を伝えるうえでも役立っている。



「オー・ソー・ラジオ」
で流す曲を選ぶ
(1952年)

楽団の演奏は陛下のラジオ局を通じて多くの人々が楽しんでいるが、番組ではポリオなど伝染病の予防ワクチン接種に関する情報も紹介される。陛下はまたアマチュア無線愛好家でもあり、チットラダー王宮内にも最新の無線送信機器を所有されているほどである。

陛下はタイの伝統音楽の保護にも取り組まれている。1966年4月6日、陛下は大勢のタイの音楽家や作曲家らとの謁見で、音楽家協会の設立を提案



された。陛下の助言に従い彼らのうち数名が音楽家クラブを設立した。これが後に**タイ国音楽家協会**へと発展し、チャクラパンベンシリ親王殿下が初代会長に就任した。

ラジオの周波数を調整する国王陛下

セーリングとヨット作り

陛下の趣味として音楽とならび国際的によく知られているのがセーリングである。若い頃の陛下はセーリングにまったく関心がなかった。海が好きで水泳が得意だった陛下が初めに興味を示したのは手漕ぎボートだった。一緒に漕いだことのある**MCピーサデート・ラッチャニー氏**は、陛下は初め



「東洋と西洋の音楽を融合し、また卓越した作曲の才能によりオーストリア国民の模範となった」としてウィーン市音楽芸術学院は国王陛下を23番目の名誉会員に任命した

の頃セーリングにまったく関心がなかったことを憶えている。ある日、プラチュアプキーリーカン県ホワヒンにあるクライカンウォン宮殿前の海でボートを漕いでいたとき、陛下はMCピーサデート氏が微風のなか苦労しながらヨットを操る姿を目にされた。陛下は自分の手漕ぎボートの方がヨットより早く進むことを面白がったが、ヨット自体には関心をもたれなかった。その後しばらくして、陛下はMCピーサデート氏が使っていたヨットより早いものを自分で作ろうと思いつかれたのである。



ヨット作りを思い立ったとき、プーミボン国王は既に優れた木工技術を身に付けていた。スイスのヴィラ・ワッターナーで暮らしていた頃にはどんなものでも自分で作っていたからだ。置物として飾るだけでなく実際に飛ばせるグライダーも作られた。木の部品を削り、軽くてよく飛ぶように機体を設計された。陛下は手作りのボートや船の模型も作ったが、これらは細部にいたるまで精巧な仕上げが施されている。

陛下の作品に王室専用船「シーアユタヤ号」の模型がある。これは陛下の模型作りにかかる時間と忍耐力を示す好例である。錨鎖や砲台を備えた全

ヨットを運ぶ国王陛下
下(左から2番目)と
MCピーサデート氏
(右端)





シーアユタヤ号の
模型を製作

長24インチの模型は実物そっくりの出来栄である。また、陛下が大切に保管している書類の中に1950年にタイ帰国の際に乗船した**セランディア号**に関する詳しい資料があるが、陛下がはたしてこの船の模型を作る予定があったかどうかは不明である。

1964年の誕生日を迎えた2日後、陛下は模型ではなく実物のヨット作りを始められた。国際等級で「エンタープライズ級」にあたるこのヨットは英語の「Royal Pattern」から「**ラーチャパテン**」と名付けられた。ヨットについて多少の知識があるMCピーサデート氏の助けを得て、チットラダー王宮の裏手にある作業場で製作された。



完成したシーアユタ
ヤ号の模型

毎日の公務が終わると陛下は仕事場へ向かい、



ヨットを作り続けた。作業しやすいよう白い半袖シャツ、素足にスリッパという出で立ちで、設計図通り丁寧に寸法を測りながら熱心に材料を切ったり削ったりされていた。部屋の中はあっという間に木屑で埋まった。作業は順調に進んだが、1つだけ心配なことがあった。それは、船体を作業場の入り口から運び出せるかということだった。



チットラダー王宮内で
ラーチャパテーン号を
製作する (1964年)

ようやくラーチャパテーン号が完成すると、すべての点でナンバー・ワンであるという意味を込めて



最後の仕上げ

製造番号を「11111」とした。陛下、MCピーサ
デート氏、そして数名の助手が苦勞しながらヨット
を横向きに倒してなんとか作業場のドアから運び
出すことに成功した。そしてついに、実際に水に浮
かべるときがきた。しかしここはバンコクであり、
(毎年のように起こる洪水は別として) 広大な海など
ない。そのため、チットラダー王宮を囲む運河で
「進水式」を行うことになった。

あの狭い運河で国王陛下がセーリングをされる姿
など、今では想像することすら難しいであろう。
陛下は完璧な技能を身につけようと考えられ、翌年



もう1艘のヨットを製作された。これはタイで初めてとなる国際等級「OK級」のヨットで、「ナワルーク号」と命名された。陛下はその後も何艘か製作されたが、この新しい趣味にどれほど情熱を注いでおられたかがわかる。

陛下はOK級のヨットをさらに3艘製作し、それぞれ「ベガⅠ」、「ベガⅡ」、「ベガⅢ」と命名された。1966-1967年の間にはモス (Moth) 級を3艘作られた。このうち1艘目は「モッド (Mod)」¹ という名で、全長11フィート、幅4フィート55インチ、帆の面積72平方フィートであった。2艘目は全長が4インチほど長い「スーパー・モッド

¹ タイ語の“mod”は“あり”(蟻)の意味。



シャム湾でヨット
を操る国王陛下

(Super Mod)」と名づけられた。3艘目は全長が7フィート9インチ、幅3フィート4インチしかないため「マイクロ・モッド (Micro Mod)」と名づけられた。その後、陛下はヨットを作るよりも操縦する方に集中されるようになった。

プーミポン国王はセーリングの選手としてタイ国内外で知られている。陛下の旺盛な競争心を示すエピソードがある。あるとき、英国のエリザベス2世女王陛下の夫君であり、英国海軍の職業軍人でもあった**エディンバラ公爵フィリップ王子殿下**が、休暇のためタイを訪れていた。プーミポン国王陛下



とフィリップ王子殿下はシャム湾東岸のパタヤと沖に浮かぶラン島の間でレースをすることになった。ラーチャワルン・ヨットクラブを出発し、ラン島を回ってスタート地点に戻るコースで、M.C.ピーサデート氏を伴った陛下は終始リードを保った。フィリップ殿下は後に、このレースがタイ滞在中でもっとも印象に残る出来事であったと回想している。しばらくして、陛下の元にフィリップ殿下から感謝の贈り物が届けられた。それはタイにはない「カタマラン」という双胴のヨットで、陛下は遊び心たっぷりに「プラー・ドゥック (Pla Duk)」と名付けた。プラー・ドゥックとはタイ語でナマズという意味で、愛すべきライバルの爵位名「デューク・

国王陛下と「マイクロ・モット」号。「モット」号、「スーパー・モット」号とあわせ英国でモス級に登録された

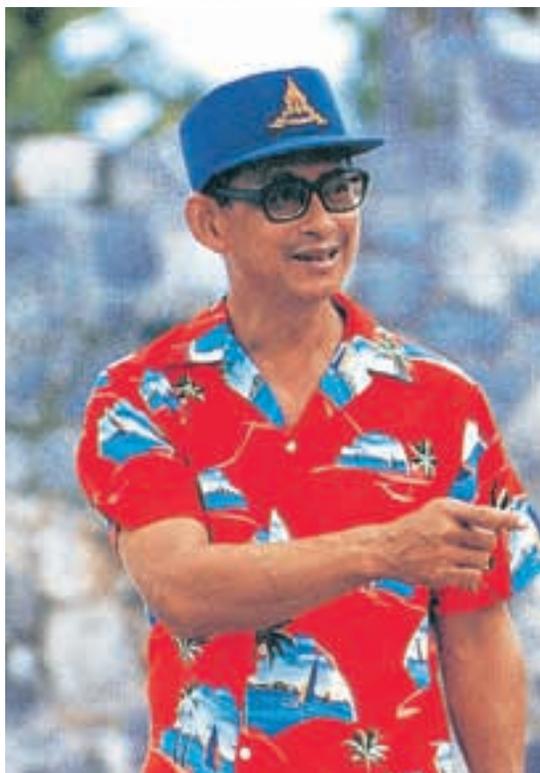


オブ・エディンバラ (The Duke of Edinburgh)」に引っかけでの命名である。こうした言葉遊びには陛下のユーモア好きな性格が表れている。

1965年に開かれた**東南アジア半島スポーツ大会 (SEAP Games)** 評議会で、ルワンチャート・トラカーンコーソン警察大將は2年後の1967年12月の第4回大会開催国としてカンボジアを提案し、可決された。しかし開会のわずか10ヶ月前、カンボジアは評議会からの脱退を表明した。タイを除く5カ国は準備時間が少なく代わりに開催を引き受けることは不可能と伝えてきた。第5回アジア大会を開催したばかりのタイには競技会場や設備が整っていたため、この役目を果たすことになった。

タイでは限られた時間のなか開催準備が進められた。開会式の1週間前、チットラダー王宮内の広場で第4回SEAP大会の聖火点灯がプーミボン国王陛下によって行われた。陛下は290名の選手と48名の運営委員らを前に次のように述べられた。

「わが国が栄えある開催国となった第4回SEAP大会がいよいよ来週開会されます。選手、運営担当者、そして観衆が国の誇りと開催国としての責任をもち、この榮譽にふさわしいふるまいをすることを期待しています」



この大会は多くの面で「特別」であった。選手村の収容人数が十分でなかったため、選手たちはさまざまなホテルに分かれて宿泊した。なかにはアジアホテル最上階の豪華客室を割り当てられて大喜びした選手たちもいた。

この大会でタイ国民の注目をもっとも集めたのは**パタヤ湾**で行われたセーリング競技である。フライング・ダッチマン級、エンタープライズ級、



第4回SEAP 大会の
セーリング競技OK級
で同点優勝を果たした
国王陛下と長女のウ
ボンラット王女殿下



OK級、スーパーモス級の4クラスで競技が行われたが、大会のハイライトはなんといってもOK級のレースであった。ゼッケン番号TH27とTH18をつけて参加したのが、国王陛下と長女のウボンラット王女殿下であったからである。

お2人はともに3回のレースで1位に、2回のレースで2位に入り、優勝に手が届く位置にいた。最後から2回目のレースで陛下は2つ目のマーカーをミスしてリタイアし、王女殿下が1位となった。陛下が最終レースで1位になり、王女殿下が3位になれば、金メダルは陛下のものとなるはずであった。

国王陛下と王女殿下の決戦の日は、スコールが降るあいにくの天候だった。パタヤ海岸をスタート



した陛下は、荒波のなか姿勢を保つのに苦労していた王女殿下と競り合いを演じられた。陛下はヨットを巧みに操り、復路でマレーシアのラザーリ・ルージン選手を簡単に追い抜いた。突然風向きが変わり、3番手だったウボンラット王女殿下は前にいたルージン選手を抜いて2位でゴールインした。国王陛下と王女殿下が1位と2位でゴールし、総合で同点となったお2人が同時優勝を果たすという快挙に国中が沸き返った。これはタイのスポーツ史上に残る出来事だった。タイでは儀礼上、他の者が国王の首にメダルをかけることは認められていない。このため、表彰台に上がった国王陛下にシリキット王妃陛下が金メダルを手渡し、陛下が

国立競技場で行われ
表彰式で、国王陛下
はシリキット王妃陛下
から金メダルを授
与された(1967年
12月16日)



王妃陛下から金メダル
を授与されるウボンラ
ット王女殿下

みずからメダルを首にかける
こととなった。

陛下のスポーツマンとしての
活躍は、強靱な精神力に支
えられたものである。陛下の
考えでは、スポーツには教育
のさまざまな要素が凝縮され
ている。

「スポーツは子どもたちに
忍耐力と勇気、勝利と敗北の
意味、健康、力強さ、心身の
能力について教えてくれま

す。子どもたちはスポーツを通じてよき国民となる
でしょう。これは私の願いです」¹

陛下は自分でスポーツをされるだけでなく、他の
人々にも熱心に勧められた。陛下はスポーツについ
て「心身をともに鍛え、その人の進歩の結果を計る
手段を与えてくれる」とも述べられている。²

また、陛下はスポーツが国と国の間の壁をとり
除き、異なる国の人々の間に友情を生み出すことも
よく理解されている。ムエタイ(タイ式ボクシング)

¹ Boonsom Martin, and others, “Our King and Sports”, *Our King*, Dhurakijpundit University, 1987.

² *Ibid.*, p.86.



が国際的に注目を集めるようになったとき、陛下は「興味深いことにムエタイには独特の要素が多く含まれています。それらが格闘技としての有効性を高め、また外国人にとっては大きな魅力となっているのです」と述べられた。¹

ムエタイとその国民にとっての意義に関するお言葉は、陛下の国を思う気持ちの表れそのものといえる。

「ムエタイは、実は国家の安定と発展に深く関係しています。ムエタイは護身術を起源とするスポーツです。昔からタイの戦士はみずからの身を守るためにその技を磨いてきました。これは現代にもあてはまります。国を守るためには戦うだけでなく、国を発展させるという方法をとらなければなりません」²

陛下は国と国民のことをどんなときにも気遣われている。そしてこれこそが、国民の陛下に対する心からの忠誠と敬意の源泉となっているのである。

「スポーツは国の発展に寄与する」という考えに

¹ 1973年7月3日、チットラダー王宮でのタイ国プロボクシング協会幹部に対するお言葉。

² 1970年10月29日、チットラダー王宮でのムエタイ振興チャリティ試合を企画したアーナンタマヒドン財団関係者に対するお言葉。



バドミントンを楽しむ

は、タイの安定を確固たるものとするために陛下が果たしている役割の一端がうかがわれる。



地方訪問の際、陛下に蓮の花を手渡すため長時間待ち続けていた老女をねぎらう



第9章 大地の王

タイ

国王に冠せられる称号の一つ

「プラチャオ・ペーン・ディン」

は、タイ語で「大地の王」を意味する。国土を守ることは王の役目

であり、プーミボン国王が国民のために環境保護や農業開発の活動に力を入れる理由がこの点からも理解できる。MRクックリット・プラーモート元首相は次のように述べている。

「国王陛下はこの役割にすべてを捧げて真摯に取り組んでおられます。それは協同組合の実験プロジェクトや、山岳民族による森林破壊を防ぐ活動、人工雨計画などの成功からも明らかです」¹

国王考案プロジェクトの始まりは1952年まで遡ることができる。この年、陛下の指示によりプラチュアプキーリーカン県ホワヒン郡ホワイモンコン村で道路とダムが建設された。

¹ Steve Van Beek (ed.), Kukrit Pramoj : *His Wit and Wisdom*, Duang Kamon, 1983.





日々の暮らしについての国民の話に耳を傾ける

1952年に始まったいくつかの**地方開発プロジェクト**には、農民が自力で生活を改善するのを助けるという陛下の考えが込められていた。陛下は開発プロジェクトの資料を研究し、バンコクのドゥシット王宮内の敷地で実験を重ねた。その成果はすぐに全国の開発に応用された。実験の数はプロジェクトの成功とともに次第に増えていった。

初期の国王考案プロジェクトのほとんどがバンコクやクライカンウォン王宮のあるプラチュアプキーリーカン県ホワヒンの周辺で行われていたが、一方で国王、王妃両陛下は1953年から54年にかけて中部スンプリー県、アーントーン県、シンブリー県へも足を運ばれた。両陛下は出迎えた国民に挨拶しようと車をしばしば止められた。国王陛下は当時の新型カメラ「**コンタックスII**」¹を使って国土や国民の姿、そして若く美しい王妃陛下のポートレートを撮影された。国王陛下は人々に生活の様子について尋ね、彼らの話真剣に耳を傾け、また彼らの要望を断ることもなかった。こうした姿勢は、国民の抱える問題を知るため平民の姿に身をやつして地方を巡った陛下の祖父、**ラーマ**

¹ 現在はラーマ9世公園博物館に展示されている。



国王、王妃両陛下は在位初期に国内各地を頻繁に訪問された



5世チュラーロンコーン大王にも通じる。歴代タイ国王のなかで在位期間が最長となったプーミポン国王は、タイの全県を訪問した最初の国王であり、またバンコクからみずから車を運転し697km離れたチェンマイまで走破した唯一の国王でもある。

米国が新しい遊園地、ディズニールランドの完成を祝っていた1955年、両陛下はもっとも貧しく、開発の遅れた地方である東北部を訪問された。当時（現在もそうだが）のタイ国民の半数以上は農民である。国王陛下はこの大多数を占める社会的弱者たちのために多くの労力と時間を費やされてきた。その理由を尋ねられた陛下は、「**農民は国家を支える背骨である**」¹にもかかわらず、都市住民より

¹ 1967年6月27日、『Look』誌の Gereon Zimmerman による国王陛下へのインタビュー。



国民との対話

ずっと貧しい生活を強いられているからだ、と答えられた。陛下は農業開発の問題を解消することに特に力を注いでこられた。国民の生活と健康の改善をめざす試みのなかで、陛下は慈善の精神によりお金や物を与えるという手段はとられなかった。その代わりに、農民たちが外からの援助に頼らずに自力で持続可能な開発を行う力をもてるよう支援されたのである。

初期の国王考案プロジェクトの1つに**淡水魚の養殖事業**がある。1952年、陛下は当時養殖魚として人気のあった「**プラー・モーテート**（モザンビーク・ティラピア）」をチットラダー王宮の池で養殖できるか、漁業局に実験を依頼された。陛下は以前、この魚を当時住んでいたアムポーンサターン宮殿の池で飼っていたことがあった。稚魚の飼育が容易で増殖も早いことを知っており、国民の役に立つの



ブルー・モーテートを政府職員や農民に贈るため、
チットラダー王宮内の養殖池に放流（1953年11月7日）



ではないかと考えられたのである。

漁業局がペナンからこの魚を仕入れて養殖試験を行ったところ、目覚ましい成果をあげた。翌年、陛下はプラー・モーテートの成魚を全国の村役場の職員や村民に下賜された。

魚の養殖に対する陛下の関心は海外でも知られるようになった。驚くべきことに、アジアのある国のロイヤルファミリーにも同じ分野に興味をもち、専門的に研究されている方がおられた。日本の明仁皇太子殿下（当時）である。明仁殿下は栄養が豊富で美味とされるナイル・ティラピア50匹を国王陛下に贈られた。陛下はこのプレゼントを喜ばれ、チットラダー王宮内のコンクリートの水槽で育てるよう指示された。その後100㎡のより大きな池に移したところ、養殖は大成功を収めた。増殖の一途をたどるこの小さな賓客をもてなすため、陛下は70㎡の大きさの池をさらに6つ、敷地内に作らせた。

1年後、陛下は体長3-5cmの幼魚1万匹を漁業局に与え、全国の漁業センターで養殖するよう指示された。ここでさらに数を増やし、農民たちに配布するためだった。

当初、農民は初めて目にする外来魚を自分の池で飼ったり食べたりすることに不安を感じた。この不安を解消するため、陛下は日本からやってきた



(上) チットラダー王宮内の養殖池にプラー・ニンを放流する
(下) プラー・ニン



この魚に「**プラー・ニン**（プラーは魚、ニンは尖晶石の意）」という上品なタイ語名を授けられた。

ペッチャブリー県フ
ワイサーイ村研究開
発センターで魚を池
に放流する

それから1年後の1976年、新たにタイの魚の仲間入りをしたプラー・ニンは全国の漁業センターで養殖され、農民たちに分け与えられることとなった。陛下がチットラダー王宮敷地内の8ヶ所の養殖池で育てたプラー・ニンは、毎月漁業センターへ移送された。急増する需要に対応するため、1971年には王宮敷地内により大きな養殖池が作られた。試験期間中は陛下自身が300匹のプラー・ニンを管理していた。プラー・ニンの外見は他のティラピアと似ているが、食べてみるとタイ人が



好むプラー・チョン（雷魚）のような味がする。プラー・ニンには他にも骨が少ない、多様な環境への適応力がある、繁殖が早いなどの長所がある。

陛下は貧困対策プロジェクトに魚の養殖を活用できると考えられた。

「水産資源開発を国土の実情に合わせて進める必要があります。川や運河、池など自然の水資源は魚の養殖場として活用し、地元住民が恩恵を受けられるようにすべきです。水辺には農作物を植えるのがよいでしょう。新しく掘った池は水不足の問題に悩まされることが多く、一方で洪水になると水が溢れて魚が流れ出す恐れがあるためです」¹

自然資源を活用するこの手法は、国王陛下が**ベツチャブリー県チャアム郡フップカボン村**に作った協同組合で1966年に実施された。

熱心に漁業を研究された陛下は、汚れた水のなかでも生きられる魚と、きれいな水にしか棲むことができず、汚れた水に入れるとすぐ死んでしまう魚がいることに気づかれた。陛下は汚れた水でも生きられる品種は水中の有機物を食べるのではないかと

¹ 国王考案プロジェクト特別委員会『プーミボンアドゥンヤデート国王陛下と開発活動』、バンコク出版、1987年。



いう仮説を立てた。実験の結果、仮説は正しいことが証明され、この知識が水質汚染問題の改善に応用できることもわかった。しかし、単に魚を養殖して池や川に放流するだけでは十分ではなかった。外部から入ってきた商人たちが魚を獲り、地元住民よりも多くの利益を得ていることがしばしばあったからである。陛下は水産資源の効果的な利用のため、漁業権を登録制にするよう助言された。さらに全国の漁業センターに対し、漁獲量を管理すべきだと伝えられた。当時、センターの業務は魚を養殖することのみであったが、陛下は農民が自力で養殖できるように支援すべきだと助言された。また農民がグループを作ることにより販売力を高め、仲買人に

さまざまな種類の魚を放流する国王、王妃両陛下とシリントーン王女殿下(左端)



よる不公正な取引を減らすとともに、魚の数を一定に保つようにすることも勧められた。これにより、農民が長期的に利益を享受し、生活が安定すると考えられたのである。

この活動は陛下自身が当初予想もしなかったほどの高い評価を得ることとなった。1967年には国連食糧農業機関 (FAO) から、タンパク質の豊富なこの魚を飢餓に苦しむバングラデシュの人々に送ってほしいとの要請があった。陛下はただちに50万匹のプラー・ニンの稚魚を国連児童基金 (UNICEF) の飢餓救済キャンペーンを通じて寄贈された。今日でもバングラデシュの川や池に、タイと日本の両国に起源をもつ魚の子孫が暮らしていることだろう。

チットラダー王宮での養殖プロジェクトは食糧を求める農民の声に直接応えるものであったが、陛下は環境問題にも同様の関心を払ってこられた。1960年から61年にかけて、陛下は**森林保護**に真剣に取り組むため、王宮敷地内の庭園で森林作りの実験を始めた。全国の山々からさまざまな品種の樹木を集めて栽培するとともに、環境に関する研究も行われた。そこはタイの固有種が一同に揃った樹木の博物館さながらであった。陛下は「**ヤーンナー**」と呼ばれるフタバガキ科の樹木¹が経済価値の上昇

¹ 学名 *Dipterocarpus alatus* Roxb.



国民がタンパク質豊かな食事を取ることができるよう、養殖した魚を放流される

に伴い乱伐されていることを知った。この時期、ヤーンナーはタイから消えてしまうほど危機的な状況にあった。これを憂慮した陛下は「タイの森林資源を将来にわたり持続的に利用していくためには、この木の乱伐は大きな損失になる」と考えられた。このように仮説を立てて考えるのが陛下のいつもの手法である。陛下は新しいプロジェクトを始めるときには失敗のリスクが伴うことももちろんご存知であった。

陛下は王宮内での樹木育成プロジェクトの支援をカセートサート大学に要請するとともに、同大学森林学部に対しヤーンナーの研究を依頼された。現在NGOなどが熱帯林の早急な保護を訴えているが、30年前、森林の育成をお考えになったのは国王陛下ただ1人だった。宮殿敷地内の**実験林**の樹木コレクションは貴重な自然の財産として、また重要な研究



センターとして、関係機関や学生グループに見学が認められている。

ワチラロンコーン皇太子殿下も幼少の頃からこの実験林で木を植えてこられた。植樹は殿下誕生日の恒例行事の1つであった。殿下は自身の通うチットラダー学校の生徒たちに伴われてこの行事に出席された。**チットラダー学校**は国王陛下が自分の子どもたちと一般の王宮職員の子どもたちがともに学べるよう設立した学校である。平均年齢9歳ほどの子どもたちが道具を手にし、木の苗を植える穴を力を



国王陛下がヤーンナーを植えられたチットラダー王宮内の実験林



皇太子殿下誕生日を記念し
ヤーンナーを植樹される両
陛下（1961年7月28日）



チットラダー学校の同級生とともに植樹のため実験林
の土に鍬入れをされる皇太子殿下（左から2人目）



合わせて掘った。

皇太子殿下にとってこの行事は環境保護活動に関わる最初の公務であり、国民のために尽くす父、国王陛下を見習ったものだった。現在、この実験林は森と呼べるほどの規模になっている。中へ足を踏み入るとタイ全土から集められた多様な種類の樹木が生い茂り、涼しさと静寂が人々を魅了する。森の内部に縦横に巡らされた小道は籐の蔓のように細く曲がりくねり、ぬかるんだ場所もしばしばあるものの、緑の屋根に覆われた平穏な空間が都市の喧騒を忘れさせてくれる。

チットラダー王宮でのもう1つの国王考案プロジェクトに、1961年に国王陛下の要請により稲作と穀物の輪作試験を行うため農業局が始めた「**稲作プロジェクト**」がある。農民に最大の恩恵を与える方法の実用化を目指し、データの収集と分析が行われた。プロジェクトの初期段階では陛下も多くの作業に関わられた。例えば、使用する化学肥料や有機肥料を自分で選ばれたり、種まきから収穫、脱穀までコメ作りの各段階に立ち会われたりした。土を耕すためにタイ人が発明した「**クワーイ・レック**（鉄の水牛の意）」というトラクターに似た機具を自分で運転されたこともあった。現在、この実験水田はチットラダー学校の生徒たちの実習にも使わ



れている。稲作やコメ収穫後の穀物の輪作、国内各地の気候条件に合った品種の持続可能な栽培について学ぶことができる。近年では外国産のコメをタイの気候で丈夫に育てることを目的とした交配試験も王宮内の研究所で行われている。

稲作プロジェクト開始後の1962年、国王陛下は個人資産30,000バーツと政府、民間双方から提供された国内産および外国産の乳牛6頭を元手に、チットラダー王宮敷地内に作った牧場で「**スワン・チットラダー酪農プロジェクト**」を始められた。その目的は乳牛の適切な飼育方法を一般の農民に広めることであった。毎日生産される牛乳を貯蔵するための冷蔵庫も新たに購入された。牛乳はドゥシット王宮内に勤務する職員たちに販売され、最初の年には35,000バーツの売り上げがあった。他の地域からも購入の希望が寄せられ、配達手段は自転車からオートバイへと変わった。

1969年12月7日、牛乳販売から得た収入を元手に建てられた「**スワン・ドゥシット粉ミルク工場**」の落成式が行われた。式に臨まれた陛下は、次のように述べられた。

「この工場は農民や酪農に関心をもつ人々にとってモデルとなるものです。このタイ初の粉ミルク工場がタイ国民自身の手で設計、建設さ



チットラダー王宮内の実験水田で「クワイ・レック」を
運転される国王陛下と皇太子殿下



実験水田での田植えを見学される国王陛下と皇太子殿下



実験水田で稲刈りを見学される国王陛下



実験水田に種籾をまく国王陛下と皇太子殿下（1961年7月16日）

れたことを誇りに思います。このプロジェクトに関する情報が必要な人や、自分のためだけでなく社会に役立てたいと考える人は、いつでも工場を見学することができます。もし問題点を見つれたり提案があったりしたら、どんなことでも話してください。建設的な意見は社会に恩恵をもたらし、タイにおける乳製品生産の発展に貢献するでしょう」¹

¹ 1969年2月、スワン・ドゥシット粉ミルク工場開所式でのお言葉。



スワン・チットラダー牛乳集荷センター



牛乳集荷センターでの瓶詰め作業



スワン・チットラダー牛
乳集荷センターの製品



この工場では、自然の味と甘く味付けしたものの2種類の粉ミルクを生産している。当初は小袋が1パーツ、大袋が5パーツであったが、1970年から79年にかけて市場の変化に対応するため値上げが行われ、大袋は30パーツになった。1974年には年間収入が240,000パーツに達した。この工場は現在も操業を続けている。

1973年には陛下の考案により「スワン・チットラダー牛乳集荷センター」が建設された。センターでは資金の乏しい協同組合を支援するため余剰牛乳を農民から買い取り、スワン・ドゥシット粉ミルク工場へ加工用に販売した。このセンターの設立はタイの酪農産業の発展にとって大きな意味をもつものであった。この活動を通じて多くの酪農従事者が経済や経営の基礎知識を得ることができ、事業の立ち上げから運営までの過程を学んだからである。



また、牛乳集荷センターや粉ミルク工場から得た利益は他の国王考案プロジェクトの原資となり、一般の人々に広く恩恵をもたらすこととなった。1973年6月の牛乳集荷センター開設の際、牛乳から脂肪分を分離するスイス製の機械が導入された。脂肪分は1時間2,000ℓの生産能力をもつ遠心分離



機を使ってバターに加工された。翌74年に行われた赤十字社のフェアで一般向けに売り出したところ、大人気となった。急増する需要を満たすため機械をフル稼働させたところ1年もたたぬうちに故障し、新しい機械を買わなければならないほどであった。

スワン・ドゥシット粉
ミルク工場の製品

農民が国の経済や社会にとってどれほど重要な存在であるかについて、国王陛下は政府に繰り返し説いてこられた。陛下は1960年、「**プララーチャピティ**・**プートモンコン**・**チャロット**・**プラナン**



スワン・チットラダー
牛乳集荷センターの
製品のひとつ、チーズ

カン・レーク・ナークワン (始耕式) を復活された。乾期の終わり和田植えの季節の始まりにあたる5月に行われるこの祭礼は、豊作を祈り、農民の勤労を称えるために行われる。祭礼は2つの儀式からなっている。初日の儀式「プララーチャピティー・プートモンコン」は国王陛下の主権により王宮内プラ・シーラッタナサートダーラーム寺院（ワット・プラケーオ）で執り行われる。儀式では翌日に使用する種籾と農具に祈祷を捧げ、幸運を祈る。第二の儀式「プララーチャピティー・チャロット・プランカン・レーク・ナークワン」はバラモン教の儀式であり、2日目の午前にはサナム・ルワン（王宮前広場）で執り行われる。古来の伝統に則って



行われる重要な儀式である。儀式には特別に選ばれた一対の鋤すき用の雄牛が登場する。農業・協同組合省の次官や農業振興局長など農政担当の高官が儀式を司る「プラヤー・レークナー(始耕官)」を、同省の独身女性職員4名が従者役の「テーピー・レークナー(天女)」を務める。女性たちは2人1組でプラヤー・レークナーの後ろを歩きながら、肩に担いだ天秤棒に下げた金と銀の籠から種籾をまく。

儀式を始めるにあたり、プラヤー・レークナーは長さの違う3枚の縞柄のパーマン(布)から1枚を選ぶ。選んだパーマンの長さによってこの年の雨量



王宮前広場で毎年5月に行われる始耕式



天女役の女性の額
に点粉される国王
陛下

を占うのである。¹

その後、プレイヤー・レークナーは鋤入れを行う場所に伝統に従って縦に3列、横に3列の溝を掘る。この溝に、前日の「プララーチャピティー・プートモンコン」で祈祷を捧げた種籾を金と銀の籠からまく。種籾まきは3度繰り返され、儀式の後に吉兆の品として農民たちが競って拾い集める。家に持ち帰り、自分の種籾と混ぜて田にまくためである。

¹ 短い布はその年の雨量が多い、長い布は雨量が少ない、中間の長さの布は適量であることをそれぞれ意味する。



儀式の最後には鋤をつけた雄牛が登場し、種籾、トウモロコシ、緑豆、ゴマ、酒、水、牧草の7種の品がそれぞれ入った桶の並ぶ場所に導かれる。牛が最初に選んだ品が何であるかによって、その年の収穫を占うのである。この儀式を行うことによって、コメや他の作物が豊かに実り、農業にちょうどよい量の雨が降り、病害も発生せず、自然災害にも遭わないと信じられている。儀式で用いられる種籾は1962年以降、チットラダー王宮内の実験水田で育てられ、国王陛下より下賜されたものが使用されている。



王宮前広場での儀式の後、チットラダー王宮内の
実験田に種籾をまくプラーヤー・レークナー



政府はこの日を農業の大切さについて考える「**農業の日**」と定めている。この日、全国から選ばれた優秀農民の表彰式が行われる。前年にもっとも高い生産高を達成した農民に対し、国王陛下より表彰状と記念品が下賜されるのである。



地方訪問の際、国民に農業と灌漑について助言を与える



第10章 国民の自立へ

「国」

王考案開発プロジェクト」は、1952年の中部プラチュアブキーリーカン県ホワヒンにおける道路建設とチットラダー王宮内での農業実験研究センター設立から始まった。これらのプロジェクトは、憲法で定められた枠内で国王が行う活動である。当時の政府は経済開発を重視するようになっていたが、国内すべての地域で同時に開発を進めるには限界があった。国王陛下がみずから開発プロジェクトを始められたのは、本来、国家の発展に責任をもつ政府の手が届かない地域で社会福祉を実現するためであった。国王考案プロジェクトのほとんどは政府が立ち入りできないような地域、または政府の準備が不十分な地域で実施された。早急な支援を必要とする貧しい地域に利益をもたらすこうしたプロジェクトを人々は歓迎した。これらのプロジェクトを通じて陛下は国の安定の中心となり、国の発展に重要な役割を果たしてこられた。



クライカンウォン王宮



王妃陛下、シリントン女王陛下と地方を訪問される国王陛下



1950年代に陛下が最初のいくつかの開発プロジェクトを始められた**ホワヒン**は、バンコクより230km、車で4時間半の距離にある。1927年、ラーマ7世はバンコクの暑さを避けるため、美しい浜辺のあるこの地に**クライカンウォン王宮**を建設された。

その後ホワヒンの人々の生活はさまざまな点で改善されたが、多くは農業や漁業で生計を立てながら昔と変わらぬ質素な暮らしを営んでいた。他の地域同様、ホワヒンの人々も貧しかった。最初のプロジェクトはホワヒンと**ホワイモンコン村**を結ぶ道路と**カオタオ貯水池**の建設であった。その後もホワヒン住民の生活水準向上のため、陛下は絶えずさまざまな活動をしてこられた。1960年の米国公式訪問の際に議会で行われた穏やかで真心のこもった演説には、陛下の国民に対する心遣いが表れてい



る。演説には次のようなお言葉があった。

「タイ国民の平均年収は1人あたり100米ドル
にすぎません。我が国民にとって所得の増大
と生活の向上がどれほど必要なのか、おわかり
いただけるでしょう」¹

国王考案開発プロジェクトにとっての重要な一歩
が、ホワヒンに近いペッチャブリー県の農村開発を
目的とした**タイ・イスラエル共同プロジェクト**で
あった。イスラエル政府はこの分野で豊富な経験が
あり、進んでこのプロジェクトへの支援を申し出
た。イスラエル政府は農業・協同組合省と共同で
農業に関する研究と市場調査を行った。プロジェ
クトの最初の実施地は**ペッチャブリー県チャム郡
フップカボン村**の500ライ²の土地だった。陛下は
次のように説明された。

「最大の収穫高を得、最良の成果を収める
ためには知識が重要です。どこで何を栽培する
か、農産物を上手に育てるにはどうすればよい
か、いろいろ知らなければなりません。作物が
良好に育ち収穫期を迎えたら、何がよい価格で
売れるのかを知る必要があります。求められて
いる物売り、同じ物を作っている人たちと

¹ 1960年6月29日、米国議会での演説。

² 面積の単位。1ライは1,600㎡。



ベッチャブリー県
フップカボン村を
視察

価格競争をしなければなりません。これらは経済の原則です」¹

このプロジェクトは、後に10,000ライ規模で行われることになる**土地開発プロジェクト**の原点となった。120世帯の野菜農家が選ばれ、1世帯あたり25ライの土地の耕作権が与えられた。土地の共同所有者はフップカボン農業協同組合の組合員たちである。このような新しい形の共同事業において、国王陛下が人々の絆として果たされた役割は大きい。

陛下はこのフップカボンのプロジェクトにおいて、人々が自分の力で生活できるようにするためのアイデアを出された。それは人々が借金返済のため土地を売却するよう債権者に強制され、家族が住む

¹ 1969年5月14日、プラチュアプキーリーカン県タイ・イスラエル農業実験センターでのお言葉。



場所を失ってしまうのを防ぐためのものであり、長期にわたり安定的な開発を進め、コミュニティが永続できるよう導くものである。政府はコミュニティの人々に対し、「その土地で一生、そして彼らの子孫の代まで生活することができるが、土地を売却する権利はない」という新しい内容の所有権証明書を発行した。地方の貧しい農民は土地所有の問題に長年苦しんできたが、この先進的なアイデアは問題の核心に焦点を当て、実際に成果をあげることができた。このように陛下は農民をつねに気遣われており、ナコーンナヨック県など他の地域を訪問された際も農民に対し、所有する土地を手放さず、そこでの生活を守ること、都市の投資家に売ってしまわないようにと助言されている。

フップカボンで始めた自立プロジェクトの形は、国王陛下が説明なされているように、人々の自立を



イサーン（東北部）の
各県を訪問（1955年）

助けるという原則にとって、まさしく重要な意味をもっている。

「仕事を持ち、自立して、基本的な生活が可能となる様に、人々を支援していく事が、非常に重要な事である。なぜならば、職業を持ち、自活している人々こえが、更なる発展を続ける事が可能なのである。」¹

1955年、国王、王妃両陛下はイサーン（タイ東北部）を初めて公式訪問された。イサーンの人々は貧しいが、思いやりがあり、つつましい暮らしのなかでも正直に生きているということを国王陛下はお知りになった。両陛下は人々に感銘を受け、親愛の気持ちを深められた。

¹ 1974年7月19日、カセートサート大学講堂でのお言葉。



北部を訪れ山岳民族の人々と対話する



当時、イサーンの人々の生活は今日ほど豊かではなかった。人々の多くは生活に必要な水道や電気などの利便性を体験したことすらなかった。王妃陛下はイサーンの文化や生活習慣が織り込まれた伝統舞踊の素晴らしさを賞賛された。イサーンの人々は11月から12月にかけてコメを収穫するが、雨季にはカエルや魚を獲ったり、自家消費用の野菜を栽培したりと、自然と上手につき合いながら生計を立てていた。また土壌の塩分濃度が高い地域では塩を生産して他の品物と交換したりしていた。森林は豊かな食の恵みをもたらしてくれる場所であり、漢方薬の原料となる薬草も採れる。土地は国民の生活にとって非常に大切なものであるが、イサーンでは乾燥して困難な状態にあると陛下は考えられた。そこで陛下はこの地域最初の事業として「**水資源開発プロジェクト**」に取り組みされた。1977年の1年間に貯水池が8ヶ所建設され、さらに8ヶ所に池が掘られたほか、水深が浅くなった運河の浚渫工事も行われた。

国王、王妃両陛下がタイ最北部を訪問されたとき、政府機関の管理が行き届かない山岳地帯に住んでいる人々がイサーンの人々よりもさらに貧しく困難な生活を強いられている状況をお知りになった。彼ら「**山岳民族**」と呼ばれる人々は人里から遠く離れた地域に住んでいて、平地にはたまた



しか下りてこない。山岳民族は国籍をもたず、タイと隣国ミャンマーとの間を自由に行き来していた。現在ではカレン族、モン族そしてイコー族が知られるようになっており、政府観光局も関心を寄せる存在となっている。

陛下の在位初期の1952年頃には、山岳民族は焼畑農業、つまり森林を焼き払って農地にし、収穫を終えるとまた別の土地へ移るという方法に頼っていた。山岳民族を訪ねた陛下は、彼らが外の世界とほとんど関わりをもたなくても暮らすことができ、まったく異なる文化をもっていることに関心を示された。



モン族の村を訪れ、ケシの代替作物として栽培される小豆の生育状況を視察
(1971年12月15日、チェンマイ県ホート郡)



国王陛下は山岳民族と北部地方の国民をつねに気遣ってこられた。1952年から1977年の間に行われた最初の100件の国王考案プロジェクトのうち、**北部プロジェクト**は実に85を数える。そのほとんどがチェンラーイ県、チェンマイ県、ナーン県の道路すら通っていないような地域で行われた。今日でもプロジェクトの実施地にたどり着くには困難が伴う。熟練ドライバーの運転する四輪駆動車でなければ急峻な山道を進むことはできない。30年前には陛下専用ジープでさえも前に進むことができず、陛下は暑い日差しのなかを汗だくになりながら、目的地まで何時間も歩かれたこともあった。当時の活動を記録した写真には、日に焼け、力強く、健康そうな陛下の顔が写っている。普通の人であれば、コーヒーや果樹畑を見るために、ヒルやカタツムリがいる小川を渡り、蒸し暑い熱帯森林をかきわけて何時間も進むとしたら、すっかり疲れきってしまうだろう。しかし陛下はどんなに困難な状況でも、国民を助ける活動をしている間はいつも楽しそうにされている。

陛下はまた、次のように考えられていた。

「国民を助ける活動を行うには、助けられる側の人間をよく知っておかなければなりません」¹

¹ 1970年11月9日、ドゥシットターニー・ホテル（バンコク）で行われたタイ国ロータリークラブ主催ガラディナーでのお言葉。



喜ばしいことに、陛下の山岳民族に対する心遣いのおかげで「最果ての地の民」といわれた人々の生活改善は順調に進んだ。陛下が1969年からこの地域で始められたプロジェクトは、後に「**ロイヤルプロジェクト (Royal Project)**」¹という名で広く知られるようになった。その目的は、国民が一致団結し、自分たちの力で問題を解決できるよう導くことであり、また国王陛下がいつも国民を見守っているということを伝えることでもある。陛下は山岳民族の生活向上に努め、大きな成果を収められた。山岳民族が陛下を「**チャオ・ポー・ルワン (王父さま)**」と親しみをこめて呼んでいることにも、その成果が表れている。

陛下は山岳民族支援に力を注いでいるが、彼らが伝統的な文化や習慣を失い、平地民の考え方や行動様式を受容することを望まれているわけではない。陛下は、新たに実施されるプロジェクトが山岳民族の伝統的な生活と両立するものでなければならぬと厳しく指示されている。北部をはじめ、陛下が支援されているどんな地域でも、プロジェクトは簡素で経済的な手法で進められる。例えば、他の土地から資材を導入すると費用がかさみ、またプロジェク

¹ 他のプロジェクトは「国王考案プロジェクト (Royal-initiated Project)」と呼ばれる。



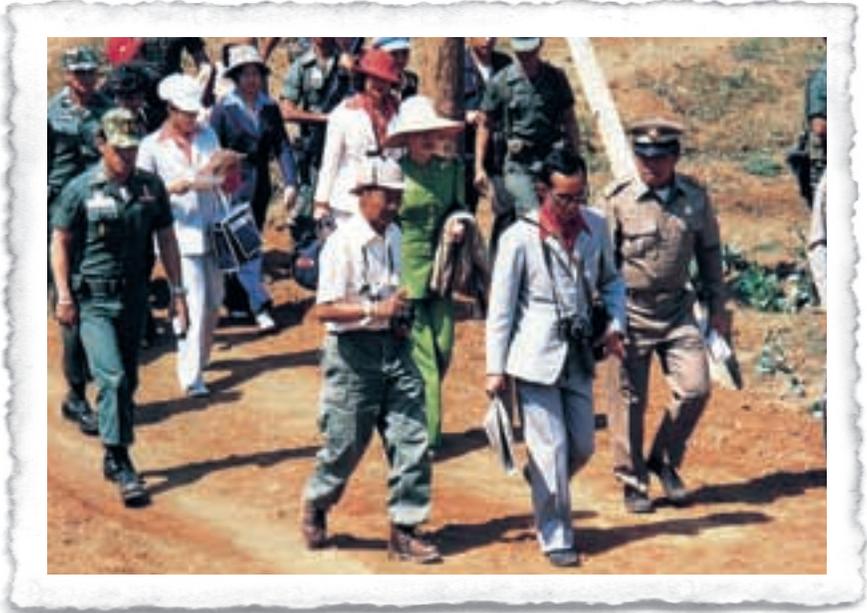
山岳民族の人々に灌漑制度やケシの代替作物の栽培について助言を与える



ロイヤルプロジェクトに参加した山岳民族の人々の活動状況を視察する

ト終了後に住民たちの手で継続するのが困難になる。これではプロジェクトの目的を達成することができなくなるので、地元で調達可能なものをできる限り利用するようにしている。

国王陛下による山岳民族の生活改善プロジェクトが他地域でのプロジェクトに比べて高い成果をあげているのは、そのほとんどが政府による開発が行き届いていない地域で行われているためである。さまざまなプロジェクトや社会活動を主導されてきた陛下の心には、山岳民族の人々に対する深い思いやりの気持ちがある。現在では両陛下の尽力や政府事業により北部や東北地方の人々の生活は改善されてきたものの、ほとんどの人はまだ貧しく、家族がやっと食べていけるぐらいの収入しか得ることができない状態にある。



王妃陛下、皇太子殿下、シリントーン王女殿下を伴いリンゴなど
温帯の果物の栽培状況を視察される国王陛下
(ロイヤルプロジェクト・チェンマイ県アーンカーン農業研究所)

たとえ解決不可能とも思えるような問題が国内に山積していたとしても、国王は状況を記録し、政府に解決を指示して自身は王宮に戻り休息をとることもできるはずである。しかし、プーミポン国王陛下はそのような行動はとられない。陛下が国の発展のためになぜこれほど献身的に活動されるのかを理解するためには、歴代の国王が果たしてきた役割を歴史的、文化的な側面から検討する必要がある。1932年以前の絶対君主制度下において、あらゆる国家の活動は国王の権限と責任において行われて



農民の生活状況について話を聞く



いたが、それは答えの一部に過ぎない。民主主義体制に移行する前のタイは、国王を頂点とする階級社会であった。タイの歴史とはすなわち王の歴史であり、王は国家発展の原動力であった。歴代のタイ国王は、王としての血を先代から受け継ぐように国を発展させる役割を受け継いできた。プーミポン国王が開発プロジェクトにこれほど深く関わる理由もこの歴史的経緯から十分に学び取ることができるだろう。

プーミポン国王の時代になり、国王の国の発展への関与はより深まっている。階層や地域の別なくあらゆる人々に温情をもって接する国王陛下の姿勢にはタイ国民だけでなく外国人も敬服させられるほどである。また陛下は、自身のさまざまなアイデアを国民がよく理解し、効果的に利用できるよう、父親が子に対するようにすべての手順をみずから丁寧に説明されるのである。

陛下は国内外の慈善団体による多くの活動を支援されているが、華々しい式典や宣伝からは距離をおき、自身の名前が使われることだけはお認めになり、後は各団体の自主的な活動に任せられている。その代わりに、陛下はプロジェクトを通じて人々を助けることに全力を注がれる。陛下は仕事を決して他人任せにせず、みずから先頭に立って活動され



ている。

国王陛下がもっとも貧しく、見捨てられた人に対して何の見返りも求めない態度で手を差しのべられることについて、不思議に思う人がいるかもしれない。この点について陛下は次のように述べられている。

「なぜそれ（支援活動）をするのか、よく考えてみなければなりません。一般には国家の運営と開発に責任をもつ者がこの『なぜ』という問いへの答えに窮することはないでしょう。しかしたとえそうだととしても、問題は残ります。農村部、つまり地方に住む人々にとってなぜ開発が必要なのかという点についてはさまざまな理由があるからです。何よりもまず倫理的な理由があります。同じ国に住む人々が困窮していることがわかれば、知識と資金を有する各機関が彼らを支援するのは当然のことです。しかし倫理的な理由だけでは不十分であり、また理想だけを追求するのもよくありません。倫理的な配慮だけをして、他のだれかがすべてをしてくれるだろうと期待することには無理があります」¹

¹ 1969年6月13日、アムボンサターン王宮で開かれた地方開発推進会議での全国の県知事に対するお言葉。



地方の国民に声をかけられる国王陛下

国王が豊かな知性と深い温情の持ち主であることは次のお言葉から容易に読み取ることができる。

「もし国が困難に直面し、地方の国民が苦しんでいると知ったら、天国のような首都にいてじっとしていることなどできるはずがありません」¹

国王陛下はみずから国民を支援されることで、国が徐々に発展するよう促進されてきた。1982年の『ナショナル・ジオグラフィック』誌のインタビューで陛下は、自身の哲学が伝統に依拠したものであることを強調された。

¹ 1969年6月3日、アムボンサターン王宮で行われた地方開発推進のための移動保健医療プログラムの医療チームに対するお言葉。



「徐々に進歩していくこと。過去の美しい慣習を探求すること。伝統を継承し、形を変えていくこと。これが学ぶということです。我々は古い伝統を取り入れ、それらを再構築し、現代、そして未来へと受け継いでゆくのです」¹

この考えは「目的を達成するために簡素な手段を用いる」という陛下の活動に対する姿勢にも反映されている。例えばある地域では、経済的な理由でトラクターを利用できないため鋤、スコップ、シャベルを使うように勧められた。持続可能な開発の活動では、シンプルで、古くから受け継がれてきた方法が用いられている。農民が人口の大多数を占める国民の生活を工業国のそれのように急激に変えるのは危険だと考え、安易な変化は望まれていない。

「国の開発は段階的に行わなければなりません。まず質素だが理論に裏付けられた方法や道具を用いて、国民が十分に食べていけるような生活の基礎を築かなければなりません。基礎がしっかりしたら、次の段階でより高度な成長と開発を進めていきます。国と国民のおかれた状況を見捨てず、経済的進歩だけを拙速に追求すれば、社会のさまざまな側面で調和が崩れ、最後には失敗してしまうでしょう。これは多く

¹ *National Geographic Magazine*, No.4, Vol.162. October, 1982.



国王陛下は北部の山岳民族から南部のイスラム教徒まで、あらゆる地方を訪問され国民と対話する



の先進国が深刻な経済危機に直面していること からも理解できます」¹

陛下は自分の提案はあくまで1つのアイデアにすぎず、政府が検討、分析そして実験を重ねたうえで実行に移さなければならないと述べられた。

「国王考案プロジェクトというのはあくまで
国王による1つの意見にすぎないのです。もし
それが不可侵であるとしたら、タイの発展の
ためにはならないでしょう」²

政府による検討の結果、実行可能であることがわかればプロジェクトを始めればよいし、実行すべきでないと政府が判断すれば取り消すことも可能なのである。

陛下が開発活動に取り組むもう1つの理由は、民主主義社会における現代的な国王という立場に関係している。陛下は民主主義発祥の地ヨーロッパで育ち、1946年に即位したときタイは概に民主主義体制になっていた。陛下は立憲君主制という新しい体制にふさわしい国王であった。タイは民主主義体制下で政変を何度も経験したが、国王を元首とする体制が変わることはなかった。

¹ 1974年7月18日、カセートサート大学卒業式でのお言葉。

² 1993年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



地方の貧困に苦しむ国民に支援品を下賜する

タイの国王が国家統治に関与せずにもどのように国民に直接的な影響を与えているかを知るには、国王が国民の精神的、倫理的な支柱となっている点を理解しなければならない。これは近年生じた幾度かの政治的变化にもかかわらず、王室制度の安定が揺るぎないものであったことから明らかである。

陛下の地方開発プロジェクトの実施手法について、もっと詳しく知る必要があるだろう。陛下はまず、農民の自立を促すことが大切であると強調された。次に、農業の知識や技術が十分ではなく環境保護への関心が低いことが見てとれたため、陛下は教育と情報収集の重要性を強調された。また、陛下は2つの小規模な開発、つまり力強く安定した農村コミュニティを作り、農業用水の供給と管理に必要な基本設備を設置することを重視された。



国王陛下は自立モデルの**成功例**を人々に示すことが必要であるとしばしば強調されてきた。農村コミュニティが自立し、十分な用意が整ってから計画的に外部世界とつながっていく方法を、陛下は「**内側からの爆発**」と名づけられた。

チットラダー王宮内の研究施設で実験を繰り返し成果が確認されたら、原則としてすべての地方において試験的にプロジェクトを開始するべきだというのが陛下の考えである。陛下にはいくつかの方針がある。第一に、新たに普及させる技術は生産活動に関わるものであり、国民が容易に利用できるものでなければならない。陛下は次のように述べられている。

「開発の実践にあたっては、対象地域が地政学的、社会的、心理学的にどのような環境にあるのかを考慮しなければなりません。地域の社会的環境とは、外部の人間が強制的に変えることのできないその地域の人々の特性や独特の考え方です。しかし、我々が中に入って彼らが何を本当に必要としているのかを知り、どうすれば最善の形で目的を達成できるかを彼らに理解してもらえば、開発は大きな恩恵をもたらすでしょう」¹

¹ 国王考案プロジェクト特別委員会『プーミボン・アドウンヤデート国王陛下と開発活動』、1987年。



南部の国民に助言
を与える

国王陛下の開発プロジェクトにおけるもう1つの重要な方針は、自然資源の有効活用である。陛下はある日、クライカンウォン王宮のあるホワヒンからペッチャブリー県に向けてペットカセム通りを移動中、車窓から見えたチャームチュリー（レインツリー）の木から樹液を採取しシーリング・ワックスとして使うことを思いつかれた。

「チャームチュリーの木を利用すれば地方の人々に職を生み出すことができるかもしれないというアイデアが計画の発端でした」¹

すべての国王考案プロジェクトにおいて陛下が強調されているのは、生産コストをできるだけ低く抑えなければならないという点である。農民には

¹ 前掲書。



地方を訪問される国王
陛下とシリントーン王
女陛下

機械よりも水牛を使って田を耕し、高価で長期的には土壌に悪影響を及ぼす化学肥料よりも自然の肥料を使うように勧められている。「**既存の物を有効に利用する**」という姿勢はスイスで暮らした若い頃からのものである。

陛下は、「開発プロジェクトは、それによって影響を受ける人々が確固たる自信をもって協力することなしには成功しない」という点をはっきりと指摘されている。「人々が生活の糧をみずからの力で手に入れ、自立できるよう促し、支えることが重要です。職を持ち自力で生活できるようになった人々は、さらに高い水準の発展に向けて進むことができるでしょう」¹

即位から現在に至るまで、国王陛下は活動を成功させるために個人の資産を使ってこられた。これに

¹ 1974年7月19日、カセートサート大学講堂でのお言葉。



は活動初期の1950年代に流行していた結核の予防研究を目的とした**マヒドン記念棟**建設資金の50万バーツも含まれる。ここでは後にBCGワクチンが製造されるようになった。



タイ赤十字社マヒドン
記念棟

1950-60年代、陛下は個人資産と少数の王宮職員だけでバンコク郊外や近隣地域の人々の生活改善を長期的に支援するのは難しいと考えられた。王宮の外の人材にもアイデアを理解してもらい、協力を得ることが必要であった。農業研究者や灌漑技術の専門家、地方の政府職員らが協力すれば、国民が将来、自力で生活できるように彼らの専門知識や技能を伝え、将来の発展の基礎を作ることができる。この考えはフップカボン村での農業協同組合の設立において具体化された。そこでは組合員が



自分たちの力で生活するのに必要な手段を与えられ、国王考案プロジェクトの成功例となっている。

教育は当初から陛下の主要なテーマであった。これは最初の20件のプロジェクトのうち13件が**学校の建設**であったことから明らかである。教育を受けた人々の方が自力で生きるためのより安定した生活基盤を容易に築くことができる。この「自助」の概念は、自然資源と環境の保護および開発、さらに、各地域の地理、社会、人間心理について研



ナコーンパノム県ナーケー郡のロムクラオ学校を訪問。
この学校は国王陛下の個人資産により設立された。(1963年10月30日)



究する「**国王開発教育センター**」の設立で実を結ぶこととなった。

1952－1970年に実行された初期の国王プロジェクトは大部分が教育に関するものであった。陛下は「**チャオ・ポー・ルワン・ウッパタム学校**」を北部チェンマイ、メーホンソーン、チェンラーイ、ナーン県の8ヶ所に設立された。また、貧しい子どもたちのための「**プラチャーソンクロ小・中・高等学校**」が中部サムットプラカーン、東北部ナコーンパノム、北部ナーンの各県において、古くからタイ人の教育の原点とされてきた寺院内に4校設立された。1972年からはナコーンパノム県ナーケー郡をはじめ数ヶ所に「**ロムクラオ学校**」を設立された。これらの学校はいずれも、タイの平和と安定を脅かす状況にあった近隣諸国に接する北部と東北部の国境地帯に設立された。危険な状況にあるため、陸軍の兵士や国境警備警察が教師としての訓練を受け、武器を携行して現地に赴任した。彼ら治安担当者と現地住民との協力関係は国境地帯の安定に大きく貢献し、現在まで継続している。

反政府勢力との戦闘のなかで多くの善良な国民が命を奪われ、また一生残る障害を負った。国王陛下は国のために苦難を背負った人々に教育の機会を与えるため、1976年に**プラ・ダーボット学校**を設



立された。貧困のため学校に通うことができない人や戦争で障害者になった退役軍人を受け入れ、職業訓練を実施した。教師は皆、国のために犠牲になった人々に尽くしたいと考えるボランティアである。最初の研修生は9名で、ラジオや電気の技師としての訓練を受けた。「**プラ・ダーボット**」とはタイの古典文学のなかで、学問を求めて遠方からやってくる勉強熱心な弟子たちに生計を立てるための技能を教える修験僧のことである。

1965年、プーミボン国王は伝統ある「**国王奨学金**」を復活された。元々は優秀な若者を西洋諸国に留学させ、帰国後に国の近代化のために尽くしてもらうためラーマ5世が創設されたものである。奨学金委員会が将来国家の発展に寄与する優れた人材を高校卒業生のなかから選んでいる。



プラ・ダーボット学校では機械工学などの技術を無料で学ぶことができる



毎年この名誉ある奨学金を受けて海外の大学で学ぶことができる者はごく少数である。家庭の経済状態とは関係なく、学問的に優れた者が選ばれる。専攻分野は政治学、経済学、言語学、文学、法律、化学、生物学、コンピューター、数学、理工学などである。そのほか、学士号よりさらに上の学位を取得するための「**アーナンタマヒドン奨学金**」も設立された。国王奨学金の受給者に選ばれることは大変な名誉である。

1968年、国王陛下は全国から著名な学者たちを招き、自身の資金で**青少年向けの新しい百科事典**を



外国留学へ出発するアーナンタマヒドン奨学金受給者との謁見



作りたいという考えを伝えられた。それまでタイには、年齢を問わずあらゆる人々の役に立つさまざまな分野の知識を集めた包括的な書物がなかった。陛下の希望では、次の3つの水準の百科事典を作りたいとのことであった。第1の水準は、10歳以下の子でも読めるよう文字が大きく印刷されており、小学生が理解できるよう、簡潔でわかりやすい説明がなされている。第2の水準は10歳から15歳を対象としたもので、文字がやや小さくなり内容もより詳しくなる。第3の水準は通常サイズの文字で印刷されており、内容が詳細で、16歳から大学生まで利用できるものである。年齢ごとに分けて百科事典を作るのは、年長の子が年下の子に大きい文字と簡単な説明を使って自分の知っていることをわかりやすく教えるという積極的な姿勢を育てるためである。これまでの百科事典と異なるもう1つの特長は、科学や技術についてタイの文化や伝統的価値と結び付けて説明することである。例えば月食に関する説明では、科学的な解説や図解を掲載する一方、タイで伝統的に信じられていたラーフ神が月を飲み込んでいる絵図も併記している。教育を通じて社会の進歩を加速させたいという陛下の希望が、1969年の百科事典発行という形で具体化したのである。



「百科事典には学問的な事実を伝えるという以外には何の役目もありません。政治的な意見を述べる役目もありません。しかし、今度の事典も従来の百科事典のように原理原則に満たされてしまうのではないかと懸念しています。例えば法律に関して『悪事を働いても証拠がない限り有罪にはならない』という裁判の原則があります。しかしそのまま子どもが読んだら大変なことになります。今度子どもが物を盗んだり何か悪いことをしたりしたら、証拠を出せと言われかねないからです。法律の文章のように子どもを教えれば、正しく導くことはできないでしょう」¹



陛下の考案により編纂された青少年向け百科事典

¹ 1969年9月25日、チットラダー王宮での第310地区（タイ・ラオス）国際ライオンズクラブ理事に対するお言葉。



陛下は百科事典の青少年に情報や知識を与える実用的な面だけでなく、世界は1つであり、あらゆる事象が相互に関連していることを理解させるという役割についても述べられた。

「この百科事典の主な目的は、世界が1つであることを読者に実感してもらうことです。ここでの世界とは、知の世界、丸い地球、科学やさまざまな学問の世界であり、それらが相互に依存しあい、国そしてすべての人間を強く結びつけていることがわかるでしょう。このような考えが生まれれば、読者は自分もまた社会の一部であると感じ、社会に貢献しなければならないと思うようになるでしょう。多くの人は美術や音楽と科学との関係に気づいていませんが、この百科辞典を読めばそれを理解できます」¹

国王考案プロジェクトは地方の人々の生活を改善し、彼らが自分の住む場所で誇りをもって働き、貧困から解放されることを目指している。陛下は反政府勢力による治安の悪化について質問を受けた際、次のようにお答えになった。

「我々の敵は人間ではありません。飢餓こそが我々の敵なのです」²

¹ 前ページ注1に同じ。

² 1979年、英国BBCテレビのドキュメンタリー番組「Soul of the Nation」での国王陛下に対するインタビュー。



地図を見ながら住民に助言を与える（南部ナラーティワート県ジョバーコン村）



後年、軍や警察などの治安機関は、密林地帯の警備や武器による戦闘よりも地方開発の方が治安対策に持続的な効果があることに気づき、国王陛下の活動を支えるようになった。彼らの協力により、チェンラーイ、チェンマイ、メーホンソーン、ナーンなどの都会から遠く離れた地域に支援が円滑に届くようになった。1952－76年の24年間に行われた貧しい人々を対象とする国王考案プロジェクト83件のうち、全体の79.5%にあたる66件が上記の4県で実行された。また、1977－78年のわずか2年間でプロジェクトは181件まで増えた。

地方開発のための国王考案プロジェクトは急速に数を増やしてきた。これは国王陛下の精力的な活動と各機関による協力の賜物である。これについて陛下はしばしば次のように述べられている。

「人間には自分の果たすべき役割がそれぞれあり、そしてだれもが他人の成し遂げた仕事に依存しながら生きているのだということを理解しなければなりません」¹

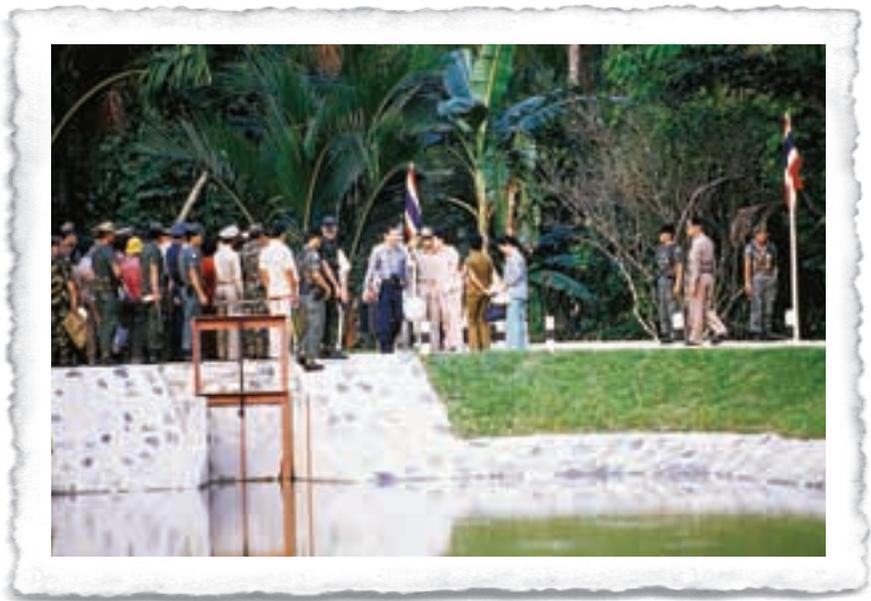
国王陛下は、実施可能性のあるプロジェクトに関連する分野を詳細に研究されることを厭わない。持続可能な開発に関する諸課題、**水と土壌の適切な**

¹ 1989年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



管理といった分野を陛下は深く理解されている。このため国民は陛下のプロジェクトが実用的であり、技術的な情報が必要なときには陛下の助けが必ず得られると確信しているのである。

1981年、国王考案プロジェクトは590件に達した。さまざまな活動が幾多の障害を乗り越え組織的に運営されるようになり、当初は実施地にたどり着くことすら困難だったのが信じられないほどである。しかし、これまでの経緯を振り返れば、陛下の活動ぶりがまさに「**スーパーマン**」のようであったことが理解できるであろう。陛下はこの有名なフィクションを読まれたことがあるという。



灌漑用ダムを視察





地方訪問中の国王
陛下

そして「超人」であることがどれほど危険かよくわかった、そのレベルに達した者に対しては、失敗を犯すのを人々が期待するようになるものだから、と述べられたことがある。いずれにせよ、タイ国民は国王陛下が現実の指導者であり、自分たちを確かな方向へと導いてくれる尊敬すべき方であると考えている。

陛下が即位してから最初の30年間に考案されたプロジェクトの一覧に目を通すと、政府機関との協力関係が次第に緊密になっていったことがわかる。1950-1967年の間にチットラダー王宮やクライカンウォン王宮周辺の地域で始まったプロジェクトは、政府諸機関の支援を受けるようになり、



1981年には各種プロジェクトの運営管理を行う「**国王考案プロジェクト特別委員会**」が設立された。委員会の事務局は**国家経済社会開発委員会**の管轄下に置かれた。

国王考案プロジェクトは当初から**国境警備警察**の協力を受けてきた。警察局の一部門であるこの機関は、ブルドーザーを借りて国王考案プロジェクトの最初の事業であるホワヒン郡**ホワイモンコン村**につながる道路を作った。またこの機関は陛下の希望に応え、交通の不便な地域の開発にきわめて重要な役割を果たした。国境警備警察はそれらの地域において、陛下が個人資産から寄付された資金を用いて数多くの学校を建設した。北部チェンマイ県、チェンラーイ県で麻薬撲滅の任務を負う国境警備警察は、麻薬中毒者のリハビリテーションを行う山岳民族開発プロジェクトにも加わっている。**シーナカリンタラー殿下**は彼らの活動拠点を何度も訪問し、危険で困難な状況のなかで任務にあたっている担当者を激励された。

農業・協同組合省灌漑局は国王考案プロジェクトを支えるもう1つの主要な政府機関である。水源の保全および貯水に関するプロジェクトを陛下の提案にもとづき実行する機関であり、非常に重要な役割を果たしている。陛下の地方訪問の際には灌漑局長



が必ず随行し、陛下の提案が実現可能かどうか検討することを助けている。灌漑局の適切な助言と情報提供により、国王陛下はタイにおける灌漑事業の性質や特徴について深く理解されている。国王陛下は灌漑と持続可能な農村開発の分野では、名実ともにタイを代表する専門家であると言えるであろう。

国王考案プロジェクト特別委員会が設立される前、国王考案プロジェクトは王宮内にある王室秘書局で陛下の個人事業を担当する部署の責任により行われていた。この部署はM.R.クックリット・プラームート首相時代の1975年に再編され、「国王陛下



灌漑局の技術者とともにプロジェクトを視察



事業部」としてすべてのプロジェクトを管轄することになった。主な業務は一般国民から寄せられる多額の募金の管理である。多額の現金や小切手だけでなく、陛下のプロジェクトや開発活動に利用してほしいと土地などの財産を寄付する人もいる。

国王プロジェクトの領域は農業改善、畜産、灌漑、土壌管理、漁業、職業訓練、教育、コメ銀行、水牛銀行まで多岐にわたる。しかし国家の開発は陛下個人や王室の一部門がどれほど努力したとしても、それだけでは成功しない。1981年には国家開発における国王考案プロジェクトの重要性を認識した当時の**首相、ブレイム・ティンナスラーノン陸軍大将**が、関係諸機関の調整を行う特別委員会を設立した。

広く国民から尊敬され、現在、**枢密院議長**の職にあるブレイム元首相は特別委員会の設立を振り返り、陛下の考えに従ったにすぎないと述べているが、地方開発を継続的に進めていく上で大きな一歩であった。

国王考案プロジェクト特別委員会が大きな成果を収めることができたのは、ブレイム元首相が責任ある委員の役職に優れた人材を選んできたことと無縁ではない。この委員会は、枢密顧問官1名を顧問、首相を委員長とし、委員は国王秘書官、国軍



最高司令官、陸軍司令官、財務省、農業・協同組合省、内務省、科学技術・環境省の各次官、国家経済社会開発委員会事務総長、特別委員会事務総長で構成されている。

特別委員会は、研究や実験で満足できる結果が得られたプロジェクトに対する広範な支援を行っている。設備・機材と人的資源を有する政府機関として、プロジェクトが計画通り進み、資源が有効に利用されるよう監督する。1994-1996年には特別委員会事務総長の**スメート・タンティウエーチャクン博士**が国家経済社会開発委員会事務総長を兼務し、プロジェクトと国家計画の関係強化を進めることに成功した。

国王考案プロジェクトを進められるにあたり、陛下は王室の方々から支援を受けてこられた。陛下の幼少時代から父君の**マヒドン親王**と母君の**シーナカリンタラー殿下**は病人や貧しい人々のために献身的に活動され、よい手本を示してこられた。シーナカリンタラー殿下は生前、お住まいのある北部ドーイトウン山の近隣地域などで山岳民族を支援するプロジェクトを数多く実施された。人々は皆、殿下の活動に深く感謝している。1964年に殿下が始められた「空飛ぶ医師 (Flying Doctor)」制度は、山岳地帯にボランティア医師をヘリコプターで



派遣するサービスで、現地の医療福祉向上に大きく貢献した。山岳民族の人々は王母殿下を親愛の情をこめて「**メー・ファー・ルワン（空の王母さま）**」と呼ぶようになった。

1973年の1年間だけでボランティア医師のグループは700回も空を飛び、25万人に対し地域医療サービスを提供した。遠く離れた土地に住み他の地域との接触が少ない人々は、着陸したヘリコプターからシーナカリントラー殿下が降りてこられる光景に驚いた。殿下は現地の様子を自分の目で確認したいと、ズボンにサングラス、ベレー帽子というお姿で



ボランティア医師団を率いて遠隔地での医療活動にあたるシーナカリントラー殿下



地方の住民に支援品を手渡す

しばしば視察に出かけられた。

こうした活動を支えるのは国民の信頼と理解である。当初、シーナカリントラー殿下は個人資産のみでプロジェクトを運営されていたが、1969年に中央委員会が設立されてからは個人や公的団体からの寄付の窓口となりプロジェクトの調整を行っている。また、**タイ政府宝くじ局**はシーナカリントラー殿下慈善基金に対し、毎年およそ100万バーツを寄付している。



タイ国民の幸福のために尽くされたシーナカリントラー殿下に、人々は深い敬愛の念を抱いている。質素を旨とし、気さくで優しさにあふれたお姿は国民の手本となった。1995年7月に殿下が逝去されたとき、国中が深い悲しみに包まれた。





シリキット王妃陛下



「すべての成功した男性の後ろには女性がいる」という言葉は国王、王妃両陛下にもあてはまる。**シリキット王妃陛下**も国王陛下の「後ろ」に控えられ、陛下を深く尊敬し、熱心に活動を支えられている。王妃陛下はご成婚以来、陛下の外国訪問や地方視察には必ず同行されている。王妃陛下の国の発展に対する功績を紹介する写真やテレビ番組を見れば、国王陛下の活動にとって王妃陛下が大きな



「SUPPORT基金」のプロジェクトを視察する両陛下

支えとなってきたことがわかる。王妃陛下は植林や、地方の人々の収入増加のため地元産の原材料を用いて手工芸品を作るための職業訓練活動を通じて、陛下の地方開発活動を支えている。

王妃陛下の**伝統手工芸支援活動**は、1972年にメコン河に面した東北部ナコーンパノム県を国王陛下とともに訪問されたのをきっかけに始まった。国内でもっとも貧しい地域の1つであるにもかかわらず、そこには独特の豊かな地方文化が栄えている。



「SUPPORT基金」
が支援する絹織物
生産活動を視察さ
れる王妃陛下

王妃陛下はここで古くから作られている「**マットミー**」という絞り染めの絹布の美しさに目を留められた。地元の人々が普段着に使うだけで都会ではほとんど知られていないマットミーを広く紹介すれば、農業を生業とする人々の副収入を増やすことができる。このように考えた王妃陛下は、従来よりも大規模なマットミー生産を行うための資金を集めることを決心された。また、原材料の安定供給のため、養蚕場の整備や蚕の餌となる桑の葉の栽培も支援された。

当初はプロジェクトの成果に懐疑的な住民もいたが、参加した人々の収入が増え、生活がよくなるのを見て考えを改めた。現在では王妃陛下後援のもと、数万人の人々がマットミーや他の絹織物を



作ることになった。王妃陛下が見い出された地方の伝統手工芸品はマットミーだけではない。例えば南部の「ヤーンリパオ」という蔓性植物を材料にした繊細な手編み籠や、北部の職人が作る金銀の彫刻細工などもある。1974年には王妃陛下の提案により、南部ナラーティワート県にヤーンリパオ手工芸品グループが組織された。手工芸品グループの活動は急速に拡大し、1976年に「副業および関連技能奨励のための基金（SUPPORT基金）」¹が設立された。



ヤーンリパオの手編み籠

¹ 英語名“Foundation for the Promotion of Supplementary Occupations and Related Techniques”の頭文字をとって「SUPPORT基金」と呼ばれる。



「SUPPORT基金」
の支援により生産
された手工芸品

SUPPORT基金の設立後、王妃陛下がヨーロッパや日本、米国にタイ伝統手工芸品の紹介されたおかげで、生産が追いつかないほど多くの注文が海外から来るようになった。タイでもっともよく知られている手工芸品訓練センターは、1980年にSUPPORT基金から派生して設立されたアユタヤ県の「バーンサイ手工芸品訓練センター」である。ここでは貧困に苦しむ農家が副収入を得られるよう職業訓練を行っている。王妃陛下は自身の活動を振り返り、次のように述べられている。

「タイ国民がこれほど美しい作品を生み出すことができ、それが国民に経済的な自立をもたらすということを私は誇りに思います」¹

¹ William Warren, "A Queen's Gift" *Readers Digest*, June 1984.



マハー・ワチラーロンコーン皇太子殿下



王室の方々はそれぞれがタイ国民の幸福のために自身のプロジェクトの運営、支援をされているが、これは陛下のお子様たちにもあてはまる。

1972年12月28日、国王陛下により「**ソムデット・プラボロマ・オーラサティラート・チャオファーマハー・ワチラーロンコーン・サヤーム・マクットラーチャクマーン**」の称号を授けられたワチラーロンコーン皇太子殿下は、国民の生活をつねに気遣われている。皇太子殿下は英国の高校、オーストラリアの陸軍大学を卒業され、1975年1月9日、国防省陸軍情報局の軍人として公職に就かれた。1988年には国王陛下護衛小隊長に、1992年には国軍最高司令部の国王陛下護衛部隊指揮官に就任された。その他F-5EF戦闘機の教官を務め、また陸、海、空3軍の大將に就任された。

皇太子殿下は職業軍人として役目を果たされているが、一方で国民の福祉に特別な気遣いを示されている。トラート県などの遠隔地で対テロ活動に従事した経験もあり、保健医療その他の福祉の欠如が人々の生活に大きな影響を及ぼすことを理解されている。このため皇太子殿下は、1977年にナコーンシータンマラート県のユッパラート・チャワーン病院、ヤラー県のユッパラート・ヤハー病院、パッターニー県のユッパラート・サーイブリー病院、カーラ



ラーチャブリー県のユッバラート・ジョームブン病院を訪問された皇太子殿下

シン県、ウボンラーチャターニー県およびウドーンターニー県のユッバラート病院など、数箇所での病院の建設を支援された。これらの病院は現在ではすべて、地方に住む人々にとって不可欠な存在となっている。皇太子殿下は人々がきちんとした医療サービスを受けていることを確認するため、みずからこれらの病院を視察されるなど、プロジェクトの成果に深い関心を寄せられている。皇太子殿下は国王考案プロジェクトについても、国王派遣医療班による活動やナラーティワート県の**ピクントーン開発研究センター**を視察されるなど、理解を深めてこられた。



オーストラリア・スワンボーン特殊部隊基地で閲兵される
皇太子殿下 (1999年4月30日)

ここ数年間の皇太子殿下の特筆すべき公務のひとつに、国王陛下の代理としてたびたび外国を訪問されたことがあげられる。1996年には英国の**エリザベス2世女王陛下**と会見し、その翌年には**ビル・クリントン米国大統領夫妻**とも会見された。皇太子殿下はタイの卓越した親善大使であるといえる。殿下自身も喜んでこの役割を果たされている。このほか1985年にパチカンで**ローマ法王ヨハネパウロ2世**と、さらに1987年には当時の中国の指導者、**鄧小平氏**とも会見されている。



1998年12月23-29日のインド公式訪問の際、タージマハルにて皇太子殿下とご息女のバッチャラキティヤーパー殿下、M.C.シリワンワリー・マヒドン様

国王、王妃両陛下の次女である**マハー・チャクリー・シリントーン王女殿下**はチットラダー学校で高校まで学ばれた後（1957-1972年）、チュラーロンコーン大学文学部歴史学科を首席で卒業された。すべての学年においてトップの成績を収められ、金メダルを受賞された。その後シンラパーコーン大学大学院修士課程東洋言語学科古典文学専攻、チュラーロンコーン大学大学院修士課程パリー語・サンスクリット語専攻を修了され、シーナカリンウィロート大学大学院博士課程教育開発論専攻で教育学博士号を取得された。また、美術、文学、音楽の分野でも優れた才能を発揮され、スポーツも得意である。



マハー・チャクリー・シリントーン王女殿下



シリントーン王女殿下は1977年12月5日、プーミボン国王陛下から「ソムデット・プラテープ・



ラッタナラーチャスダー・チャオファー・マハー・
チャクリー・シリントーン・ラッタシーマー・ク
ナーコーンピヤチャート・サヤーム・ボロマ・ラー
チャクマーリー」の称号を授けられた。また1996年
4月24日には陸海空軍の大將に就任した。

シリントーン王女殿下は国王陛下の活動をさま
ざまな面から支え、また自身も国民の幸福と生活
向上のための活動に取り組まれている。王女殿下
は1984年、王室によるプロジェクトについて次の



ように述べられている。

「これは国王陛下のプロジェクト、これは王妃陛下のプロジェクト、というように区別することはできません。すべてのプロジェクトは相互に強く結びついているからです」

王女陛下は子どもたちの教育と健康に強い関心を示されている。政府による無料給食サービスはまだまだ実現されていないが、王女陛下は学校に野菜畑を作って子どもたちに必要な栄養を補給するというプロジェクトを考案された。子どもたちは自分で栽培した栄養豊富な野菜を食べることができるようになった。国民のために有益な活動を多数実行されているにもかかわらず、王女陛下はすべての成果は

少数民族リス族の学校を訪問された王妃陛下とシリントーン王女陛下（ターク県サムガオ郡）





国王陛下のおかげだといつも話されている。

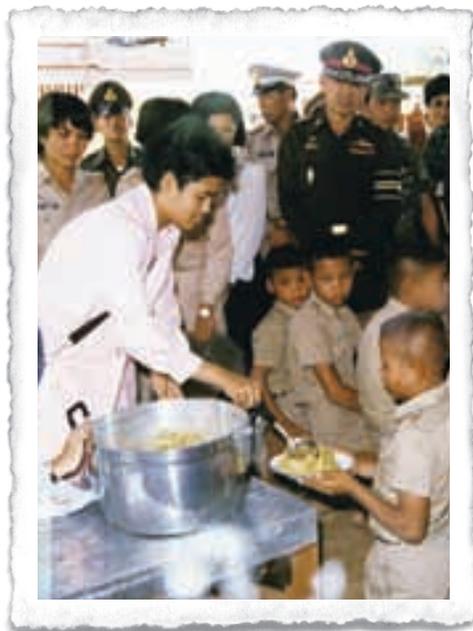
「陛下が訪問された地域では、その後、年を追うごとに暮らし向きがよくなっていきます。人々が健康になり、自然環境や経済状態が改善していきます。こうした成果により、注ぎこまれた努力や財政支援はすべて報われるのです」¹

シリントーン王女殿下の多忙な活動ぶりは他の者の想像を超えるほどである。王女殿下は毎日テレビの王室関連ニュースで紹介される以外にも、国民に会うため全国各地を駆け巡っている。1999年1月11日にチェンラーイ県サンタキーリー学校を訪問された3日後にはペッチャブーン県カオコー寺で納骨

¹ Office of the Special Committee to Coordinate Royal-initiated Projects, 1987. 国王考案プロジェクト特別委員会事務局、バンコク出版、1987年、25ページ。



の儀式に参列された。同年2月9日にはサコンナコーン県にあるプーパーン酪農プロジェクトを訪れ、翌日にはチャイパッターナー財団が支援するノンカーイ県の農地開発プロジェクトを視察された後、2月11日にはプーパーン離宮に戻られた。国王陛下と同じく隣国のラオスに関心を寄せる王女殿下は、1999年2月23日には同国の首都ビ



エンチャンで国王陛下考案開発研究センターをモデルに運営される農業開発サービスセンターを訪問され、その後40キロ離れたところにある孤児たちが文化を学ぶ学校にも足を運ばれた。これらはシリントーン王女殿下が1999年の最初の2ヶ月間に行った活動のごく一部であるが、休息の暇もないほど多忙な日程であったことがわかる。

シリントーン王女殿下は貧困地域の児童を対象とした無料給食活動も支援されている

シリントーン王女殿下は国王陛下と同じく語学の才能に優れ、ヨーロッパの数ヶ国語と中国語が堪能である。また作家としても知られており、外国訪問中に見聞した内容を詳細に記録され、それらをもとに多くの著作を出版されている。



チュラーポーンワライラック王女殿下



国王、王妃両陛下の末のご息女である**チュラーポーンワライラック王女殿下**は著名な化学研究者であり、1986年に設立された「チュラーポーン財団」とバンコク北郊のドンムアン空港の近くにある「**チュラーポーン研究所**」を運営されている。王女殿下は1979年にカセートサート大学科学人文学部の有機化学専攻を首席で卒業され、1985年にはマヒドン大学で有機化学分野の博士号を取得された。



チュラーポーン王女殿下は環境保護と自然素材の活用について特に力を入れてこられた。殿下は優れた専門家が意見交換や議論を行うための機会として、「**チュラーポーン王女科学会議**」という国際会議を設立された。1987年12月の第1回会議は自然の素材を活用した製品をテーマに開催され、また1992年の第2回会議のテーマは「環境と科学技術：21世紀の挑戦」というものであった。

王女殿下はタイにおける科学の発展のために熱心に活動され、その業績は世界にも広く知られている。このため1993-95年には国連環境計画 (UNEP) の**特別顧問**に、1993-94年には世界保健機関 (WHO) の**親善大使**にそれぞれ任命されたほか、1988-90年には英国ヘリテージ・トラスト (Heritage Trust) の「**名誉会長**」に就任、また1990年には国連の「国際自然災害防止の10年・科学技術委員会」に会員として招かれた。

チュラーポーン王女殿下の業績は国際的にも高く評価されており、自身の講演やセミナーへの出席以外にもしばしば海外から招待を受けている。東京農業大学で客員教授を1年間務められた後、1988-89年には米国イリノイ大学の客員教授に就任し、「医療化学と生薬学」という科目を担当された。その後、再び日本で今度は愛媛大学客員教授を務めら



れた。この他、米国のスタンフォード大学、ノースウェスタン大学、ユタ大学、カナダのアルバータ大学、モントリオール大学などでも講義を行い、さらには化学分野に関する多くの学会やセミナーで発表されている。

王女殿下は熱心に研究を続けられる一方、その研究成果をタイ国民の支援のために役立ててこられた。1989年にタイ南部が大洪水に見舞われたとき、殿下は現地の人々に土壌を強固なものにするため根の長い木を植えることを推奨された。ナコーンシータンマラート県とスラートターニー県で洪水被災者の環境復元と生活改善のためのプロジェクトを

UNESCOのポー事務局長からインシュタイン金メダルを授与されるチュラーポーン王女殿下（1976年10月24日）



国王陛下72歳の誕生日を記念し1999年に開かれた「第4回チュラーポーン王女科学会議」の記念書籍を陛下に献上する王女殿下

設立され、みずから運営および管理にあられた。エビ養殖とマングローブ林保護を目的とした海水灌漑プロジェクトや南部5県での予防接種普及活動など、王女殿下のプロジェクトの多くは国王考案プロジェクトと密接に関連している。

チュラーポーン王女殿下はさまざまな慈善活動にも参加されている。社会福祉のための募金イベントで歌を披露されることもあり、また1993年には国王派遣医療チームを率いて隣国カンボジアのバットバン県を訪問し医療活動を行われた。他の王室の方々同様、王女殿下も国民のために多忙な日々を過ごされている。



客員教授として招かれた米国イリノイ大学にて



アルバータ大学で講義をされる王女殿下





国王陛下は地方の農民から聞いた話を開発プロジェクトの
貴重な参考情報として役立てた



第 11 章

損失は「利益」

第

二次世界大戦後の1950年代、タイ経済はまだ復興の途上であり、中央政府による地方開発事業はなかなか進まなかった。こうした状況のなか、国王陛下は国民への支援に関連して「損失は『利益』をもたらす」という考えを示された。これは「長期的な利益を得るための唯一の方法は、各個人が短期的な損失を甘んじて受け入れることである」というものである。国王陛下は次のように述べられた。

「どんな事業でも、一見無駄とも思えるようなお金と努力をつぎ込むことで、最後には直接的、間接的に成果を得ることができます。これはまさに政府の責務です。国民の暮らしがよくなることを望むなら、何十億パーツ、何百億パーツもの政府予算を開発プロジェクトに投入しなければなりません。プロジェクトを遂行すれば政府にとっては資金の損失、債務、支出となるでしょうが、実はその元手は国民のお金なのです。もしプロジェクトがよいものであれば、



国民は後にその利益を享受することができるでしょう。政府は利益を得ることはできないが、国民の暮らしがよくなれば税金を払うことも困難ではなくなります。国民の収入が増えれば政府の税収も増えるでしょう」¹

陛下はタイ経済における農業の重要性を深く理解されている。

「我が国の経済は昔から農業を基盤として
います。国家の繁栄のために使われる政府の収
入のほとんどが農業生産を源泉としています。
つまり、国家の繁栄は農業に大きく依存して

¹ 1991年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



地方の国民と生活に関する問題について対話する

いるのです」¹

国王陛下はまた、国家の安定のため国民が団結して経済を発展させることが必要だと繰り返し強調されてきた。反政府武装勢力の活動が活発化した1957年以降、治安問題は早急に解決

しなければならない問題となっていた。1968年、陛下は「**国家の安定と発展のため、国民は力を合わせて問題の解決法を一緒に考えるべきです**」と述べられている。² このお言葉には、陛下は一部の人々が誤って信じているような「国王は1人で国を救うことができる」という考えをもっていないことがはっきりと示されている。

北部のナーン県やルーイ県のような国境に接する遠隔地は、現在でもたどり着くのに困難が伴う。反政府活動により治安が悪化した1960-70年代には、山岳地帯の密林にある村々への移動はヘリコプターに頼るしかなかった。この時代は、いわゆる国

¹ 国王考案プロジェクト特別委員会事務局『プーミボン・アドゥンヤデート国王陛下と開発活動』、バンコク・プリンティング、1987年、26ページ。

² 1968年12月8日、シワーライ庭園で開催されたパーティーでのお言葉。



民のための闘いの時代であったが、政府と国民が王室への深い忠誠と敬愛の念を共有し、協力したからこそ闘いに勝つことができたといえる。

実験田で稲刈りをされる両陛下（アユタヤ県）

初期の開発プロジェクトの中心は教育活動であったが、これは政治とは無関係である。かつて戦闘のあった地域で人々が平和に共生できるよう、生きるために必要な食べ物を生産する方法について教えることであった。国民はこのような教育活動を始められた陛下に感謝している。

タイでは人口の多数を依然として農民が占めている。彼らは学問的知識に乏しく、貧困と病気に苦しめられている。そうした困難を軽減することがいかに重要な課題であり、陛下がどれほど献身的な姿勢で取り組んでこられたかは、国王プロジェクト



の膨大な数から理解することができる。活動がどんなに大変でも陛下が先頭に立って問題を解決してきたのは、国民の困難な状況に対する深い理解に根ざした目標をもってこられたためである。

陛下は農業に関するプロジェクトを考案する際、地方の人々にただ資金を与えられるのではない。まず自分で調査と実験を行い、成果を確認してからプロジェクトの実行段階に移るよう指示を出される。

農業の発展は国家の開発目標の1つであるが、現在においても農業は**低生産性**という問題を抱えている。陛下が訪問された地域では、農民は時代遅れの古いやり方で農業をしており、年に1度の収穫では自分たちの食べる量すら満足に確保できないという状態であった。また他の地域では、自家消費には十分でも販売できるほどの農産物を生産すること



国民の幸福のため、
多忙な毎日過ごす
国王陛下



ができない。生産者グループや協同組合の形をとらなければ仲買人や買い付け業者と不利な立場で取引をさせられる。研究や実験に対する政府からの支援も足りない。国王陛下は桑や生ゴム、薬草などの換金作物の生産、牛、水牛、ヒツジ、ヤギなどの家畜の飼育に特に関心をもっていたため、少なくとも何らかの研究を行った上で活動を始めるべきだと考えられた。

水田に種籾をまかれる皇太子殿下（スパンブリー県）

研究は、どの作物がどんな土壌に適しているかなど、さまざまな条件を考慮して行われなければならない。陛下は農民が栽培すべき作物は市場に需要があるものでなければならないと強調し、研究においても市場ニーズや品質のよさを重視すべきだと述べられている。また、農業経営や経理についても農民



自ら考案された農地開発プロジェクトでトラクターを運転されるシリントーン王女殿下(ナコンナーヨック県チュラチョームクラオ陸軍士官学校にて)



に学ばせるべきだと提案された。この考えはタイ・イスラエル農業実験センターの農民グループに対して話された「農業でよい成果を出すには農学、マーケティングそして初歩的な経済学の知識をもたなければならない」というお言葉にも表れている。¹

考案されたプロジェクトの成果が出るのは実践した後であり、計画のままではだれの利益にもならないということを陛下は理解されていた。

「農業や農民の生活は、学術書や研究に頼るだけでは変わりません。実践されてこそ初めて成果が出るのです」²

¹ 1972年5月14日、プラチュアプキーリーカン県タイ・イスラエル農業実験センターでのお言葉。

² 国王考案プロジェクト特別委員会事務局『プーミボン・アドゥンヤデート国王陛下と開発活動』、バンコク出版、1987年、38ページ。



上記の理由から、陛下がプロジェクトを実行に移すまで時間を無駄に費やされることはない。

水源開発は国王考案プロジェクトの中心である

「国王考案プロジェクトは規則にもとづいて行われていないという意見もあります。確かにそうですが、私はプロジェクトが実行できる見通しがついたら、入札や契約が行われなかったり費用が少々高かついたりしたとしても速やかに実行に移さなければならないと考えています」¹

初期の国王考案プロジェクトは1960-1970年の間に拡大し、一部は政府機関の支援を受けるように

¹ 1991年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

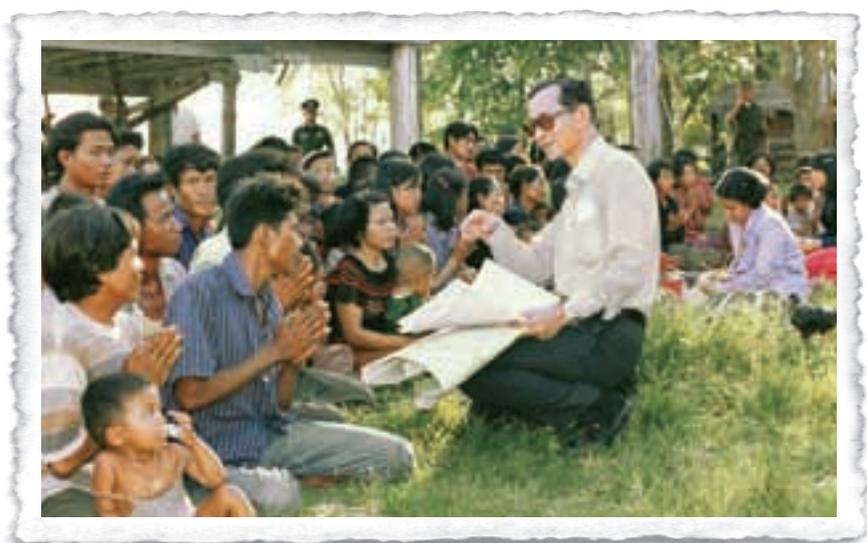


なった。その間、政府事業の補完的な役割を果たすよう体系化と合理化が図られたが、一方で「プロジェクトは各地域の地理、気候、社会的諸条件を考慮し、国民に直接利益をもたらすような形で遂行しなければならない」という国王陛下の方針に導かれてきた。また国王考案プロジェクトは地方の人々が自立して生活できるよう支援することを第一の目的に掲げてきた。国民が自分の力で生活をよくすることを学べば、政府の支援を減らすことができる。



水源開発プロジェクト
を視察

現在、国王考案プロジェクトは3,000件を数えるまでになった。プロジェクトは**教育、環境、保健衛生、社会福祉、土壌、水源、灌漑**などに関するものではあるが、どれも複数の分野にまたがる複合的な性質をもち、1つの分野だけに収めることは難しい。

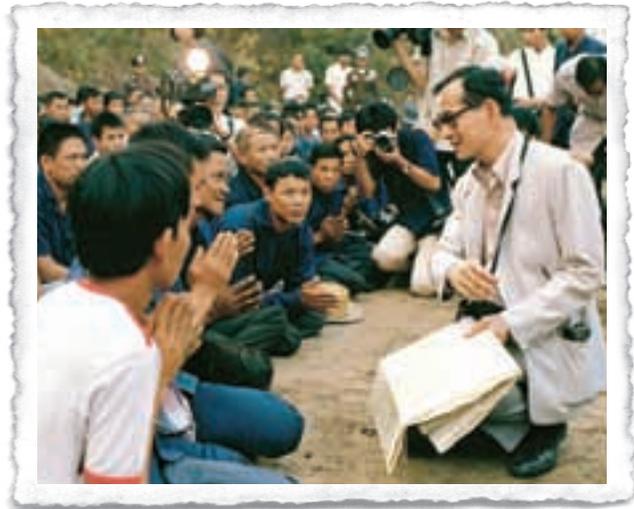


その例として水に関連したプロジェクトが挙げられる。水は人間にとって重要な存在であり、飲み水としてだけでなく農業にも利用されている。水不足を経験した各地方の人々は、水がどれほど大切なものかをよく理解している。水不足は雨が降らないからだけでなく、土壌に砂が多く含まれるために雨がすぐに地中に吸収されてしまうといったさまざまな原因がある。土壌の研究や、土壌の保水力を高めるために植える植物の研究などを「水関連プロジェクト」と呼ぶことに疑問を抱く人がいるかもしれない。また**酪農プロジェクト**でも、牛を放牧する場所に牧草を生い茂らせるためには水の確保が重要であり、水源保護はプロジェクトの中核部分を占めることになる。このため、このプロジェクトが酪農と水源保護のどちらを優先するのかという

地方訪問の際に必ず携行する地図は開発計画の立案に不可欠である



開発計画の参考とする
ため地元住民の話に耳
を傾ける



問いに答えることは難しい。

農民に現金収入をもたらす多様な作物が栽培されているが、国王陛下は**コメ**がタイ人の主食であることを強く意識されている。国王考案プロジェクトの多くが直接、間接に稲作と関係している。例えば灌漑制度、土壌管理、畑作である。都市住民は多様な食べ物を消費するようになったが、地方の人々にとってコメはいまだ主要な食べ物である。国王陛下はプロジェクトが実施地の社会的・文化的環境と調和することを重視され、稲作が将来にわたって地方開発の中心であり続けるよう、コメに関する小規模で簡単な事業から始めることを奨励されている。

前述したように、陛下は新しいプロジェクトの準備のため情報収集を行う際、地方の人々と直接対話





することを好まれる。持参したデータを現地の状況と比較しながら地元住民と意見交換されるのである。新聞に掲載される写真には、陛下が自分専用の**地図**を手にし、周囲を地方の行政担当者と住民が囲んでいる様子がしばしば登場する。陛下が地図の読み方をよく理解されていることは、活動と国民訪問に大いに役に立つ。陛下は各地方の地理を熟知されており、山や谷がどれほど急峻であるか、一番近い水源のある森林までの距離や方角などの情報も地図から読み取られている。

専用の地図を見ると、陛下が地理に関していかに優れた能力をもっているか驚かされる。そこには衛星写真の切り抜きが貼られていたり、色鉛筆で細かい点線が描かれていたりする。わかりやすい地図を自作され、地方の国民を訪問する際にはこれを利用されている。どんな場所を訪れるときも事前に地図で研究されるので、現地を視察すれば何をすべきかすぐに判断できる。陛下の仕事ぶりは計画専門家の間で「**特急地方調査**」と呼ばれている。

バンコクでも統計資料や地理報告書などを用いての情報収集は可能なのに、なぜ陛下は遠く離れた移動の困難な地域にみずから足を運ばれるのだろうか。その答えは陛下のお言葉のなかにある。



「開発は地方の物理的、社会心理的および文化的条件に配慮して行わなければなりません。社会心理的条件というのはその地域に暮らす人々独特の思考法で、他人が変えるよう強制できないものを意味します。我々にできるのは提案のみです。相手を自分たちと同じように変えることを援助の目的にしてはなりません。彼らが本当に必要としているものは何かを知り、開発プロジェクトの方針を相手にしっかりと説明すれば、大きな成果をあげることができるでしょう」¹

¹ 1991年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



国王考案プロジェクトにおける陛下の主要な方針として、現地の資源を有効に利用しなければならない、同じ地域で活動する各機関のプロジェクトは互いに協力し合い、統合的に運営されなければならない、という考えがある。また、簡単でお金のかか



水源開発プロジェクトの実施地を視察

らない手法を採用すべきであり、地方住民の生活を都市住民の基準に合わせて急いで変える必要はない。急激な変化は地方のコミュニティーが受け継いできた伝統的な生活様式に悪影響を与えるからである。多くのプロジェクトの原点となっているこうした方針は地方開発活動の第一段階に関するもので、次の段階に進む前に国民が基本的ニーズを満たし、一定水準の生活ができるようになることが大事だという考えである。

国民が自分の力で生活し、飢えや病気に苦しまずに済むだけの収入を得るための手段を与えること



は、有効で現実的な解決策である。国民の不幸を取り除き、幸福をもたらす陛下の活動には大きな苦勞が伴うが、自力で生活できるよう支援してくれる陛下にだれもが感謝している。陛下はしばしば「職業をもち、自力で十分な生活ができるようになった人々は、より高い水準への向上を目指すでしょう」と述べられている。各種プロジェクトは、国民にとって「**自分の目で見て、やってみる (see and do)**」という方法を学ぶための生きた見本となっている。

開発計画について地図を用いながら説明する

プロジェクトに関する陛下のもう1つの重要な方針は、副収入を増やすことを国民に奨励するという



ものである。農業や漁業に従事する大多数の国民はみずからの食事をまかなうには十分な収穫をあげているものの、生活水準の向上をもたらすほどの収入増にはつながっていない。**全国各地にある国王後援学校や国王考案開発教育センター**ではコメ作りだけでなく、副収入を生むさまざまな換金作物の栽培に関する研修も行われている。農業以外の職業に興味をもつ人には手工芸品作りの指導を行い、収入の増加と同時に伝統文化の継承を促進している。



国民の幸福こそが国王陛下の最上の願いである



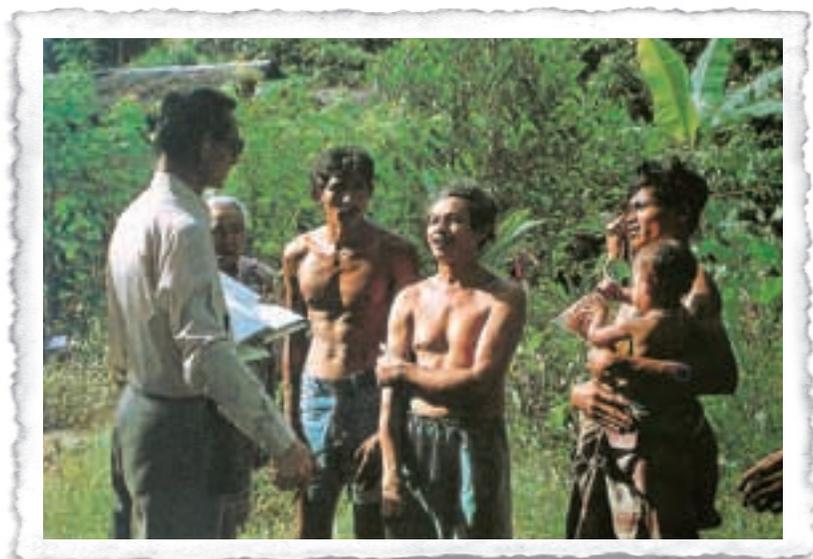
第 12 章

国民への愛

国

王陛下は60年もの長きにわたり先頭に立って国家の発展に尽くされてきた。指導者としての陛下は、他の人々や政府機関と密接な関係を築きながら仕事を進めるというスタイルをとるため、共に働く人々の間で目的の共有が図られ、プロジェクトは円滑に運営される。チットラダー王宮で**小規模な私的プロジェクト**を始めたとき、陛下は魚の養殖と森林保護に関する研究と実験を行うよう指示された。このことが政府に積極的な行動を促し、本格的な養殖プロジェクトや森林保護活動の実践につながった。陛下の控えめな提案がきっかけとなって始まった研究は、後に大規模なプロジェクトを生み出すが、それには多くの人々や団体の協力が不可欠である。

自身のアイデアを具体化するため、国王陛下は専門家を集めて意見を聞き、最初の構想を作るための担当者のみずから選ばれた。選ばれた者もみな喜んで仕事を引き受け、考案されたプロジェクトは政府の事業よりも順調に進められてきた。複雑な



農村の人々に水源開発の重要性について説明される



開発プロジェクトの参考とするため住民から情報を収集

行政制度を介さず、旧来のやり方にこだわらない手法も成功の要因といえるだろう。

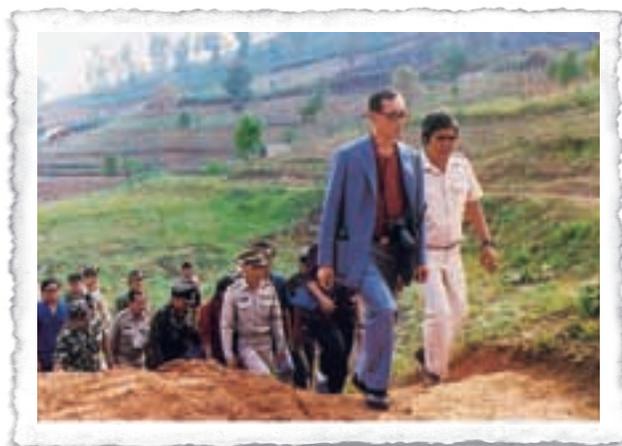
1993年12月4日、国王誕生日祝賀式典におけるお言葉のなかで、陛下はもっとも早く成果をあげたプロ

ジェクトの事例を紹介された。それはチェンマイ県サンカムペーン郡での「**ホワイラーン貯水池建設プロジェクト**」である。1987年2月、陛下が現地を訪問した際、住民は貯水池を作ってほしいとお願ひした。陛下が同行の技術者に相談したところ、建設は可能であるとのことであった。そのわずか3日後には工事が始まり、1年以内に完成した。陛下は素早い対応の秘訣を「**ともに力を合わせ助け合うこと、あまり喧嘩をしないこと**」と述べられている。¹

国王考案プロジェクトの完成に時間がかからないもう1つの理由は、陛下自身の迅速な対応と冷静な思考である。

「国王考案プロジェクトは学術的な理論に沿ってないという人もいますが、確かにそう

¹ 1993年12月4日、チットラダー宮殿における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

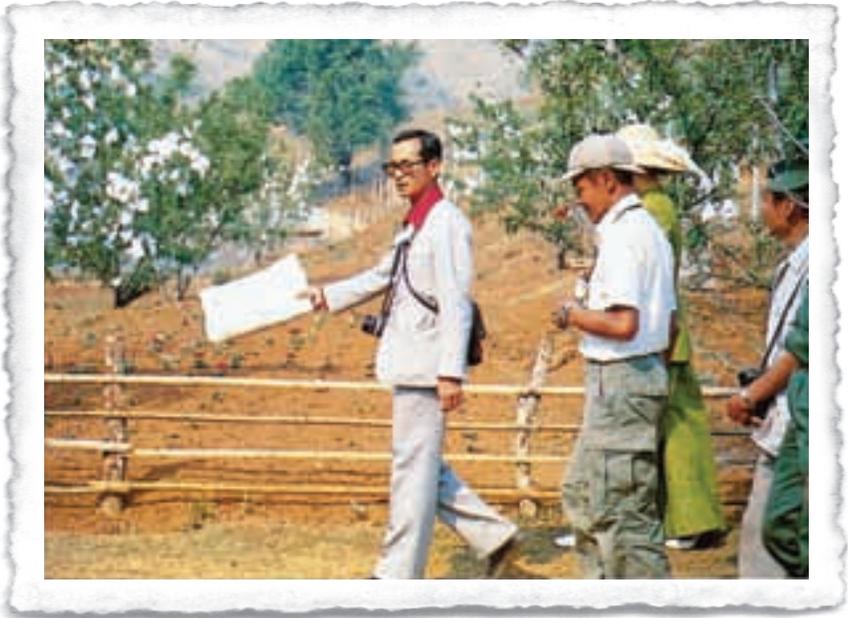


遠隔地に住む国民の問題について学ぶため山道を歩いて移動される

です。しかし、私はプロジェクトが実施できることがわかれば、すぐに始めなければならないと思います」

国民が60年間にわたり陛下に忠誠と敬愛の気持ちを抱き続け、考案プロジェクトのために働いてきたことは、陛下がいかに優れた指導者であることを示している。外国人は陛下が考案したプロジェクトを実行できるのは国民に指示できる立場にいるからだと考えるかもしれないが、実際にはそうではない。タイ国憲法は国王の役割と権限について細かく定めているが、国王個人のプロジェクトに協力するよう国民に命じる権限があるとはどの条文にも記されていない。それでも陛下は多くの国民から絶え間ない支援を受けてこられたし、その支援の輪は広がる一方である。

国王陛下がプロジェクトで示す卓越した才能と



山岳民族がケシの代替作物として果物や野菜を栽培し生計を立てられる
ようにすることがロイヤルプロジェクトの主要目的である



真剣な態度は、関係者たちの知的好奇心を刺激してきた。一見シンプルだが合理的なアイデアは、政治家から政府職員、農民、大学の研究者までプロジェクトを支える人々を魅了し、やりがいと知識をもたらすのである。陛下は「プロジェクトは国民が自力で実行できるものでなければならない」としばしば発言されている。プロジェクトが実施可能かどうかは最初にかかるコストにもとづいて決めるわけではない。場合によっては「**たとえ支出が本来あるべき額よりも高くなってしまっても**」¹ 実行に移すこともある。例えば、北部チェンラーイ県の

各地域に適したプロジェクトを実行するため、地元住民から様々な情報を収集される

¹ 1991年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



国民と対話される国王陛下

「モモ栽培試験場」では、管理を担当する研究者を高給で雇わなければならなかった。しかし試験場での研究を経て提供されたモモの木を農民が実際に栽培したところ、満足できる成果が得られたのである。コストの削減はできなかったが、貧しい農民に収入の増加をもたらし、外国からの輸入に頼っていた農産物をタイの山岳地帯でも生産できるようになったことでタイ経済に長期的な利益をもたらした。バンコクの高級ホテルは涼しい地域でしか栽培できない野菜や果物が容易に入手できるようになり、それらがヨーロッパからの輸入品と変わらないおいしさであると認めている。

国王考案プロジェクトの関係者たちは陛下の優れた能力に敬服し、国民に恩恵をもたらす活動に携わることを誇りにしている。国民の陛下に対する感謝



と尊敬の気持ちは揺るぎないものである。ある時は強い日差しの中、またある時は雨に打たれながら何時間も陛下の到着を待ち続ける地方の国民の姿は、外国人にとっては信じがたい光景であろう。

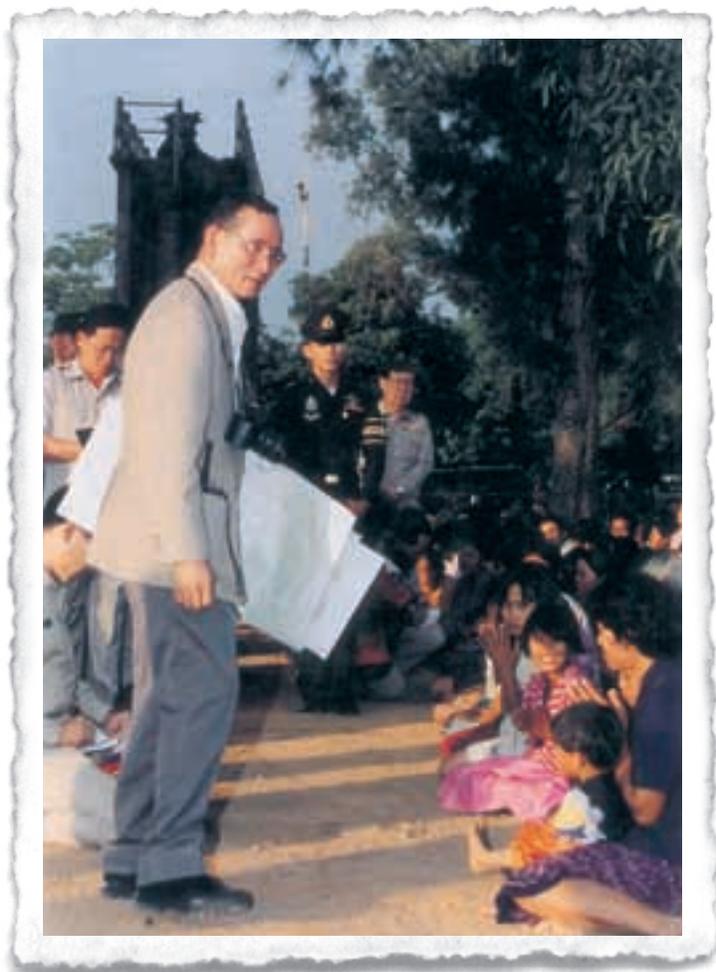
人々が陛下への気遣いから歩かれる道にハンカチや布を敷くのを見て、陛下の足跡をサイン代わりに取っておくタイ独特の習慣があるものと誤解してしまうかもしれない。あるいはまた、バンコクがどこにあるのかさえ知らない地方の国民が「陛下は自分たちの生活をよい方向に導いてくれる」と心の底から信じているのだろうかと思ふ人もいないかもしれない。

地方訪問の際、国王陛下は国民と親しく交流される



1996年の即位50周年祝賀式典（カーンチャナーピセークの儀）では、陛下に対する国民の忠誠と敬愛、感謝の念が限りなくほとばしった。タイ国民の幸福のため陛下が献身的に活動が続けてきたこと、貧困に苦しむ地方の人々のために国王考案プロジェクトを実施してきたことを国民はよく理解している。国民がプロジェクトに参加するのはだれかに強制されたものではなく、すべて自発的なものである。もし陛下が1952年にプロジェクトを始めなかったら、政府に全国規模で援助活動を行うだけの力がないなか、だれが遠隔地に住む貧しい国民を助けられただろうか。

陛下が国王考案プロジェクトを始めた最初の30年間を振り返ってみると、いかに大変な時代であったかがわかる。1952年から1976年までの間に5度のクーデターが起きるなど政府が不安定であっても、多くのプロジェクトが成果をあげた。1961年には初めて正式な国家開発計画が策定されたが、それ以前は開発がうまく進まず、年間国民所得は1人当たりわずか2,500バーツだった。また、近隣諸国で40年続く紛争がタイにも暗い影を落としていた。プロジェクトにより貧しい国民を救うことが反政府勢力の脅威に対する抑止策として有効であったことは、政府にも国民にも広く認識されている。



地方訪問の際は地図とカメラ、無線受信機を必ず携行される



国王考案プロジェクトの成果に関する説明に耳を傾けられる



脅威は人間によってもたらされるだけではない。時には自然の脅威の方がはるかに甚大な被害をもたらすことがある。自然の猛威の前では人間は無力な存在である。自然災害が発生すると、国王陛下は被災者の救助、医療、輸送、教育などの分野において、さまざまな専門機関を通じて支援の手を差し伸べられてきた。これらの機関は主に寄付金によって運営されており、スタッフもほとんどがボランティアである。陛下が他者のために働きたいと願う多くの人々を集めたことが、国王考案プロジェクトに成功をもたらしたといえるだろう。



国王陛下は移動診療車を保健省に寄贈した



第13章

国民の健康を願って

国

王陛下は国民の健康と福祉の問題に絶えず関心を払ってこられた。医療分野の学術会議に参加され、また長年にわたり全国各地の大学の卒業式で医学生にみずから卒業証書を授与されている。地方の農村を訪問する際には必ず「王室医療班」を同行させ、一般の患者の治療にあたるよう指示されている。手術を要する者は県立病院に移し、必要ならバンコクの病院に転送させることもある。その際の交通費、治療費、また患者が一家の稼ぎ手であれば生活費まで、陛下が負担される。

陛下は十分な教育を受けていない人々が医者から処方された薬を正しく服用できるかも気にかけている。遠隔地の村々を訪問する際、陛下は薬の服用方法について村民に詳しく説明され、それを書き留めたメモを渡される。また国王、王妃両陛下は国民の健康を守るために必要な物資を地方訪問のたびに下賜されている。マラリアが流行した地域では蚊帳を、日々の食事にヨウ素が不足している地域では塩を、気温の下がる高地に住む人々には防寒具を



贈られる。陛下は遠隔地に勤務する兵士や政府職員に基礎的な医療品を下賜する際、住民から治療を求められたら医療機関に連絡する前に彼らのために使うようにと述べられた。これらの物資は陛下の個人資産と政府薬事部、そして民間の寄付によって準備されたものである。

国王陛下は在位初期の1955年から王室医療班を地方訪問に同行させ、国民に対する医療活動を行うよう指示されてきた。また、地方の河川や運河沿いに暮らす人々に対する医療活動を促進するため、タイ赤十字社に移動診療船「ウェーチャパー号」を寄贈するなど、さまざまな支援をされている。

陛下は感染症対策など各種事業の運営資金として、いつも個人資産を用いてこられた。1950年代にはコレラが大流行したが、陛下個人の力では国民



タイ赤十字社の移動診療船「ウェーチャパー号」



ブラ・モンクットクラオ病院病理学研究所でコレラ予防ワクチンの製造過程を視察

1人ひとりを救うことは困難であった。患者があまりに多すぎたためである。政府は脱水症状を引き起こしたコレラ患者の治療のため、生理食塩水を外国から大量に輸入しなければならなかった。そこで陛下は、良質な生理食塩水を国内で生産するための研究を始めるよう指示された。国内生産が始まると安価な生理食塩水が国民の元に届くようになり、コレラによる被害が減るとともに治療費も大幅に節減された。

陛下は在位初期からさまざまな問題の解消に取り組み、成功に導いてこられた。また、国家レベルの



「国王医療班」の
活動を視察

重要な問題に対しては長期的な対策を講じてこられた。自分の能力を国の発展のために使いたいと望む多くの国民にとって、陛下は求心力の役目を果たされてきた。

保健衛生分野における国王陛下の功績は、海外でも広く認められるようになった。1992年には世界保健機関（WHO）より「ヘルス・フォア・オール（すべての人のための健康）金メダル」が授与された。

陛下は東北部のプーパーンラーチャニウェート王宮や南部のタクシンラーチャニウェート王宮など、地方にあるほとんどすべての王宮の入り口に医療班を駐在させ、無料で診療を行うよう指示された。担当の医師や職員は主として王室専属医や王室医療部、軍、保健省からの派遣者で構成されている。また、



寄贈した歯科診療
車に点粉される国
王陛下

陛下が地方の王宮に滞在されている間は王立外科学会所属の専門医が地元の病院で手術を行い、その費用は陛下が負担されている。

地方の多くの国民が歯の病気で苦しんでいることを知った陛下は、1970年4月18日に「**移動歯科班**」を設立し、国王専属歯科医を定年退職したばかりの**シー・シリシン博士**を責任者に任命された。

シー博士によれば、陛下は「地方の子どもたちの歯科医療のお世話をしてほしい。必要な費用はすべて私が負担し、遠く離れた村に行くための移動診療車も用意する」と述べられたという。そしてお言葉のとおり、陛下は歯科診療専用の椅子をはじめ、必



要な器具・機材がすべて揃った大型車両を下賜された。

陛下が地方の村を訪問し、開発に関わる活動がされている間、同行の侍医と医療チームは村民の健康診断を行う。陛下がその地を離れられた後も医療チームはすべての人々の健康診断が終わるまで村に残ることもある。この「**国王特派医療チーム**」は王室医療部の医師と職員で構成されている。また、王立外科学会所属の外科医、プラ・モンクットクラオ病院およびシリラート病院所属の眼科医、耳鼻咽喉科医、アレルギー専門医を含む医師たちがボランティアで参加し、現地の医師と協力して医療サービスを提供している。陛下の援助を受けて地方

プラ・モンクットクラオ病院に朝鮮戦争で負傷した兵士を見舞われる（1952年11月）



負傷兵を見舞う

の病院に入院している患者は王妃陛下秘書部の担当者による定期的な訪問を受け、退院するまで見守ってもらえる。家計を支える立場の患者がバンコクで治療を受けることになれば、秘書部は残された家族を世話する担当者を

派遣したり、現地の政府職員に定期的な訪問するよう指示したりする。患者の体が不自由になったり死亡したりした場合、就学中の家族には奨学金が支給される。

陛下は国のために働いて病気になったり負傷したりした兵士や政府職員を特に気にかけている。体が不自由になったために彼らが家族を養えなくなることを心配された陛下は、プラ・モンクットクラオ病院に「**義手・義足製造職業訓練センター**」を設立する資金を提供したほか、負傷兵やその治療にあたった者をチットラダー王宮での食事会に招待し、贈り物を下賜されている。

1982年、国王陛下は村落での**保健衛生人材育成プロジェクト**を始められた。ボランティアの村民に基礎研修を行い、そこで得た知識をさらに他の村民に伝え、普及させるというものである。研修の内容は応急処置の方法や家庭常備薬の使い方、食品衛生に関する知識、病人を医療機関へ搬送する方法など



ブラ・モンクットクラ
オ病院「義手・義足製
造職業訓練センター」
で障害を負った元兵士
の職業訓練を視察され
る国王陛下と皇太子殿
下（1968年）

基本的なものである。研修は全国の県立病院を拠点に行われた。陛下の財政支援で治療を受けた者も延べ数万人に達している。「国の背骨」である農民が適切な治療を受け仕事に復帰するのを助けることにより、陛下の医療チームは国の経済にも大きく貢献している。

ラーチャプラチャー・サマーサイ財団

国民の健康を気遣われる国王陛下にとって、緊急時の医療支援は問題の一時的な解消にすぎない。在位初期の30年間、保健衛生問題の主な要因となっていたのは、都市部から離れた地域のインフラが未整備であったことだ。遠隔地の住民が保健サービスを受けられる機会は限られており、病気になっても診療所や病院にたどり着くのに困難が伴う。陛下はこの問題に深い理解を示し、迷わず対応された。



国王陛下は母君のシーナカリントラー殿下とともにラーチャプラチャー・サマーサイ財団施設の開所式に臨席された（1960年1月16日）

陛下が問題解決のために個人資産を提供されたもう1つの例は「**ラーチャプラチャー・サマーサイ研究所**」の事業である。保健省は1957年、国王陛下の寄付金約100万バーツを元手に**ハンセン病**の診断、予防、治療および管理を目的とするこの研究所を設立した。外国機関から協力を得てハンセン病治療に関する研究開発活動を行うほか、この病気に関する情報収集と知識普及のための連絡センターとしても機能している。研究所では世界中の研究者が一堂に会し情報交換を行うセミナーを年に1、2度開催している。また、この病気の予防と治療のための研修が、タイだけでなく外国の医療・保健



ラーチャプラチャー・サマーサイ研究所とプラブラデーヌ病院の
模型を見学される国王陛下とシーナカリンタラー殿下（1960年1月16日）



プラブラデーヌ病院を訪問された国王陛下



国王陛下はプラ・
バムラーツナラー
ドゥーン保健大臣
(当時)に財団設立
のための基金を下
賜した(1960年
1月16日)



衛生担当者を対象に行われている。陛下の関心はタイ国内だけにとどまらず、この病気で苦しむ世界の人々にまで向けられている。

ラーチャプラチャー・サマーサイ研究所は設立から短期間に研究面で大きな成果を収めるとともに、ハンセン病で苦しむ人々に手を差し伸べたいと願う一般国民の支持を得た。

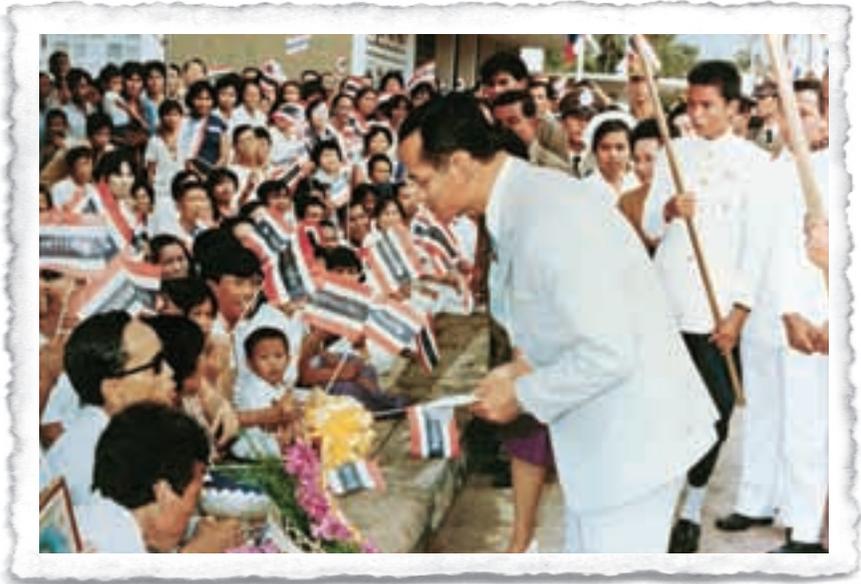
同研究所の成功を受け、陛下は1960年に個人資産40万バーツを運営資金として、ハンセン病治療と研究開発活動を支える「**ラーチャプラチャー・サマーサイ財団**」を設立された。この財団では患者からの相談を受け子どもの養育や教育、雇用など生活に関する支援を行うほか、手工芸品作りなどの職業訓練も実施している。

財団の優れた活動は国際的にも高く評価され、現



ラーチャプラチャー・サマーサイ学校の文化ホールおよびスアンチット幼稚園棟の
開所式のため同校を訪問された国王陛下（1981年3月28日）

在では一般国民や福祉団体、民間企業のほか、日本やドイツ、米国など外国のボランティア団体からも支援を受けている。財団はサムットプラカーン県プラプラデー郡にハンセン病の研究と治療のための施設を有し、患者の子どもたちのための寄宿学校も併設されている。また、北部チェンラーイ県にも治療と職業訓練を目的とする施設を設立した。医師や看護師、医学生、保健センター職員ら約3,000名が毎年この施設で研修を受けている。財団の設立資金とプラプラデー郡での寄宿学校の建設資金を提供した後も、陛下はラーチャプラチャー・サマーサイ研究所と財団の活動をつねに気遣い、見守ら



国王陛下はシリントーン王女殿下とともにラーチャプラチャー・サマーサイ研究所の開所式に臨席された（1979年7月6日）

れてきた。寄宿学校の生徒約2,000名のうち、150名は学費を全額免除されている。食費と寮費がすべて無料であるほか、教科書や文房具、制服、小遣いも支給され、陛下の温かい心遣いのもとで生活できるのである。

ラーチャプラチャーヌクロ財団

1962年、タイ南部12県は猛烈な台風に襲われ、深刻な被害を受けた。この影響であらゆる公共機関が機能停止に陥った。死者600名、負傷者も数百名に達したが、ほとんどの人が緊急医療支援を受け



られなかった。陛下は被災地の状況を聞かれるとすぐ、住む場所を失った数千の被災者に手を差しのべるようメディアを通じて国民に呼びかけるとともに、みずから支援活動の先頭に立たれた。困難な状況に陥ったとき、タイ国民は国王陛下の絶大な影響力を頼りにする。陛下の呼びかけを聞いた全国の人々から義援金や支援物資が続々とチットラダー王宮に届けられた。陛下はタイ国民が同じ国の人間として助け合い、友人としての気持ちをもつよう導いたといえる。多額のお金が集まり、支援活動後に資金が残ったため、社会福祉活動を行うための財団が設立されるにいたった。

国王陛下が設立されたこの「ラーチャプラチャー



ヌクロ財団は嵐や洪水などの自然災害、大規模な火災、事故などの被害者を救済することを目的としている。緊急医療支援や子どもたちのケア、事故防止、災害救助、被害を未然に防ぐ計画作りなどに関する訓練を受けたボランティアが活動にあたっている。緊急時に政府と協力して活動するこうしたボランティアは国内各地に1,500名以上いる。1962年から82年の間だけでも財団には2,390件の援助要請があり、計3,914,608名に対し支援を行った。自身の考案で設立されたこの財団をいつも見守っていることを、陛下は次のようなお言葉で表現された。



ラーチャプラチャースクロ財団が教育省の協力により設立した31の「ラーチャプラチャースクロ学校」うちの1校



「ラーチャプラチャーヌクロ財団は国にとって大きな保険会社のようなものです。不幸に遭遇した国民は、彼らほど不幸ではない人々から寄せられる義援金や物資のおかげですぐに適切な支援を受けることができます。財団は政府職員と協力しながら長年に渡り活動を続け、困難に直面した国民を助けています」¹

地方の子どもたちに
学習用品を下賜される
陛下

災害によって困難に直面し、緊急支援を必要とする人々だけが陛下の気遣いの対象ではない。政府機関や教育機関、民間団体、企業などが連携して社会問題の解決と人材育成、社会と経済の発展に

¹ 1970年11月19日、放送局チャンネル3で放映されたお言葉。



地方の子どもたちに
学習用品やスポーツ
用具を下賜する（サ
コンナコーン県パン
ナーニコム郡ナー
カム村）



取り組むため、1960年に政府社会福祉局と民間団体により「**タイ国社会福祉評議会**」が設立された。翌1961年に国王陛下は評議会を陛下後援の団体に認定され、王妃陛下が名誉会長に就任された。陛下は、人間が相互依存の関係にあり、助け合わなければならないことを国民に理解させようと力を尽くされている。1974年のお言葉で、陛下は次のように強調された。

「だれも自分ひとりでは存在することができません。ひとりの身に何かあれば、他の人間にまでつながっていくのです」

陛下は国民のためにさまざまな活動を続けられているが、しかしながら国民の望みには限りがないものである。国民の指導者である陛下はかたときも活動を休まれることがない。



遠隔地の子どもたちに学習用品を下賜される



上のお言葉からからちょうど1年後、国内の治安問題が深刻化していた時期である。治安維持活動中に負傷したり体に障害を負ったりした兵士や警察官、一般国民、ボランティアを支援するため、陛下は「**サーイチャイタイ財団**」を設立された。この財団は陛下後援の団体であり、陛下の考案にもとづく活動であれば必ず国民のためになると信じた人々から多くの寄付金が寄せられた。財団の当初の目的は、職務中の負傷で体が不自由になった人に対し、政府機関からの援助が届くまで緊急支援を行うための資金集めであった。その一方で財団は職務中に死亡した人の遺族に対する支援活動も行うようになった。



地方視察の際には必ず特製の専用地図を携行する



第14章

チャイパッターナー財団

チャ

イパッターナー財団は、政府機関が予算面での制約や手続きの問題により迅速に対応できない場合でも国民を助ける開発プロジェクトを

ただちに実行できるよう、国王陛下の考案により設立された。陛下が名誉総裁に就任され、シリントーン王女殿下が総裁を務められている。緊急の課題に迅速かつ適切に対処することは、いかなる場合でも国民に利益をもたらすものであり、財団の活動は開発活動をより完全なものとするための補完的な役割を果たしている。



「チャイパッターナー財団の活動によってもたらされる国の勝利とは平和であり、(中略)すなわちタイ国が繁栄を享受することです。『チャイ(勝利)』、『パッターナー(開発)』の名が示すとおり、それは開発の勝利なのです。開発の勝利が目指すものとは、平和と繁栄、そしてよりよい暮らしなのです」¹

¹ 1994年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



チャイパッタナー財団の
マーク

国王考案プロジェクト
視察の際にチャイパッタ
ナー財団のマークが刺繍
されたジャケットを着用
する国王陛下

チャイパッタナー財団は1988年6月14日、財団法人として設立された。チットラダー王宮に事務局があり、陛下自身が深遠な意味をもつ財団のマークをデザインされた。全体は危険から身を守る盾の形をしており、上部に王冠を戴いている。中央は4つの部分に分かれており、上部左側には「**プラ・セーンカンチャイシー**」という小剣が描かれ、国の安全を守り、困難を克服する力と国の力を意味する。上部右側は「**クラビートウット**」という旗で、勝利と成功を表している。下部左側は**ハスの花**で、優美、平和、豊穰、国民の幸福を表している。下部右側は



チャイパッターナー財団理事会に出席された国王陛下

「**プラ・マハーサン**」という名の貝で、大地を潤す水を意味する。

財団の初期の活動に、サラブリー県チャルーンプラキヤット郡ホワイボン町にある**モンコンチャイパッターナー寺院**周辺の土地16ライを取得し農業開発プロジェクトセンターとする「**国王考案モンコンチャイパッターナー寺院地域開発プロジェクト**」の設立がある。このセンターは農民と職員が地域の灌漑について意見交換し、体験を共有するための場となっている。1年を通じて利用可能な貯水池を掘り、同時に魚の養殖も行っている。陛下が「**寺院をタイ人の宗教、生活そして職業訓練の中心的な存在にしたい**」と考えられたとおり、モンコンチャイパッターナー寺院はプロジェクトにとって重要な役割を果た



している。センターでは、住民が新しい技術を取り入れるよう導く役目を僧侶が果たしている。1年中水を欠かすことなく農作物の新品種の試験栽培を行うことで、農民の収入が従来からの2倍から3倍に増えたことにも成果が表れている。

既に述べたように、国王陛下が発明された「**チャイパッタナー水車**」は汚れた水を魚の養殖ができるまでに浄化する実用的な機械である。同財団ではチャイパッタナー水車が水中に最大限に酸素を注入することで水質を改善できるよう、研究開発を続けてきた。ドゥシット都立動物園、プラ・モンクットクラオ病院、ボウォンニウェートウィハーン寺院、チットラダー王宮、テープシリン寺院、チャカワットラーチャーワート寺院など、バンコク各地でこの水車が使われている。この他、チェンマイ県メーカー運河浄化プロジェクトやペッチャブリー県の国王考案パックピヤ岬環境研究開発プロジェクトでも利用されている。

チャイパッタナー財団は地方での職業訓練や教育振興に関するさまざまなプロジェクトに対し、資金を無利子で融資している。例えば1990年に始まった東北部サコンナコーン県の**酪農プロジェクト**では、訓練を受けた農民13名が1994年には1,038バーツの月収を得た。なかには月に6,193バーツと



稼働中のチャイパッタナー水車 (バンコク都内のプラ・モンクットクラオ病院)



いう地方では考えられないほど高い収入を得る人も出るなど成功を収め、農民は財団からの借入金をすべて返済することができた。

パッチャブリー県
バックビヤ岬

財団事務総長のスメート・タンティウエーチャクン氏は森林保護問題について「**森を取り戻すためには投資が必要だ**」と述べている。¹ 政府の力だけではこの問題を解決することはできない。西部カーンチャナブリー県においてチャイパッタナー財団は植林に伴って派生する問題を解決すると同時に、政府予算が不足している所では民間の協力により地元住民の生活の改善を行っている。同県のある村では

¹ 1994年3月、スメート・タンティウエーチャクン氏に対するインタビュー。



1991年にある僧侶が開発プロジェクトのリーダーとなり、村民の生活改善活動を行っていた。この活動に財団は関心をもったが、問題はミャンマー国境に接した森林地帯に不法に住み着いた人々がいることであった。政府が森林保護を名目にその土地を管理すれば多くの人が住む場所を失い、政府の目が届かない別の森林地帯へと移るであろう。そこで、住民に適切な生活環境を提供する「**国王考案ホワイオンコット・プロジェクト**」が設立された。対象となった200世帯に適切な面積の土地とニワトリ、ブタなどの家畜や養殖用のエビ、魚、タンパク質を含む豆類などの農作物、それに果樹の種苗が与えられた。実施地の小さな集落には寺院や学校があり、

カンチャナブリー県
ホワイオンコット





住民は基本的な生活必需品をすべて入手できた。貧しい家庭の子どもは無償で教育を受けることができた。また農作物栽培や畜産、小規模工場の経営に関する職業訓練も行われた。このプロジェクトにより村民は定職をもち、安定した生活が送れるようになった。

近年では財団が資金の一部を提供して新たなプロジェクトを設立するようになった。工場の仕事を地方に分配することで、企業が工場や支店を新たに作らなくても生産量を増やすことができるという



ものである。このプロジェクトに加わったある縫製メーカーは、農村女性に工場で作った布地を洋服に仕立てるためのミシンを配布した。これにより、地方の住民が住み慣れた土地を離れることなく、自分の能力に見合った生産活動を行えるようになった。これは地域社会の伝統文化や慣習を継承していくことにもつながる。

プロジェクトに参加した多くの農村の女性たちは口々に語っている。

「お金がたくさんほしければ洋服を1日10枚でも20枚でも仕立てるし、のんびりとやりたければ5、6枚でもいい」

夕方になると、仕立て終わった洋服を回収するトラックが村にやってくる。縫製する布地はバンコクであらかじめ部品として裁断されている。自宅で作業する女性たちにパターンや縫製技術を教える研修はメーカーと財団が行う。そこにあるのは大きな工場ではなく、家のなかの作業場と小さな倉庫だけである。仕立て終わった洋服は丁寧に包装され、次の工程に進めるため近くの工場や会社が指定した場所に送られる。地方の住民が職業をもち、地元で生計を立てられるようになったら、バンコクへ出稼ぎに行く人も少なくなるだろう。



陛下は農業のみで生計を立てるのが困難な地域があることもよく理解されている。そのため、果樹栽培と養鶏を一緒に行うといった**複合農業**を所得向上の方法として推奨されている。これを進めていくうえで重要なのは、民間部門、特に**チャルーンポーカパン・グループ**など大手アグリビジネス企業とのネットワークである。収穫期を迎えた果物や十分に育った鶏を企業が保証価格で買い取り、バンコクなど都市部にあるグループ内の店舗で販売する。こうした方法は農村から都市への労働力の移動が引き起こすさまざまな問題の改善につながる。

これまで述べたように、チャイパッタナー財団の活動はプロジェクトの内部と外部の人間が協力することで成り立っている。内と外の協力は、陛下が決められた方針に沿って行われる募金活動にもあてはまる。その方針とは、財団自体は資金集めの活動を行わず、寄せられた募金だけを受け取るというものである。これは財団が資金集めの団体だと誤解されないようにするためである。財団はタイ国民の他者への思いやりのおかげで今日まで活動を続けている。現在、財団は募金活動を行う団体に認可を与えているが、真の目的はタイ人の気持ちを1つにすることである。財団に途絶えることなく募金が寄せられるのも、国王陛下が国民のために設立した団体であるとだれもが固く信じているからである。



ラーチャブリー県
のカオチャグム開
発プロジェクトを
視察



国王陛下の活動を理解しているのはタイ人だけではない。財団には定期的に外国からも寄付金が寄せられる。多くの例があるが、**スメート事務総長**は米バージニア大学の副学長から1,000ドルの小切手を贈られたことにしばしば言及する。米国に住む人が財団の活動に共感するというのは驚くべきことだ。また、バンコク在住のある米国人女性は財団に毎月5,000バーツを寄付していて、タイを一時離れていても戻った後にその分まで小切手を送ってくる。財団職員は彼らの思いやりの心に感激しているという。

スメート氏は1994年のインタビューで「**昨年、ペッチャブリー県在住のお年寄りからなんと100万バーツの小切手が送られてきたのです**」と語っている。

スメート氏はこれほど多額の寄付をしたのがどんな人物なのか知りたくなり、ペッチャブリー県へと出かけた。しばらく聞いて回ると、その人が町の中心部からそれほど離れていないある寺院に住んでいることがわかった。たどり着くと、敷地内の広場を掃除している質素な身なりの老人の姿が見えた。

「陛下の財団に寄付されたのはあなたですか」

「そうだ。ちゃんと受け取ったかい」



老人は短く答えると、手を休めずに掃除を続けた。

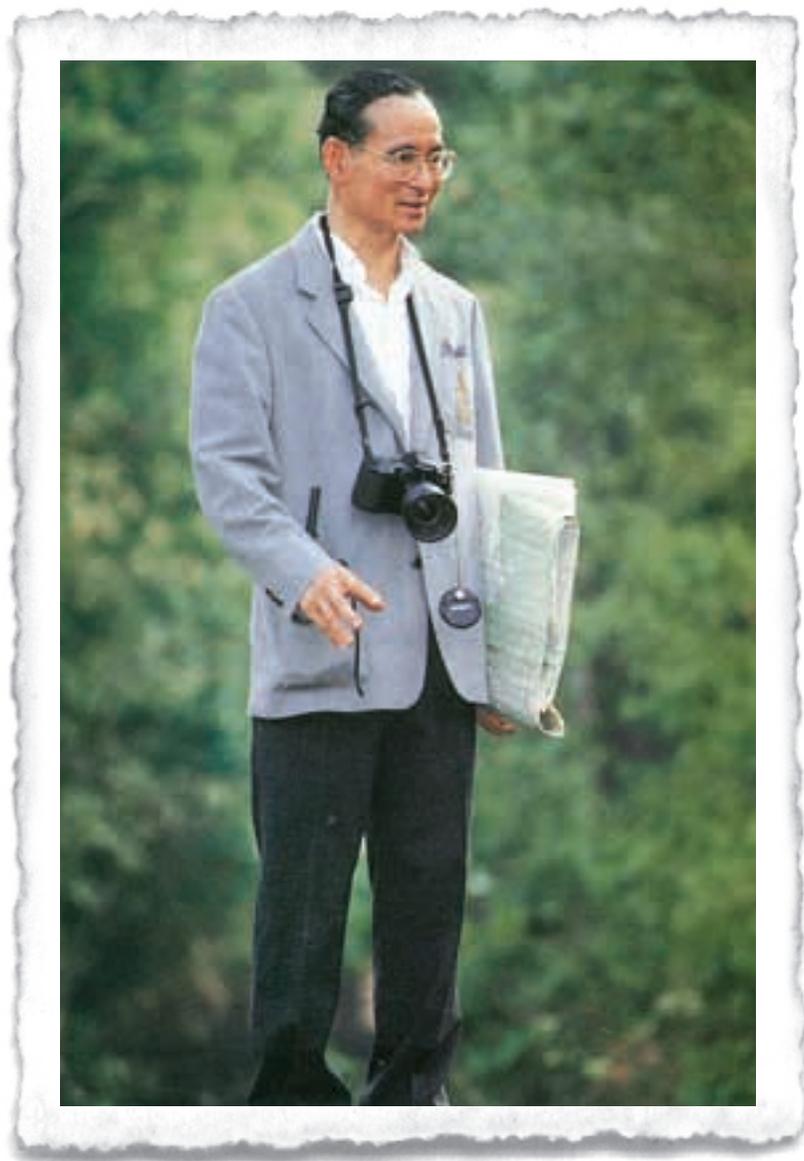
予想外の答えに驚いたスメート氏は、「はい」と返事するのが精一杯だった。

「陛下にお渡ししたか」

「はい」

「それじゃあ、またお金があったら送るよ」

そう言うと、老人は再び掃除を続けたのだった。





第 15 章

国王と環境問題

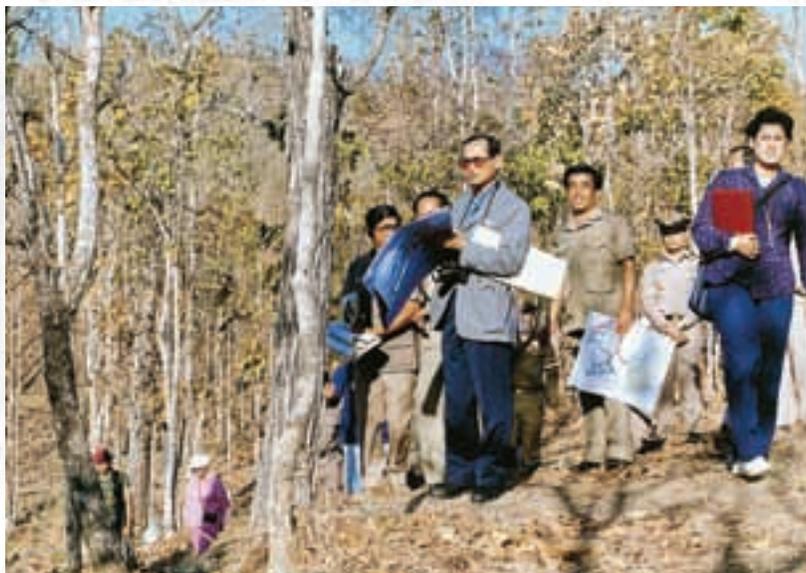


王陛下は環境保護の問題に高い関心を示されてきた。陛下の考えは次のようなものである。

「環境問題は世界中に影響を及ぼしています。これはすべての人間が直面する問題ですが、十分に理解されているとはいえません。世界の一員である我々にとって、環境問題について正しく理解することは問題解決のため果たさなければならない責務です」¹

環境問題について熱心に研究した陛下は、大気中に含まれる酸素、窒素および二酸化炭素の比率に関心を示された。そして酸素を大量に生成する植物にはどんな種類があるか調査するよう研究者に提案し、全国の国王考案プロジェクトで利用することを計画された。また農民に対し、自分たちを取り巻く環境や土壌を保護することを学ばなければならないと述べられた。

¹ 国王考案プロジェクト調整委員会事務局「国王陛下の活動と環境」、『*Cassia fistura Science*』、バンコク、1991年。



「植林に際しては木々が生えるままに任せておくことが大切です。
邪魔をしたり手を加えたりしてはいけません」



植林

タイの森林は1982年から85年にかけて年間150万ライ（1ライ＝約1,600㎡）の規模で消失した。

そのほとんどが東北部、北部、東部、そして中央部の北の地域で起こった。森林破壊の原因の一つ

は、木を伐採し穀物を栽培する焼畑農業である。雨季に入ると栄養を多く含んだ土壌が流出し、川の流れをせき止めてしまう。また、沈殿した泥に圧迫、侵食されるため、ダムの耐用年数を縮めることにもなる。1990年の調査によれば、土壌流出による損失は年間200億バーツにのぼるといふ。このため**土壌と水の保護と適切な管理**が重要な課題となっている。森林破壊は農民だけでなく国家全体にとっても大きな経済的損失であり、生態系のバランスを崩すことにつながる。肥沃な土壌が流出すれば農民は化学肥料に頼らなければならず、環境汚染につながる恐れもある。

森林専門家によれば、自然のバランスを維持するためには森林とそれ以外の部分の面積比を1対1に保たなければならないという。タイの国土全体に占める森林面積は急激に減少しており、危険な状態にある。歴代政府はこれ以上状況が悪化しないよう



「植林は緊急の課題です。水流を守り、森林を湿潤に保つために急いで木を植えなければなりません」

森林を保護する方針を掲げてきたが、現在国土に占める森林面積は30%不足である。国王陛下は森林保護支援のため植林活動を考案され、1962年、チットラダー王宮内で始められた。その後1980年、国王は政府に実行してほしい活動計画を詳細に説明された。

「植林活動は木材生産のため、果実の収穫のため、木炭作りのため、というように用途別に大きく分けることができるでしょう。森林局は利益を得るための植林を考えるでしょうが、水源保護という目的のためには果樹園でも木炭用の森林でも構いません。そこに森があれば、国民に恩恵をもたらす天然資源としての役目を果たしてくれるからです」¹

¹ 国王考案プロジェクト特別委員会『プーミボン・アドゥンヤデート国王陛下と開発活動』、バンコク出版、1987年、103ページ。



サコンナコーン県
バーンノーンプラ
ードゥック地区の
森林を視察される
国王陛下と皇太子
殿下

このお言葉は植林活動に関わる人々の間で大きな反響を呼び、「**4つの利益のための3種類の木**」として広く認識されるようになった。第4番目の利益とは、持続可能な環境のなかで、生活に欠かせない天然資源を破壊せずに暮らしていくことができるという意味である。

陛下の優れた英知を表すものとして、植林に関する柔軟な姿勢が挙げられる。植林には正しい方法とそうでないものがあると考え、農業・協同組合省に対し、農民が既に農作物を栽培している土地で植林を行ってはならないと指示された。



「そうした場所で政府が植林を行えば問題が起きます。別の場所に移った農民が森を破壊して農地を作ることになるからです」¹

陛下の「湿潤森林理論」は、森林を火災から守るために水資源を有効活用するという考え方である

陛下は**森林保護**と**土壌**、**水資源**の密接な関係に着目された。環境問題を個別にではなく全体としてとらえることで、陛下の活動は顕著な成果をあげることができたのである。陛下の考えは「**湿潤森林理論 (Wet Forest Theory)**」と名づけられた。乾季には山火事が頻発し森林が荒廃する。この状況を改善するため、森から流れ出る水を利用して表土を潤し、植物を育てると同時に乾季でも木々が緑の

¹ 前掲書。



森林局の植林プロジェクトを視察される国王陛下とシリントン王女殿下

葉を保てるようにすることを提案された。また陛下は、森林保護に対する関心が低下しないようにと、農業や日常生活に欠かせない河川や運河の水源として森林がいかに重要であることを強調するとともに、水量の減少に対処するための研究を継続的に行うよう指示された。

海岸に生い茂る**マングローブ林**もまた、国王陛下が森林利用と持続可能性の調和に関する研究対象としている貴重な天然資源である。1981年、タイ湾東南部チャントブリー県ターマイ郡にある**クンクラバン湾岸**に**国王考案開発研究センター**が設立された。その背景には、魚の獲り過ぎによる漁獲量の減少に直面した漁民が自然保護区域のマングローブ



林でエビの養殖を始めたため、周辺の農地が海水に侵食されるという問題があった。陛下は研究所に対し、環境と調和した資源開発の方法を探るよう指示された。森林局は1986年から1,025ライの土地を**ブラックタイガーエビ**の養殖に割り当て、109名の住民が活動に参加した。

国王考案クンクラ
ベーン湾開発研究
センター（チャン
タプリー県ターマ
イ郡）

1993年には1,062.5ライの土地がエビ養殖用の池でいっぱいになった。養殖池の約半分は民間が、残りは研究センターが管理している。エビ養殖池と泥地の間にあるマングローブ林はそのまま保護された。森林局はそこに、商業利用を目的としたマングローブや品種の似た植物の育苗場を設置した。現在、クンクラベーン湾岸は土壌侵食問題を克服しただけでなく、多様な海洋生物の生息地となっている。マングローブ林は、エビ養殖池から流れ出る栄養分を発達した根が吸収することにより水質の浄化にも役立っている。



悪をもって悪を征す

国王陛下とともに働く人々は、陛下がもっとも複雑な問題でさえ、極めて簡単な方法を用いて解決されることにしばしば驚かされる。1984年から1987年にかけて発生した汚水問題に対処するため陛下がまず考えられたのは「**良質の水をもって汚れた水を追い出す**」、つまり川や運河から汚れた水を押し流して、水をきれいにするという方法であった。1988年以降は自然の原理を近代技術と合わせた仕組みを用いられた。チャイパッターナー財団が採用する水に浮かんだ装置「**チャイパッターナー水車**」も、低費用で水の酸素濃度を高める方法の一例である。陛下の汚水対策プロジェクトは問題を簡潔に解決する方法の手本である。陛下は汚水浄化設備の建設には多大なコストがかかることを知ると、すぐに何らかの対策を講じなければならぬと考えられた。陛下は灌漑局に対し、バンコク中心部にある



ホテアオイ

マッカサン沼地を首都の「**肺**」にすることを提案された。その方法とは、ミズアオイ科の植物である**ホテアオイ**を使って汚れた水を浄化するというものだった。この考えが始めて公表されたとき、多くの人々が





ホテイアオイを利用したマッカサン沼地浄化プロジェクトを
シリントーン王女殿下とともに視察される国王陛下（1987年6月8日）

驚いた。

1994年、スメート・タンティウエーチャクン氏はこの考案について陛下が「**ゲームを始めよう**」と楽しそうに説明されたと語った。

「陛下、どのようなゲームでしょうか」

「**悪と悪が戦うゲームだ**」

「**そのようなゲームがあるのでしょうか**」

スメート氏は中国の時代劇ドラマを思い浮かべた。



マッカサン沼地浄化プロジェクトの視察

「そうではない」

「我々にとって汚れた水は不要物、つまり
悪者だ。ホテアオイも悪者扱いされている。
これらが互いに戦えばいいのだ」

国王陛下にはホテアオイで**堆肥**を作るという
考えもあった。堆肥は16週から17週間ででき、樹
木や花など食用以外の植物の栽培に利用できる。
5.5tの堆肥を生産するには約30tのホテアオイ
が必要となる。ホテアオイは40日で5倍に育ち、
収穫に適した大きさになる。ホテアオイは圧力を
かけて固めると87℃で燃焼するので固形燃料の原料



国王考案プロジェクトの実施について関係機関の担当者に助言を与える

にもよい。

ホテイアオイには重金属成分を吸収する力がある。これがマッカサン沼地で現在も行われている「戦い」の始まりであった。浄水設備を用いたほどきれいにはならないが、植物の生育や魚の生息には十分な水質を保つことができる。周辺住民はホテイアオイを使って籠やかばんなどの手工芸品を作るための職業訓練を受け、その販売から得られる収入は家計の助けとなっている。



洪水対策

洪水被害にあった地区
を視察（1983年11月
7日）

気候の変化はタイの環境に大きな影響を与える。季節風によって低地や河川、運河の周辺地域が受ける洪水被害は経済を悪化させ開発を滞らせるだけでなく、国民の健康問題も引き起こす。

1980年、国王陛下により「**バンコク東部洪水防止プロジェクト**」が立案された。北部から押し寄せる洪水を首都北郊パトゥムターニー県の運河から東郊、サムットプラーカーン県を迂回させて海へ流すというものであった。慎重な調査にもとづくこのプロジェクトは、延べ173.5キロメートルに及ぶ計19本の運河を掘り、水量を調節するためのポンプ



バンコク都内の運河の
状況を視察（1983年
11月7日）



設備を43ヶ所に設置するという長期的なものであった。

1983年、内閣は灌漑局、タイ政府鉄道局および道路局の共同プロジェクトとして3億7,500万バーツの予算を割り当てた。

この年の8月31日から9月1日にかけて降った雨は574mmと、タイの最高降水量を記録した。バンコク都内のバーンカピ、プラカノン、ホワイクワーン、ミンブリー、トンブリーなどの地区は長期間にわたって浸水被害を受けた。この洪水による損害は66億バーツに達した。

1983年11月7日、2ヶ月にわたって浸水状態にあったプラカノン区とラートプラオ区を視察された国王陛下は、新たに数本の運河を掘り、道路地下の水道管を改善し、下水道管を改修するよう



洪水被害に見舞われたバンコク都内
プラカノン地区
を視察

指示された。また、セーンセーブ運河とバーンカピ運河の合流地点に水の流れを遮断する水門を建設するよう助言され、地区の責任者はすぐに実行に移した。

陛下は洪水被害緩和のための各種プロジェクトや関連した計画に絶えず関心を示されている。特に留意されているのは、多大な経費や資源を投入せずにどうやってこの問題を改善するかという点である。あるとき、技術専門家が雨季の洪水防止のため200万バーツをかけて大規模な水路を建設することを提案した。これに対し陛下は、大きい水路は乾季になると干上がるので、小規模の運河を道路沿いに掘り、間に緑地帯を作れば、少ない予算で同等の効果を得ることができるだろうと説明された。

陛下は情報収集のために冠水した道路や路地をみずから歩き回られることも厭わない。1983年



シリントーン王女とともにバンコク都内の運河の水質汚染状況を視察し、
担当者に助言を与える国王陛下（1985年4月4日）



11月14日、陛下は国王考案洪水対策プロジェクトの進捗状況を視察するため都内バーンナー地区を訪問された。ディンデーン・バーンナー高速道路上に車を止めて工事を視察したり、写真を撮影されたりした。また、バンコク都が建設した12ヶ所の排水路のうちの4ヶ所を調査するため、サッパーウット・バーンナー通りの荒れた路面を歩き続けられた。住民は自分たちの困難な状況を陛下が気づかわれていることに心から感謝した。現場に居合わせたある住民は次のように話した。

「2ヶ月もの間もひどい浸水被害を受けていますが、陛下が私たちが気にかけていると知り、とてもうれしかったです」

同じ月、陛下はバーンクンティアン区とトンブリー区も訪問し、トンブリー・パークトー道路からラーチャモントリー運河沿いに4時間かけて水門を調査された。汲み上げポンプの状況を視察するため冠水した道路を1キロ以上も歩き続ける陛下の姿に、長期にわたり洪水に苦しんでいた住民たちは深い感銘を受けた。陛下は灌漑局の職員に対し、水の流れを改善するため国鉄メークローン線の地下にトンネルを掘り、また溢れた水を排出するための運河を早急に作るよう助言された。被害を受けた住民たちと対話された陛下が王宮に戻られたのは、夜7時であった。



バンコク都洪水防止
管理センター開所式
への臨席（1980年
8月7日）



交通渋滞の緩和

バンコクを悩ませる問題のなかでも特に深刻なのが**交通渋滞**である。過去にバンコクを訪れたことがある人は、朝から晩まで絶え間なく続く渋滞を目にしたことがあるだろう。国王陛下はこの問題に大きな関心を寄せ、渋滞緩和の方法を考案された。国家レベルの事業は政府の責任であり、陛下が意見を表明されることはめったにない。しかし渋滞問題は外国からの観光客や投資の誘致にもマイナスの影響を及ぼしており、損害額は毎年数十億バーツに達している。このため陛下は、1人のタイ国民としての権利を利用し、この問題についての意見を述べられた。

1995年4月17日、陛下は各国の駐タイ大使や領事を前にしたお言葉で「現在、人々は1日のうち



2時間から10時間も渋滞のなかで過ごさなければなりません。私自身はほとんど王宮にいますが、ラジオやテレビ、新聞そして国民から直接寄せられる情報によって問題を理解しており、交通問題を担当する大臣たちは力を合わせて対処する必要があります」と述べられた。

ポロマラーチャ
チョナニー高架道
路プロジェクトの
完成模型を前に担
当者の説明を受け
る

「政治改革がどれほど進んでもこの問題は
解消されないままです。我々は協力して対策を
考えなければなりません」

1995年からバンコク都内の主要な箇所では始まった陸下考案による道路建設は、渋滞の緩和に大きな成果をあげた。**ポロマラーチャチョナニー高架道路**



ピンクラオ地区に建設されるポロマラーチャチョナニー
高架道路プロジェクトについて助言を与える



ポロマラーチャチョナニー高架道路開通式に臨席された国王陛下

はバンコクから西部方面への車の流れをスムーズにし、都心部ラーチャダムヌーン・ノーク通りの運河に架かる橋は交通のボトルネックを改善しラッシュ時の渋滞を緩和することに成功した。



カンチャナブリー県民が人工雨プロジェクトの調査研究のために
寄贈した軽飛行機「エアトラック号」に点検される国王陛下
(1962年4月26日、プラチュアプキーリーカン県ホワヒン郡ポーファーイ空港)



化学水溶液の散布装置を搭載した「セスナ180」を視察される国王陛下
(1969年、ポーファーイ空港)



第 16 章

人工雨



際連合がまとめた報告によると、水が原因の病気で亡くなる5歳以下の子どもは全世界で年間150万人に達するという。農業や工業廃水、ごみ処理場、劣化した地下配水管などが地下水を汚染すれば、井戸の水を飲料水として利用している人々は深刻な危機にさらされる。国王陛下は東北部のコーンケン大学に対し、水質汚染に対処するための技術試験の資金をチャイパッター財団より提供された。安全な水を確保するもっとも簡単な方法は、化学肥料が使われていない土地に貯水池を作ることである。例えばパトゥムターニー県の「**国王考案ラーマ9世貯水池開発プロジェクト**」は、農業用水としてだけでなく、周辺を緑化することで市民が余暇を楽しむための公園としても利用されている。

農民が直面している大きな困難の一つに、水不足の問題がある。1970年代には灌漑や水資源保護に関する多くのプロジェクトが実施された。1974年にはチェンマイ県で2件の国王考案河川流域開発



プロジェクトが、また同じ年にナラートゥワート県でもバーチャ排水運河プロジェクトが開始された。

1974年から76年にかけて実施された「**水源森林保護プロジェクト**」は、

残された資源を守るために森林を適切な方法で管理するというものである。陛下は森林局の協力を得て国王考案プロジェクトとして成功させた。水源保護に対する陛下の絶え間ない尽力により、1977-78年に**貯水池**や**灌漑用運河**が次々と完成し、プロジェクトはさらなる発展を遂げた。

国王陛下が国内各地で起こる干ばつ問題の緩和策として人工雨を降らせることに興味をもったのは1955年のことである。タイでは乾季と雨季の天候が著しく異なるが、これは季節風モンスーンの影響によるものである。南西の季節風が降らせる雨はタイ南部の年間降雨量の60%、北部では実に80%に達する。雨の量は毎年一定ではなく、また国全体にまんべんなく降るわけではないため、極度に乾燥した地域が何ヶ所か発生する。タイでは地表の水量がきわめて重要である。人口の増加にともない水の消費も拡大している。雨に関するもっとも深刻な課題は、ある地点にだけ集中的に多量の雨が降ることにより洪水が発生し、経済的な損失につながる



国王陛下は、大気の状態を変化させ雲を生成し雨を降らせるための技術や方法について助言を与えている



人工雨レーダー観測所（チェンマイ県オムコイ郡）



人工雨レーダー観測車



ということである。

米国と欧州の公式訪問後、1964年、陛下は各政府機関に対し**人工雨**の研究を行うよう指示された。農業・協同組合省の農業技術専門家であった故**M.R.テーパリット・テーワクン氏**と補佐役の**メーター・ラッチャタピティ氏**は、陛下の考案に従い、人工雨のため雨粒の種を散布する技術に関する予備研究を始めた。陛下の考えは「**大気の状態を変化させることは、天候の変化と戦うための有力な武器である**」というものであった。¹

1969年には農業協同組合省次官の指示によりM.R.テーパリット氏が雲を雨に変えるための実験チームを組織し、同年7月18-21日に東北部ナコンラーチャーシーマー県のカオヤイ国立公園にある標高1300mの山の上空で最初の実験を行った。実験には軽飛行機「セスナ180」とドライアイスが用いられた。飛行機が2日間、雲の上を何度も旋回して刺激を与えた結果、雲が灰色に変わったものの雨は降らなかった。同年8月5-31日にはプラチュア



人工雨レーダー観測所
(ナコンラーチャーシーマー県ビマーイ郡)

¹ 1986年7月30日、チットラダー王宮でのお言葉。



人工雨プロジェクトの実施計画について助言する（1979年、ボーファーイ空港）

プキーリーカン県ホワヒン郡に場所を変更し、飛行機2機を使って雲の上部と下部の両方からドライアイスと塩分濃度の高い水粒を散布し、刺激を与えた。この実験は風が通らない山の裏側で10日間にわたって行われた。実験期間中、目標地点で2日間、近隣地域で4日間、遠く離れた地域で2日間、降雨が観測された。2日間はまったく雨が降らなかった。この結果に国王陛下は失望されることはなく、重要なのは海軍の砲兵隊のように目標地点に正確に命中させることであるという点に気づかれた。

「海外のある国では、人工雨が目標地点に降らなければ失敗だったとして契約者がお金を



人工雨プロジェクトに使用される化学物質の混合作業



雲を「挟み撃ち」にして雨を降らせる「スーパーサンドイッチ」
技術に使用される「スーパーキングエア号」



払わないそうです。しかしタイの人工雨は対象地域が広く、成功させるのはより簡単です。例えば軍艦から砲弾を発射するとき、最初の着弾地点は目標から遠かったとしても、調節を加え続ければ最後には命中するでしょう」¹

1970年2月、初期段階の実験結果に関する報告が当時のタノーム・キティカチョーン首相に提出され「人工雨プロジェクト」に対する一時補助金が申請されると、政府はこのプロジェクトに関する諮問委員会を設置した。委員会は1971年3月、人工雨の試みは研究に値するものであり、プーミボンダムとウボンラット・ダムの水源地域において実行すべきであるとの結論をまとめた。これに基づき、農業・協同組合省に「人工雨研究開発プロジェクト」が設置された。

この年、中部ピチット県の農民が「国王陛下の雨」を降らせてくださいと要請したところ、そのとおりに実現した。8月から9月にかけて中部平野の数県の上空の雲に刺激を与え、また農民たちも飛行機に同乗し目標地点の指示に加わった。同年9月と10月には南部で数回、10月、11月には中部ナコーンサワン県でも人工雨が降った。これらの

¹ 1991年7月30日、チットラダー王宮での農業・協同組合省職員、ユースード（タイ）事務所代表者、BUREC代表者、プロジェクト所属専門家に対するお言葉。



一連の活動は、1971年以降に実施された計画の基礎を築いた。

「スーパーサンドイッチ」の飛行方法を示したイラスト図

1975年9月には当時のMRクックリット・プラモート首相の承認により、農業・協同組合省内に「**国王人工雨事務局**」が設置された。雨が降らないため困難に直面している農民を支援するための人工雨の生成や、効率向上のための研究も行っている。その後業務が拡大したため、1992年に内閣は農業航空部との統合を決定し、「**国王人工雨・農業航空事業事務局**」となった。¹

¹ 農業・協同組合省国王人工雨・農業航空事業事務局『私たちの国王陛下と人工雨』、農業・協同組合省、1986年、70ページ。



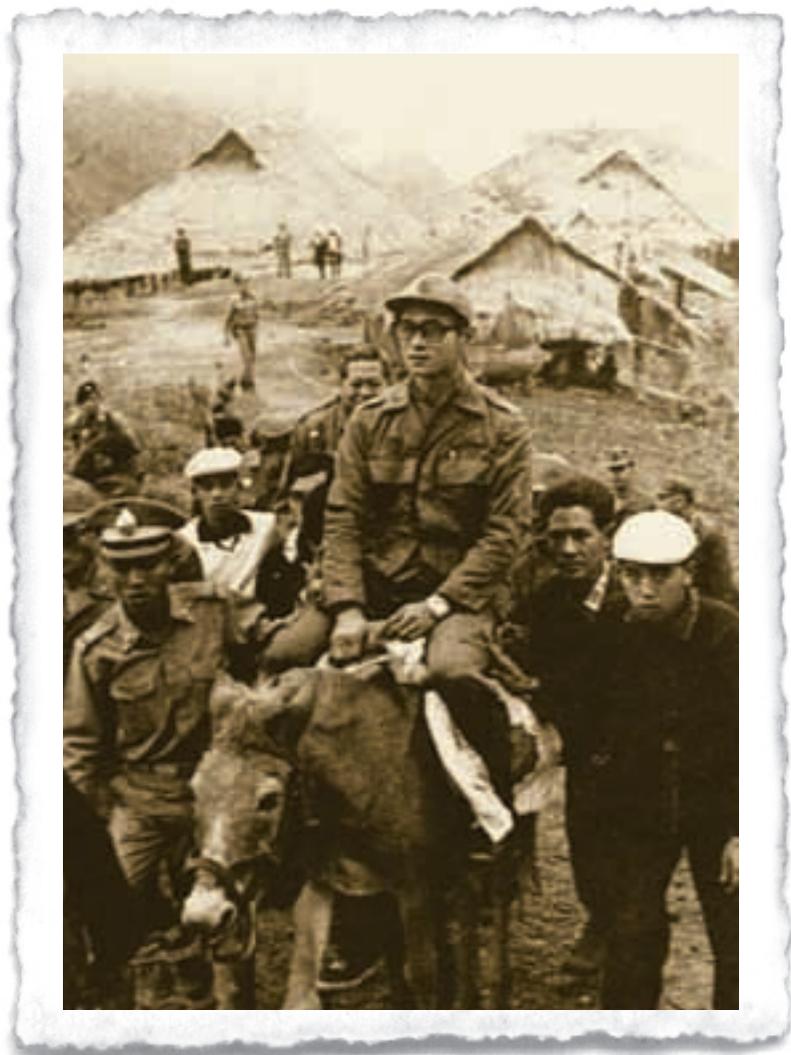
第1段階：化学水溶液を散布し雲を生成する



第2段階：雲を成長させる



第3段階：雲に雨粒の種を散布する





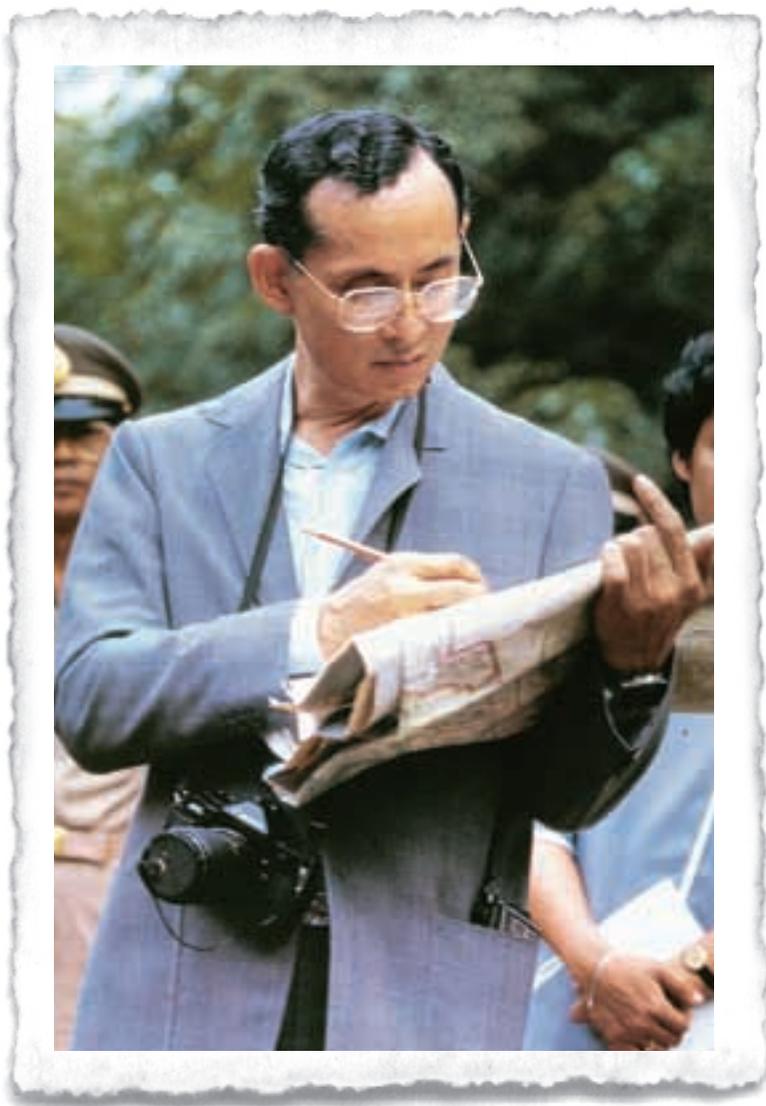
第 17 章

開発プロジェクト

世

界の多くの国々では、国王が国民を気遣うのは当然のこととされている。そうした気遣いは、受ける側にとって格別な榮譽であり、国王であれ大統領であれ、一国の指導者がどこかの地方を訪問すれば、民衆はよそいきの服を着て精いっぱいおめかしする。子どもたちは手に手に旗をかざし、老人たちは特別な賓客の到着を辛抱強く待っている。彼らは国の指導者の訪問を政府機関から前もって知らされているのである。

いよいよ到着の時間である。ぴかぴかに磨かれたメルセデス・ベンツ、あるいはロールスロイスの車列が静かに滑り込んでくる。そこには周辺のみならず遠く離れた村からも集められた民衆が待ち受けている。車が停止すると警備担当者や警察官がさっと囲み、皆が待ちこがれたお方がその場にふさわしい服をスマートに着こなされて姿を現す。と同時にどっと大きな歓声上がる。国のシンボルであるそのお方が民衆の声に丁重に耳を傾け、贈り物の交換などが行われ、15分も経つと側近の者が時計



視察中の陛下の手元には必ず地図がある



に公然と目をやりお帰りになるよう促す。そのお方が別れの言葉を残し車に乗り込むと、車列は走り去っていく。後には尊敬するお方が彼らに示されたやさしい心遣いの温かさが残る。これらは一般に見慣れた光景である。

さて、上の光景がまだ心のなかに残っているあいだ、タイの方に目を向けてみよう。遠く離れた地方の、到達するのが困難な山の上を想像していただきたい。そこへたどり着くには川を渡り、熱帯のジャングルを通り抜け、道路が切れた地点から少なくとも徒歩1時間はかかるだろう。村人のなかにはジープが停止する音を遠くで聞いた者もいるかもしれない。すると、汗まみれの顔に湿気でくもった眼鏡をかけ、どこの店にも売っているようなごく普通のグレーのスボンとジャケットにカジュアルシャツを身につけ、キャノンのカメラを首から下げた人物が早足に歩いてくるのが見える。その人は手書きのメモがいっぱい書き込まれた大きな地図を折りたたんで小脇に抱え、筆記用具をすぐに取り出せるようジャケットのポケットに入れている。後ろには数名の同行者が従っているが、遅れずについて来られるのは健康で体力に自信のある者だけであろう。待っていた村人はにっこり笑い、伝統的な習慣に従い手を合わせ地面に頭をつけて挨拶する。**国王陛下のご到着**である。「**チャオ・ポー・ルワン**(王父さま)」



が子どもたちを訪ねてくださったのだ。

陛下は人々の姿を目にすると微笑まれた。そこへたどり着くまでは大変な道のりであったが、その甲斐があった。陛下は彼らに近づき、声をかけられる。村長や年長者たちが先頭に立って畑まで案内すると、水がなく農作物が枯れている様子が見える。

「雨は降るのですが…」と村人が言う。山の上から流れ出た水が滋養豊かな土壌まで削り取ってしまうため、畑仕事で生計を立てることができなくなってしまったという。

国王陛下は額に汗を浮かべたまま、身体を屈めて土や植物を観察された。用意した地図とメモ帳に

地方の国民と対話される国王、王妃両陛下とシリントーン王女殿下



交互に目をやりながら、その土地に関する調査を行われた。

「なぜ山から流れてくる水をためようとしませんか。その水を果樹にやって育てれば、成長した根が表土を固めて保水できるようになります。こことそこに土手を作れば小さな貯水池になり、必要ときに水を利用できるでしょう」

国王陛下は地域の状況に応じて、適切なアドバイスを与えられた。地方の農民に身の丈にあった生活をするよう勧め、地域内で助け合うことの大切さを説かれた。このように国民の暮らしをいつも気遣われている陛下に対し、タイの国民は言葉で表すことができないほどの尊敬と感謝の気持ちを抱いている。

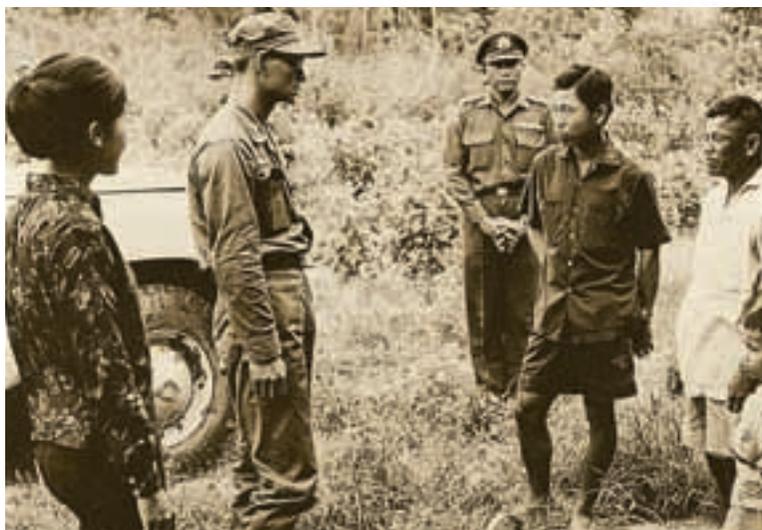
プーミボン国王はタイの歴史上、もっとも頻繁に地方を訪問した国王である。全国津々浦々まで足を運び、国民の抱えている問題について理解された。

ときには思いがけない出来事もあった。1952年、

ホワイモンコン村へ
向かう道でタイヤが
穴に落ちた国王専用
車 (1952年)



**プラチュアプキーリーカン県ホ
ワヒン郡ホワイモンコン村**で国
王専用車が道にぽっかり開いた
穴にはまりこんで立ち往生して
しまい、何人かの村民が車を押
すのを手伝ってくれた。そのと



き陛下は村民から、村から20キロしか離れていないホワヒンの市場まで農産物を運ぶのにまる1日かかるという話を耳にされた。そこで陛下の考案により、ホワイモンコン村とホワヒン中心部をつなぐ道路を国境警察隊と他の政府機関が協力して建設することになった。この**ホワイモンコン道路が、初の国王考案開発プロジェクト**となった。

ロイヤルプロジェクト

チェンマイ、チェンラーイ、メーホーンソーンなど北部地域には、最近になってタイ人として認められるようになった多くの山岳民族が住んでいる。



北部地域にある山岳
民族の村を訪問され
た国王陛下

アカ族、メオ族、ラフ族、リス族、ヤオ族、カレン族などの山岳民族は、まだはっきり画定していなかったタイ、ミャンマー、ラオスの間の国境を行ったり来たりしていた。また、中国やベトナムでの戦争から逃れてきた人々もタイ北部の山岳地域に住むようになった。

山岳民族は外部との接触を好まず、独自の言語や伝統文化を守って生活していたが、彼らを貧困から救うため政府による支援が必要であった。彼らは孤立した環境のなか、よく知られた「**焼いて、耕す**」という農業によって生計を立てていた。彼らの焼畑と平地のタイ人による森林破壊が進むと、山岳民族はアヘンの原料であるケシを換金作物として栽培



するようになった。これは19世紀に大規模なアヘン市場が存在した中国からもたらされたと考えられている。

1959年タイ政府はケシ栽培を禁止する法律を制定したが、山岳民族が生計を立てるための代替作物がなかったため、なかなか守られなかった。1969年に**チェンマイ県のプーピンカラーチャニウエート王宮**に滞在された際、国王陛下は山岳民族の村を訪問し、その暮らしぶりに深い関心を示されたため、彼らは正直にケシ栽培の事実を打ち明けた。陛下がメオ族の村人にケシ以外の収入はあるか



ケシ栽培や焼畑農業の代替として温帯の野菜や
果物を栽培するよう山岳民族に助言する



アーンカーン農業センターを訪問された国王陛下(チェンマイ県ファーン郡)

と質問されると、在来種の小ぶりなモモも同程度の収入になるという答えが返ってきた。これが「**ロイヤルプロジェクト**」の最初のきっかけとなった。このとき同行していたMCピーサデート・ラッチャニー氏は次のように語った。

「陛下は我々に、在来種のモモの木に大きな実のなる品種を接木するよう提案された。そう



すれば山岳民族がケシよりも良い収入を得られるだろうということでした」

陛下は「問題の中心はケシのようですね」¹と述べられた。

陛下は個人資産から20万バーツを出して、**ロイヤルプロジェクト**の前身である「**国王考案山岳民族支援プロジェクト**」を設立するための土地を購入された。また、バンコク・ロータリークラブからの寄付金306,700バーツにより、最初の年には村内に学校、協同組合の売店、そしてコメ銀行が作られた。また、国境警備の警察官が教師として山岳民族の子どもたちに授業を行えるよう、チェンマイ大学で特別研修を受けるための財政支援も行われた。チェンマイ郊外にあるソーンセーン植物園では、カセートサート大学の専門家が在来種のモモの木に

ケシ栽培



¹ 1994年、チェンマイでのM.C.ピーサデート氏へのインタビュー。



ロイヤルプロジェクト財団が毎年開催する特産品フェア（チェンマイ県）



オーストラリア産のモモを接ぎ木する試験を既に開始していた。

現在、山岳地帯には6つの農業試験場がある。カセートサート大学が管理するアーンカーン、パーンダ、メーロート、インタノン、プイの各試験場、そして農業・協同組合省が管理するクンワーンの試験場である。試験栽培を行っている品種には温帯地域の果物や野菜、花、シダ類、コーヒー、茶、シイタケ、イチゴ、グレープフルーツ、グアバ、ハーブ、ジャガイモ、豆類、穀物類、そして成長の早い樹木などがある。

「農産物の販売先である周辺地域やバンコクへは冷蔵車やトラックで運んでいます。ほとんどはタイ国内市場向けですが、一部は加工・輸出されています。チェンマイ大学内の施設ではグアバジュースが作られており、チェンラーイの工場ではロイヤルプロジェクトで加工された冷凍イチゴとベビーコーンが輸出されています。ベビーコーンは今年、ある賞を獲得しました」¹

国王陛下という偉大な存在のおかげで、ロイヤルプロジェクトに宣伝は必要なかった、とMCピーサデート氏は語る。

¹ 1994年、チェンマイでのMCピーサデート氏へのインタビュー。



ロイヤルプロジェクトの目的は、山岳民族がケシ栽培を止め
代替作物の栽培から収入を得られるようにすることである



「毎年チェンマイ県で開かれるプロジェクトの特産品フェアには、陛下にお目にかかれなくてもいいから寄付をしたいという人々が大勢やってきます。また、村々を訪問された陛下に住民が直接に寄付を手渡したこともあります」¹



住民との対話場所には陛下のために椅子が用意されているが、陛下は村人たちと同じように地面に座られる。そのお姿に住民は感銘を受け、陛下のお気持ちを心のなかで大切にしているのである。

村人たちはロイヤルプロジェクトのスタッフが国王陛下のために活動していることをよく理解し、受け入れている。ケシ栽培を無理に禁じようとする政府機関の職員ではなく、国王陛下のもとで働いているからである。MCピーサデート殿下は次のように語っている。

「植えてから3ヶ月程度で収穫できるイチゴは現金収入を得るうえで優れていると考え、メオ族の村人数名に試しに栽培してみるよう勧めました。彼らは我々が国王陛下のプロジェクトのためにやってきた者で、陛下が彼らの収入を増

¹ 1994年、チェンマイでのMCピーサデート氏へのインタビュー。



やすための方法を考えてくださったと知ると、イチゴ栽培を難なく受け入れました。収穫が始まるとすぐに彼らは収入を得るようになりました。我々が農産物を市場に出荷し、彼らは現金を手にするのです。すると今度はイチゴ栽培を希望する人がたくさん出てきました。我々は苗と肥料を提供し、植えてみるよう勧めました。ほとんどは自然の有機肥料を利用しますが、これは土壌の栄養分が若干足りないためです」

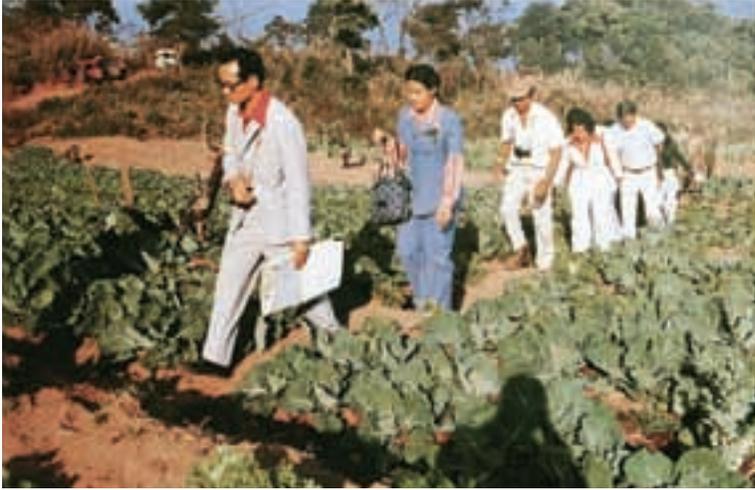


国王陛下とMCピーサデート氏 (写真左)

MCピーサデート氏は、ある村人が3本のモモの木の接ぎ木作業をするのを陛下が1時間かけて見学されたことについても語った。

「周囲から見れば、陛下がたった3本の木を視察するのに1時間も歩かれたというのは大変なことに思われます。しかし陛下のお考えは、みずから歩くことによってこのプロジェクトに深い関心があるという熱意を示し、新しい品種のモモ栽培を促進したい、というものだったのです」

ロイヤルプロジェクトの成果は村民に尋ねてみれば明らかである。



温帯作物の栽培状況を視察される国王陛下とシリントーン王女殿下
(チェンマイ県アーンカーン農業センター)



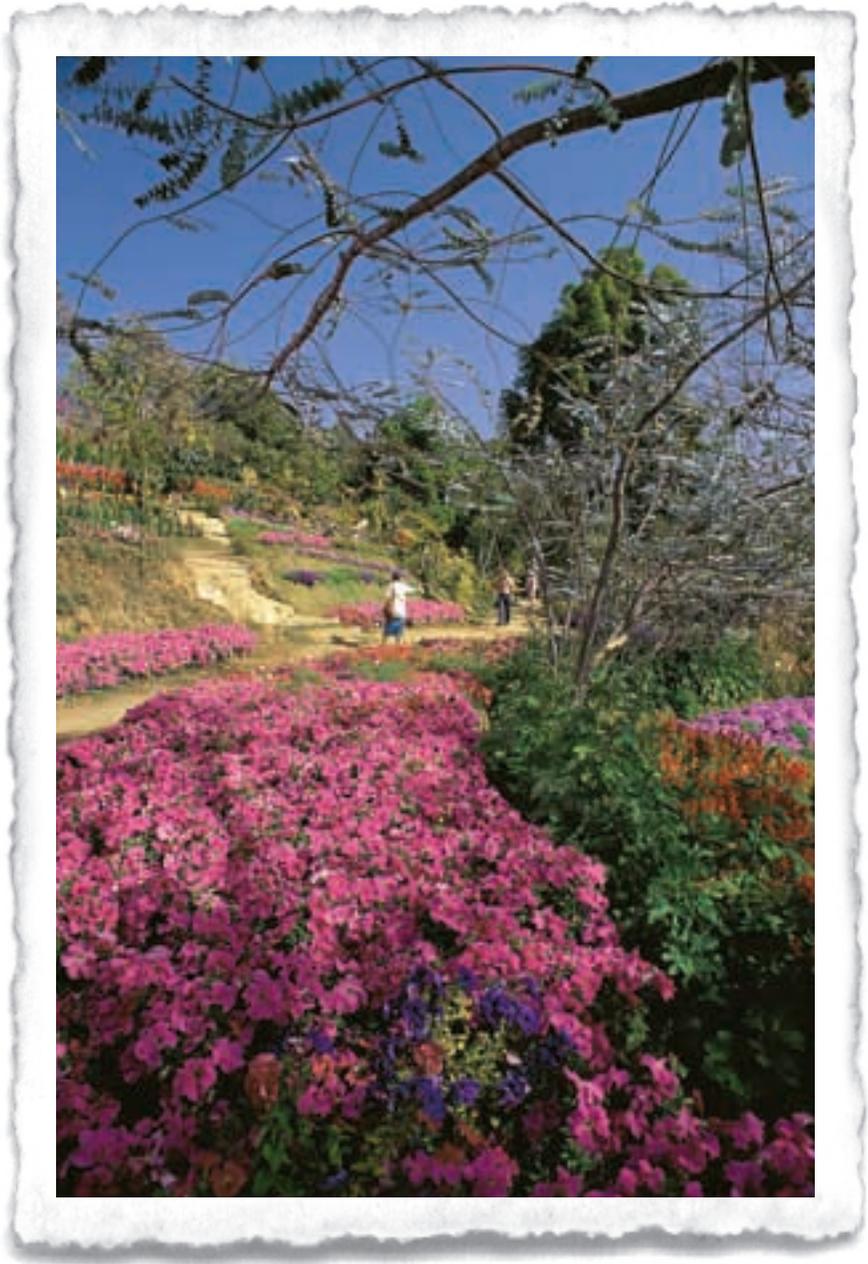
ブドウ研究プロジェクトを視察される国王陛下
(チェンマイ県チョームトーン郡インタノン農業開発センター)



アーンカーン農業センター (チェンマイ県ファーン郡)



クンワーン農業センター (チェンマイ県サムパートーン郡)



インタノン農業開発センター（チェンマイ県チョームトーン郡）



「野菜は1キロあたりだいたい5バーツで売れます。今日は300キロ分を売って約1,000バーツの収入がありました。ロイヤルプロジェクトが始まる前、ここでの暮らしはとても貧しいものでした。1,000バーツの現金なんて見たこともありませんでした。今では3,000バーツを手にするのも可能なのです。このプロジェクトのおかげで肥料や農薬を買うこともできました。教育の面でも先生が来て村民に勉強を教えるようになりました。私も今、自分の成長のため中等教育課程で学んでいます。私は一生ここに住み続けたいです。今では十分に良い生活ができるようになったので、都会に出稼ぎに行くよりここにいる方が満足なのです」

野菜畑の視察

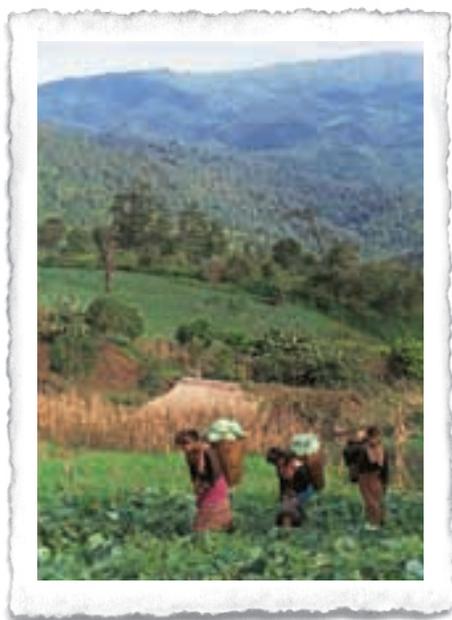


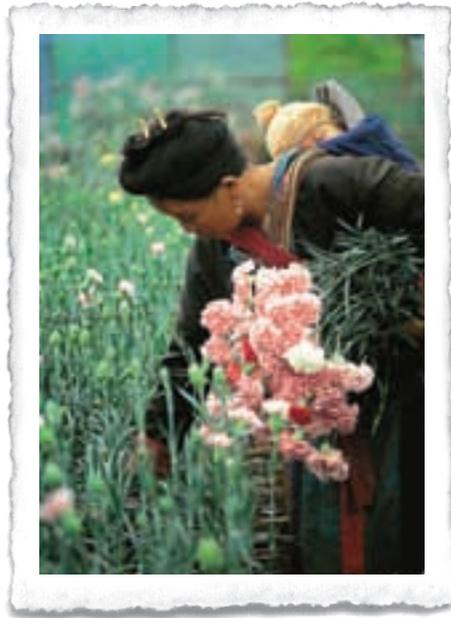
MCピーサデート氏の説明を受けながらアンカーン農業センターを視察される国王陛下

現在、ロイヤルプロジェクトは34拠点で実施されており、チェンマイ、チェンラーイ、メーホーンソーン、ランプーン、パヤオ、ナーン各県の294村、計14,098世帯が参加している。植物の品種開発と種苗の質的向上で成功を収めた後、プロジェクトが直面したのは山岳民族のアヘン中毒の問題であった。長年にわたりアヘンを吸引してきた彼らにとって、それはタバコのようなものであった。そのうえアヘンは病気の治療にも効果があると信じられてきた。

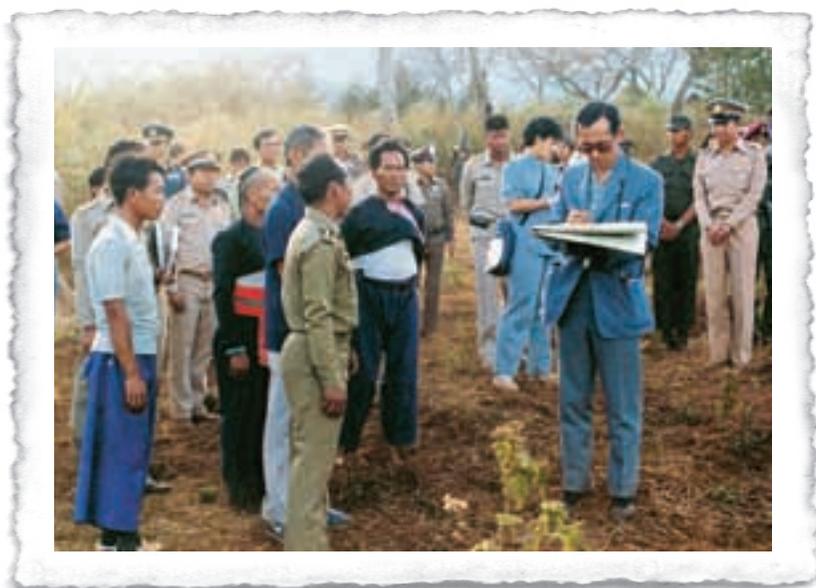
「アヘンは腹痛にも効き目があり、これを吸うのは当たり前のことだ」

ロイヤルプロジェクトで麻薬中毒者の治療を行っ





試験栽培の結果、山岳民族による温帯の果物や花器の栽培が可能であると証明された



シリントーン王女殿下とともにクンワーン農業センターを訪問
(チェンマイ県サムパートーン郡メーリム地区)



バーンダ高原作物農業研究センターを訪問された国王陛下とシリントーン王女殿下
(チェンマイ県サムーン郡)

ているチェンマイ郊外ノーンホーイ郡のある村民は
このように話した。

「私がアヘン中毒になったのはこの1、2年の
間のことだ。中毒になりたくてなったわけでは
ない。病気になったときに医者に診てもらって
も良くなり、苦痛を和らげようと吸ったのが
最初だった」

このような実態を背景に、シリキット王妃陛下の
寄付による「薬銀行」プロジェクトが始められ
た。



ロイヤルプロジェクトでは現在、麻薬中毒者の治療を10拠点で行っている。ノーンホーイが実施地に選ばれたのは、他の地域で既に中毒が蔓延しており、ノーンホーイを汚染から守る方策を生み出すためであった。住民が助け合って患者の世話をしよう、治療は病院ではなく村落内で行われた。警察、国境警備警察、保健所職員、医師、看護師たちが住民とあらゆる面で協力し合うことで、プロジェクトは成功した。もし政府が実施主体であったならば、関係するのは一部の公的機関だけで、中毒者は病院に運ばれ、治療後に村に戻ればまた麻薬を始めしてしまうだろう。このプロジェクトでは村落内に事務所を設置し、住民の自助活動を支援している。

国境警備警察と政府初等教育委員会の協力によ



り、山岳地帯に多くの**学校が設立された**。チェンマイ大学の医師と看護師は、プロジェクトの拠点を訪問し、医療・保健衛生や家族計画についてのアドバイスを行っている。山岳民族は特に「**コメ銀行**」や生産者グループ、協同組合といった自助組織を作るよう奨励されている。コメ銀行は収穫期を待つ間に自家消費用のコメを貸し出し、収穫後に返してもらうという仕組みである。また一連の過程の最終段階として、山岳民族や平地の農民の作った農産物を加工するため、小規模の**缶詰工場**がチェンマイとチェンラーイ県に設立された。これまで目を向けられることの少なかった北部地域で国王陛下が始められたこのプロジェクトは、1988年に**マグサイサイ賞（国際理解部門）**を受賞した。

国王考案開発研究センター

チットラダー王宮内で農業研究を始めた後、陛下は国内各地で起きている問題を研究するための条件が整っていないことを認識されるようになった。地理学的に見るとタイは熱帯のジャングルが各地に広がる一方、北部には温暖な山岳地帯、東北部には砂漠のように乾燥した平原、南部には湿沼の多い地域があるなど多様性に富んでいる。必要なのは、現地で研究や試験ができるセンターを各地域に設置することであった。



プロジェクトの計画を発表する前に国王陛下は必ず国民の意見を参考にする

国王考案開発研究センターは一般に、農村の総合的な開発を推進するためさまざまな政府機関が協力して試験や意見交換を行う場所として認識されている。多くのセンターは、土壌に砂が多く含まれているマングローブ林や山岳地帯、森林破壊の進んだ地域、あるいはこれらが混在している地域など、その地域特有の自然条件をもつ場所に設立された。また各センターの活動が地元住民の役に立つことを示すため、新しい技術は住民が最初に利用することができるようになっている。¹

¹ UNDP, *Sustainable Development of Natural Resources*, 1988, p.31.



国王考案開発研究センターは「生きた博物館」としての役割も果たしている

センターには活動に関する情報を求めたり、研修を受けたり、自分の地域で起きた問題の解決法を教えてもらうため、全国各地からさまざまな団体が訪れている。このため「国王考案開発研究センター」は「国民が研究成果を開発モデルとして日常生活に応用できる」¹ **生きた博物館**としての機能を果たしている。こうした活動は1ヶ所ですべてこと足りる「ワンストップ・サービス (One Stop Service)」といえるであろう。

国王陛下はプロジェクトの周辺にある村の住民

¹ 前掲書。



に、自力で問題を解決するためのグループ作りを勧めている。コミュニティーが力をつけ、他者に依存しない生活を営むことができるようにするためである。国王考案プロジェクトのもとで活動する協同グループはこれまで多くの成功を収めている。

農産物の生育状況を視察する両陛下(国王考案ホワイサーイ開発研究センター)

もう1つの方法は、村落の長か、周囲から信頼と尊敬を集めている人物をリーダーに選び、村民の生活向上に必要な知識を伝授するというものである。リーダーは道徳心があり人情に厚いという点を重視して慎重に選ばれる。タイ社会の伝統的なやり方であり、父親的な存在のリーダーが自分の家族のように村民を守るのである。リーダーの役目は、住民の



健康な生活と地域の発展のため必要なことはすべてやるというものである。その見返りは村民からの尊敬と謝意である。こうしたリーダーたちの協力によって各地域が発展し成長していくのである。

国王陛下が定めた目標に向かっていくには、現実的な方法をとることが何よりも重要である。すぐに成果が出ることを期待するのは良くないと陛下は念

を押されている。地方開発でまずやらなければならないのは、それぞれの村落が十分な食糧を手に入れられるようにすることである。それ以外のことは二の次である。成果をあげるために、陛下は適切なマーケティング、つまり収穫し



国王考案ホワイホー
ンクライ開発研究セ
ンター（チェンマイ
県）

た農産物の販売など農業経営の基礎知識を農民に学ばせるべきだと考えられた。農民は昔から、都会からやって来る商人の格好の餌食になってきたのである。

国王陛下はすべての農業生産活動を総合的に行う必要があることを認識されていた。どんな作物が現地の土壌に適しているか、水の量は十分か、一年を通して収入を得るためにどのような作物を一緒に栽培したらよいかなどについて調査研究を十分に行わずに、栽培する品種を単純に決めることはできないというのである。



国王陛下の考えにもとづき最初に作られた6つの
国王考案開発研究センターは、次のように設立され
た地域の名がつけられている。

「国王考案カオヒンソーン開発研究センター」

1979年8月8日、チャチューンサオ県に設立。

「国王考案クンクラバーン湾開発研究センター」

1981年12月28日、チャンタブリー県に設立。

「国王考案ピクントーン開発研究センター」

1982年1月6日、ナラーティワート県に設立。

「国王考案プーパーン開発研究センター」 1982年

11月25日、サコンナコーン県に設立。



「国王考案ホワイホーンクライ開発研究センター」

1982年12月11日、チェンマイ県に設立。

「国王考案ホワイサーイ開発研究センター」

1983年4月5日、ペッチャブリー県に設立。

各センターで行われている研究は経済的、実地的なもので、持続可能な開発のために全国で利用できる。開発研究センターの目的は、1983年9月11日、国王陛下が述べられた次のお言葉に示されている。

「農民生活のあらゆる面を包括する総合的な開発に関する実験です。人々が何をどのようにすれば良いかを理解するし、新しい技術を利用してより効率的な方法を学ぶことができます。(中略) 一方、それぞれの地方において研究を行うことも重要な目的です。気候条件も

土壌流出防止のため
斜面に植えられたマ
イヤーンの木(ホワイ
ホーンクライ開発研
究センター)





人々の生活様式も地方によって異なるからです。(中略)国民生活に関連する各機関は日常的に意見交換し連絡を取り合っていますが、同時にそれぞれ自分のセンターを有し、他の機関と関わることなく別々に業務を行っています。開発研究センターは、農業、社会、雇用、教育などさまざまな分野を担当する政府職員が力を合わせて活動する場所です。学問的な知識を求め国民が自由に訪れることができ、彼らの支援を担当する者が1ヶ所に集まっているという点で、利益を得る者と、利益を与える者が同じ場所にいるのです」¹

1979年、地域開発推進事務所は国王陛下の考案によりホワイホークライに貯水池を作った。陛下は自分の地図を用いて、その場所が開発途上の郊外地域に近い将来人口が増加し環境に悪影響を与えるだろうと考えられたのである。

国王考案ホワイホークライ 開発研究センター

国王陛下は谷地に雨水をためて貯水池を作ること考案された。「湿潤森林 (Wet Forest)」地帯が山火事を防ぐ役割を果たし、森を作ると同時に保護

¹ 国王考案プロジェクト特別委員会事務局、1996年10月。



することができるからである。都会から離れた地方に住む人々にとって、山火事は現実になりうる悪夢なのである。貯水池を作るもう1つの理由は、政府の水道設備が当時まだ行き届いていなかった下流地域の住民が飲料水として利用するためであった。

地域を3つに区分し、貯水池の上流は水源となる森林に、中央部は畜産、及び農業地域に、そして下流は漁業地域とした。灌漑局は貯水能力7,500－900,000m³の池を6ヶ所に作った。そのうち飲料水用として3ヶ所の貯水池が利用されることになった。

最大貯水量 250,000m³ の貯水池は、森林の水源であると同時にセンター周辺の住民が利用できる



ホワイホーンクライ開発研究センター内の貯水池



ようになった。2ヶ所目は最大貯水量 900,000m³ を有する貯水池で、農業用水として利用されるほか、高地栽培に適した作物の研究や畜産業にも用いられている。3ヶ所目は最大貯水量 5,500,000m³ を有し、ここから農業技術局の試験農場まで5 kmの配水管が敷設されている。他の3ヶ所の貯水池は水資源の保護を目的として適切な間隔をおいて建設された。

地域開発推進事務所によって作られたもう1ヶ所の貯水池は最大 2,000,000m³ の貯水量を誇り、漁業の振興や実験のために利用されている。

ホワイホーンクライでは国王陛下の考案により、**灌漑局、森林局、農業技術局、農業振興局、水産局、畜産局、土地開発局、そしてチェンマイ大学**という8つの政府機関が共同で活動している。陛下には木材用森林での果樹栽培、開放林における牛や水牛の放牧というように、産業の複合化によって農民が年間を通じて農産物とタンパク質栄養源の両方を手に入れるようにしたい、とのお考えがあった。陛下のこうした考案にもとづき、各機関はさまざまな活動を行った。

ホワイホーンクライー帯には急斜面が多いことから、全国の類似した形状の土地でも利用できるよう、地理的条件に適した作物の栽培方法が研究さ



れている。また土壌流出や、傾斜農地への水供給、土壌と水源を守る高地作物の栽培に関する研究も行われている。

チークに接ぎ木されたコショウの木（ホワイホーンクライ開発研究センター）



土壌流出は農民にとって深刻な問題である。陛下の考案にもとづき、土壌を固めるため田畑の間に果樹を植えたり、陸稲の畑の畝を等高線に対して農民が好む垂直方向ではなく並行方向に作る研究や、輪作に関する研究も行われた。果樹のなかでも土壌を強固にするのに特に効果的とされるのはタマリンドの木である。

1987年、国王陛下はこれまでにない新しい方法を提案された。それは、土壌流出を単に食い止めようとするのではなく、流れてしまった土壌に含まれる養分を効率的に利用す



水流を緩やかにするために作られた堰堤（ホワイホーンクライ開発研究センター）



べきだというものである。流れ落ちる水や養分がたまるよう急斜面に植えた果樹の根元に穴を掘る、耕作地に魚の骨状に細い溝を掘り、表土が下まで流れ落ちないようにする（これはメオ族の古からの知恵である）、水流を一定の速さに保つような排水溝を作る、などである。また、果樹の間には異なる種類の作物、特に短期間で収穫できる豆類などを植える。1年の最後の収穫の後には田畑を鋤でおこさず、自然の肥やしとして活かすようにする案もあった。

土手の下方に植えられた作物が上方に植えられた木々から養分を受け取る方法は、自然の森林環境を再現しようという試みである。土地開発局が農民に土壌と水を守る方法を指導する際には、高地作物と果樹の複合栽培を勧めている。果樹栽培が広がれば、地域全体の水の流れも増大すると考えられるからである。

1984年、国王陛下は魚類を保護するための方法について調査するようにとの考えを示された。ハワイホーンクライ開発研究センターには3つの**漁業プロジェクト**がある。

第1のプロジェクトは貯水池でのプラー・ニン、プラー・ドゥック（ナマズ）、プラー・タピアン（シヤムゴイ）の養殖、第2のプロジェクトは貯水池の



下流に設置したセメント水槽でのプラー・タプティム（レッドティラピア）、コイ、プラーブック（メコンオオナマズ）の養殖である。第1のプロジェクトは魚を入れる生簀の維持管理や乾季の水位低下に関する問題があるものの、試験研究による将来的な発展が期待されている。

第3のプロジェクトは国王陛下の考案にもとづいて試験が始められた。貯水池で魚を月に何日獲ってよいか、どのような方法で獲るか、魚網の規格をどうするかなどを地元の農民グループが自分たちで決め、管理するというものである。貯水池での漁業権を得た農民グループは1988年に9,000パーツの収入を得ることができ、これを元手に養殖する魚の品種を増やすことに成功した。この方法はチェンマイ県を中心に全国の貯水池でも導入された。

農業技術局は高地でのコメ、大豆、落花生、アスパラガスの栽培試験を異なる高度で行った結果、大きな成果を得た。これらの作物の販売によって種の仕入れコストを上回る収入が農民の手に入る見通しが得られたのである。チェンマイ大学は低所得農家に対し、元手のかからない作物を栽培するよう推奨した。土壌が肥沃でない場所の栽培に適した、ライム、ナツメ、ベルガモット、ホッグプラム、サモア、スターフルーツなどの作物についても研究



が行われた。

国王陛下の他の考案についても農民が利用できるかどうか実験が行われた。畜産局が**ホルスタイン**種の乳牛104頭を農民に試験飼育してもらったところ、乳牛にもっとも適した餌が貯水池の土手の水分を多く含んだ砂状土に生える**ルーシー**という草であることがわかった。プロジェクト地近くにあるサンカンペーン村では乳牛の本格的な飼育が始まり、成功を収めた。

北部地方には「**国王考案メーピン川流域総合開発プロジェクト**」がある。ホワイホークライ開発研究センターの支所で、主として商業利用のための水資源開発に関する活動を行っている。地元住民の運営管理への参加を促し、コミュニティーが協力して行う活動について学んでもらうというものである。このプロジェクトでは1986年までに貯水池を8ヶ所作った。上流の貯水池は下流の貯水池に水を供給する目的で作られたため、商業用としてはほとんど利用されていない。雨で流される土壌の養分を捕捉する堤防も作られた。農業技術局は農民の現金収入を増やすため、麦や大豆、ニンニク、ネギ、グレープフルーツ、アスパラガスなどの作物を貯水池周辺で栽培することを推奨した。

現在、プロジェクト地の農民はタイの基本的な水



準に比べても十分に自立した生活を営むことができる収入を得られるようになった。彼らは全国規模の地方開発事業の一員であることに誇りを持ち、プロジェクトのきっかけを与えてくれた国王陛下に感謝している。

国王考案プーパーン開発研究センター

同様の方法で問題解決を図っている事例に、サコンナコーン県にある国王考案プーパーン開発研究センターがある。このセンターの敷地面積は2,300ライであるが、水源として重要な隣接の森林区域11,000ライでも保護活動を行っている。灌漑制度の導入によりアグロインダストリー向けの商品作物栽培を可能にしたり、土壌流出防止に効果のあるベチベルソウを、傾斜地で栽培している果樹の間に植えたりしている。



養蚕用に植えられたクワ畑（サコンナコーン県の国王考案プーパーン開発研究センター）



タイ東北部に立地するプーパーン開発研究センターが直面しているのは開発と森林保護に関する問題だけではない。土地開発よりも重要なのは、どのようにして地域住民の生活水準を向上させ、より良い暮らしができるようにするかという課題である。このセンターの研究が実際に成果を出すためには、新たな農業技術や品種開発とともに地域コミュニティの協力が不可欠である。農民が稲作以外にも収入を得られるよう、複合農業の試験研究が行われている。例えば交配種のベビーコーンとキャッサバを同時に栽培し、畑の空いたスペースで養蚕を行うことが奨励されている。現在では、農民が家内工業や畜産から得られる収入は稲作による収入を上回るほどである。

プーパーン開発研究センター内の水田



国王考案カオヒンソーン 開発研究センター

国王考案開発研究センターは、それぞれ異なる問題を抱えている地域ごとに設置されるのが一般的である。チャチューンサオ県カオヒンソーンにセンターが作られたのは、この地域の土壌の質が他地域に比べて劣っており、国内の農産物市場で安値で販売されるキャッサバ程度しか栽培できなかったためである。プロジェクトの主たる目的は、自然のバランスを保ちながら、農民に収入増加をもたらす多様な作物を栽培できるよう土壌の改良をすることであった。また他のセンターと同様、**農業技術・手工芸技能研修所**としての役割も果たしている。関係機関が協力してさまざまな研究を行うほか、化学物質の代わりに自然の成分を使った害虫駆除や病害に強い作物を栽培する試験も行っている。





カオヒンソーン開発研究センター内の野菜畑



カオヒンソーンに開発研究センター内に植えられたマンゴーの木



国王考案ホワイサーイ開発研究センター

ホワイサーイ開発研究センターのあるペッチャブリー県チャムでは、砂を多く含んだ土壌でも1年を通じて農業ができるよう、配水システムの整備が必要であった。このため貯水池が4ヶ所に作られ、地域の森林保護にも利用されている。現在、耕地の3分の1でカッシューナッツが等高線と並行に植えられ、これまで起きていた土壌流出や土砂崩れ被害の85%が防げるようになった。

国王陛下によるもうひとつの新しい提案に「自然森林公園」計画がある。これもホワイサーイ開発研究センターで実施されている。森林を文字通り「自然の状態に戻す」ため、禁猟区域に指定している。ここではアンナンホシジカなどの動物を繁殖して近くの森に放つ活動を行っているが、これらの野生動物は近隣住民の生活にとけ込み共生している。



ベチベルソウの試験栽培（ホワイサーイ開発研究センター）



ベチベルソウを植える国王陛下
(ホワイサーイ開発研究センター)



ベチベルソウを用いた土壌改良
実験を視察 (ホワイサーイ開発
研究センター)



この森林公園の「来訪客」に子どもの象がいた。親象が密猟ハンターに殺され、国境警備警察がミャンマー国境で保護したのだ。また、このセンターの興味深い活動のひとつにベチベルソウの研究がある。他のセンターでも行われているものだが、強靱なこの草は農業ができなくなった砂質状の土壌を押しつぶして硬化させるという特性があり、土壌流出防止に高い効果を発揮するのである。

国王考案ピクントーン開発研究センター

ホワイサーイの土壌が乾燥して砂状であったのは対照的に、南部の土壌は水分が多く、またかつて海底にあった粘土質の土には酸素に触れると強い酸性に変わる硫化金属鉱物が含まれている。南部ナラーティワート県にはこうした土壌が多く、農業に適さない土地が262,826ライもあった。そこで、この「**酸性土壌問題**」を解決するため国王陛下考案のもと「ピクントーン開発研究センター」が設立された。

センターではこの問題に対する直接、間接双方の解決方法を研究してきた。直接的な解決方法とは土壌の酸性度を下げるために石灰を混ぜることであり、確実に成果が出る方法である。しかし県内の対象地域をすべてカバーするには大量の石灰を投入



しなければならず、また土壌の酸性成分を水で洗い流すためには灌漑制度を整備しなければならない。このためすべての農民をこの問題から救うことはできない。

ピクントーン開発研究センターの灌漑システムを視察

その後、粘土質の土に適したさまざまな植物を試験栽培した結果、ゴムの木は他の果樹と一緒に植えることで生育が良くなることがわかった。試験栽培した植物に水を与えるため灌漑用の運河を掘り、酸性度を下げるため石灰を入れて魚の養殖試験を行ったところ良い結果が得られた。しかし農業地域全体の酸性度の低減を実現するには至らなかった。

もう1つの新しい試みとして、**畜産業の振興**が



ピクントーン開発研究センターの視察

ある。特にヤギ、羊、牛、そして水牛といった粘土質の土壤に強い動物の飼育が推奨された。地域ごとの状況を把握しどんな動物が適しているかを探るといふ運営手法により、この事業は成功を収めた。

一連の努力の結果、コメの生産高は4倍に増加し、農家1世帯あたりの年間収入は1982年の8,918バーツから1991年には59,663バーツへと増加した。また、従来45%であった0-5歳児に占める栄養失調の比率は1995年に19.14%へと改善した。こうした変化の主な背景には、ピクントーン開発研究センターとその周辺地域の土壤開発や、それに伴って行われたさまざまな経済社会開発活動がある。また**アグロインダストリー向け生産の推進**、



土壌改良後の水田でイネの生育状況を視察（ピクントーン開発研究センター）





コミュニティー活動の組織化、商品作物の栽培などにより、住民の生活水準が向上した。各地域の児童開発センターは、子どもの栄養状態の改善にも重要な役割を果たしている。

国王考案クンクラベーン湾 開発研究センター

チャンタブリー県にあるクンクラベーン湾開発研究センターは、主として沿岸地域の環境保護と開発に関する活動を行っている。ブラックタイガーなどのエビ類やカキ、赤貝、ムール貝などの貝類、魚類の養殖を含め、海洋資源の保護と管理に関する諸問題を解決するための研究が行われている。

このセンターでは漁業協同組合を設立し、各村落の生産活動とマングローブ林再生のため長期的な支援を行っている。農業支援としてはカッシュー



クンクラベーン湾
開発研究センター
の水産物養殖プロ
ジェクト



土壌・水源保護のためのベチベルソウ栽培プロジェクトを視察される両陛下と
シリントーン王女殿下（チェンマイ県第6区土壌開発事務所）



ナッツ、落花生、ゴム、野菜、ハーブなどを栽培するための安全な害虫除去方法、作物に適した肥料の利用などについて普及活動を行っている。生産活動を持続的に行えるよう、環境に影響を及ぼさない副業の研修も行っている。また、マングローブ林が破壊された1,040ライの地域では104世帯の農民が**エビ養殖**を行い、一定の成果を得られた。エビ養殖農家1世帯あたりの年間収入は平均150,000バーツであったが、これは1994年の収入の3倍である。

「新しい理論」

タイが経済成長を続けた1980年から95年にかけての15年間、政府は高い成長率を維持するため輸出指向型農業を奨励した。効率を追求する農業は結果的に農地を疲弊させ、土壌の栄養分が乏しくなってしまう。これを問題視したのは政府だけではない。国王陛下も困難に直面した地方の国民のことを心配し、社会経済問題や環境問題の改善のため自然資源を有効に活用するよう提唱された。

政府や民間企業が繁栄を享受し、後に「**バブル経済**」と呼ばれるようになったこの時期、タイをシンガポールや韓国など「**アジアの虎**」と称される経済的に成功した国々に仲間入りさせようという努力がなされた。しかし、それがこの国を誤った方向に



新しい理論に基づく農業試験を視察される両陛下とシリントーン王女殿下（1996年7月6日、ホワイサイ開発研究センター）

進ませるのではないかと危惧する人々がいた。国王陛下もその1人であった。

1994年のタイの農民の年間平均収入888ドル¹に対し、米国の農民のそれは20,817ドル²であった。タイの農民の暮らし向きが良くならないことが判明すると、陛下は次のように述べられた。

「このような会議でいつも話していることですが、『虎』になることは重要ではありません。重要なのは、我々が自立した経済を有しているかということです。自立とは、自分が生活していくうえで他人に依存せずにやっていけるということです」³

¹ タイ国農業統計、1994年。

² 商業局、経済分析事務局、1993年。

³ 1997年12月4日、チットラダー王宮での国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



かつて「**緑の革命**」ともてはやされた従来型の農業は、生態系を破壊する原因となり有効性も短期的なものであることが明らかになった。また西洋諸国で利用可能な資源やインフラを前提に開発された手法であるため、農業部門を支える国家レベルのインフラの乏しいタイでは農村の経済社会を疲弊させることになった。農民が高級米など単一品種の栽培に特化したため、問題は一層深刻化した。不作のときや肥料が値上がりしたときには、自分たちの食料や日用必需品すら買えなくなったためである。

「**コメを栽培するなら自分が食べる分も十分に植えなさいと勧めたことがあります。それぞれの家で貯蔵しておき、余ったら売ればいいのかから**」¹

国王陛下がこのように考えられたのは、1997年の経済危機によりタイがアジア経済の先頭ランナーになるという夢が打ち砕かれた頃だった。

陛下は当時広く浸透していた「輸出指向型農業」という考え方に疑問をもち、農民のニーズに対応した実際的な問題解決法を調査するよう提案された。陛下は自家消費用のコメ作りを例に、問題へのアプローチ方法を率直に示された。

¹ 前頁注3に同じ。



陛下は「水は命である」という考えのもと、水源開発の重要性を強調されている

「専門家たちは高値で売るためにジャスミンライス（香り米）を栽培すべきだといいます。確かに高く売れますが、農民は自分で食べる分を買わなければならないことになります。それではだれから買うのでしょうか。皆がジャスミンライスを栽培しています。東北部ではモチ米を食べますが、モチ米を植える人は愚か者だといわれるなら、いったいだれが植えるのでしょうか。これは重要なことです。そこで私は、自分が食べるものを植えなさいと勧めたのです。モチ米を食べるのが好きならモチ米を植え、自分の好きな品種のコメを植え、1年中食べていけるようにしなさい、と。もし余裕が出て田に



空いたスペースがあれば、販売用のジャスミン ライスを植えればいいのです」¹

陛下は米価の不安定な動きがもたらすリスクについて指摘したほか、**水**という社会を支え、農業を育む大切な資源を正しく管理しなければ深刻な結果をもたらすと強調された。

持続可能な開発が水によって守られているという事実は、中米、地中海地域、メソポタミア、南西アメリカなどの古代文明の歴史にも認めることができる。移動農業とバランスを欠いた森林の利用によって天然資源が減少し、文明の衰退に大きな影響を与えたと考えられている。陛下は1993年のお言葉の中で、「**水なくして繁栄なし、ということなのです**」² とはっきり述べられた。

水があるかないか、その量が多いか少ないかは自然が決めることである。その影響をいかにして管理するかが問題解決のカギとなる。陛下は自然の力によって農民の生活が大きく左右されることを十分に認識されていた。

「タイには水は十分にあるのですが、多すぎて 洪水になり農産物に壊滅的な打撃を与えること

¹ 374ページ注3に同じ。

² 1993年12月4日、チットラダー王宮での国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



もあります。ところが多額の資金を費やして洪水対策を終えたと思ったら今度は干ばつに襲われ、作物が育たず農民は困窮を強いられるのです」¹

水不足の問題は、収穫した作物を現金化しなければ生き延びることができない農民の生活に大きな打撃を与える。過去30年間に広大な森林が切り開かれて農地と化し、貴重な水源が破壊された。1975－1989年の間に森林面積は1億8,750万ライから8,500万ライ²へと減少した。タイにおける灌漑制度の普及は日本など先進諸国に比べ遅れている。タイでは農地全体のわずか22%しか灌漑制度が整っていないのに対して、日本での普及率は62%に達している。³ タイの農民が生き延びるためには、従来の単一品種栽培という道を捨て、別の方法を探さなければならないことが明らかである。

陛下は長年、持続可能な農業を実現する方法を求めて調査と研究を重ねてこられた。1992年には一定量の水供給を前提に持続可能な複合農業を行うための手がかりがつかめた。陛下はタイ東北部カオウォン村で行われた実証研究結果を引用して次のように述べられた。

¹ 1995年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

² 農業経済事務局、1992年。

³ FAO Report, 1993.



「新しい理論」にもと
づく農業試験の視察
(1996年7月6日、ホ
ワイサーイ開発研究
センター)

「問題解決のカギは流れてくる雨水をためることです。実験では10ライの敷地のうち3ライはため池にして底にビニールシートを敷きます。6ライは田として使い、残りは路地や倉庫などに利用します。要するに水に30%、稲作に60%です」

カオヒンソーンなどの国王考案開発研究センターやモンコンチャイパッター寺院で実施された「新



しい理論 (New Theory)」プロジェクトは、国王陛下が農民を自立に導く制度的な方法の研究に尽力されていることを表している。農民が自分の力で生活できるようになれば、農作物価格の変動や単一品種依存に伴う外的な影響によって左右されることも少なくなる。

複合農業はもっとも高い成果をあげた陛下の研究の1つである。有機農法や土壌を肥沃にするための生ごみを利用した堆肥作りなど、さまざまな研究が行われきた。考案プロジェクトでは有機肥料を使った農業を勧めるばかりではない。農民が自立できる方法をもっとも重視するのである。農民がまず必要とするのは肥沃な土壌である。良い土壌は良質な作物を育て、人間に健康という恩恵を与えてくれる。しかし、残念なことに有機肥料を使う人は少数に留まっている。1993年時点で無農薬野菜の作付面積はわずか5,000ライ、タイ全国の野菜畑の約0.0031%にすぎない。¹

陛下は長年にわたり、農民のニーズやさまざまな環境条件を組み合わせ、持続可能な開発のモデルを提供してこられた。政府機関の協力により1980年にはタイ中部の農民の51%が約300万ライの農地で複合農業を実践するようになった。陛下は自身の

¹ 農業協同組合振興局、1993年。



考えを試験研究を経て実践することにより、適切な土地管理と水源利用に関するガイドラインを提供する体系的な理論を生み出された。この理論は「**新しい理論**」として広く知られるようになった。

1993年の統計によると、持続可能な農業を何らかの形で実践している農民はわずか0.4%にすぎなかった。「新しい理論」の主な目的は、農民が自力で生計を立て、充足した暮らしができるようになるということである。「新しい理論」から得られる利益とは「**足るを知ること (Self sufficiency)**」である。

「私は農民たちが農業で十分に生計を立てられるように『新しい理論』を考えました。適量の水がある年には予定通りコメを作り、水の少ない乾季が来たら各自が池にためておいた水を利用して、他の作物の栽培や、その年2度目の稲作もできるようになるでしょう。大規模な灌漑制度に過度に依存しなくても済むのです。さらには野菜の栽培や魚の養殖も可能になるでしょう」¹

国王陛下による「新しい理論」の推奨が成功を収めたのを受け、各政府機関は単一品種栽培より多様

¹ 1995年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

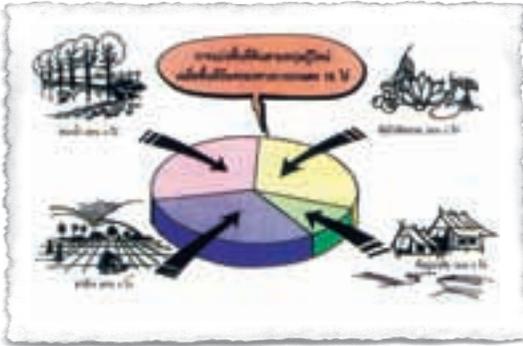


な農産物を生産した方がリスクも少なく収入が増える可能性があることを農民に示し、複合農業の実践を勧めるようになった。

「新しい理論」の核心は水不足への対処法である。ため池を作るのが標準的な方法であるが、将来どの程度水が不足するかを予測することは難しい。このため可能な限り多くの水をためておかなければならず、またそれぞれの池に十分な水を供給できる水源がなければならない。陛下は水の使用量を抑えるため、水を多く使う稲作は通常の時期のみに限り、乾季には水をあまり必要としないマメ類など他の作物を栽培するよう助言された。水源の適切な規模はそこから恩恵を受ける土地の広さによって異なるが、近年に至るまでこのテーマに関する研究はそれほ

モンコンチャイパッタナー寺院プロジェクトでもっとも重視されているのは、1年を通して水が利用できる状態に保つことである





「新しい理論」にもと
づく土地の利用法

ど多く行われていない。

水不足問題には他のさまざまな要因も関係している。土地面積に見合った池の大きさを測定し、水源が雨水しかない場合は干上がらないよう池を深く掘るなど、地域の地理的、気候的条件も考慮しなければならない。灌漑制度が普及している地域なら、池の大きさはより柔軟に決めることができる。実際に池が完成したら、年間を通じて農業をするのに十分な水をためることができるものでなければならない。

一例をあげると、中部サラブリー県の「**モンコンチャイパッター寺院プロジェクト**」では、**パーサクチョンラシットダム**から配水管を設置し優れたシステムを作り上げている。大きなダムからホイヒンカオ貯水池など小規模の貯水池に水を送り、プロジェクト参加農民の池に配水するためにためておく。この方法により、地域の平均に比べ3倍の水量を確保することができるようになった。

国王陛下は「新しい理論」を定式化するために次のような計算を考案された。農家1世帯あたりが所有する土地の平均面積15ライのうち、5ライはコメ



作りに、5ライは果樹や野菜の栽培に、3ライは19,000m³程度の貯水が可能な深さ4メートルの池に分ける。そして残りの1.5-2ライは住居や家畜の飼育、堆肥作り、わら山、自家消費用の野菜畑、日陰を作る樹木、花畑、路地、土手、小川などに利用する。**土地の広さにかかわらず、上記4種の利用面積の比率は30：30：30：10とする。**

モンコンチャイパッタ
ナー寺院での土壌開発
(サラブリー県)

陸下は農地1ライに対し1,000m³の水があれば、1年を通じて十分に利用できると試算された。

農業の持続可能性を高めるためには、複合的な効果を生む運営方法が必要となる。例えば化学物質を使わない害虫駆除、水と土壌の管理、家畜飼育と作物栽培を組み合わせた複合農業、土壌の質を改善するための輪作などである。



1972年、オーストラリアの農業研究家**ビル・モリソン**が「**持続可能な農業**」の枠組みとなる複合農業の概念を生み出した。これはすなわち、農家の所有地を家畜の飼育、作物の栽培、住居に適切に区分するという考えである。

「**新しい理論**」には3つの段階がある。まず土地を30：30：30：10の割合で4区分する。初めの30%はこの理論のもっとも重要な部分であるため池にあてる。ため池の利用は各地域の状況に合ったものでなければならない。雨季には雨水をためると同時に農業用の水源として利用される。池を作る目的は、年間を通じて十分な量の水を利用できるように保証することである。また政府による灌漑制度の整備や天候に頼らなくても、貯水池があれば季節に関係なく作物が栽培できる。雨量が十分であれば、「**新しい理論**」は農民に平均的な水準よりも高い



「新しい理論」により作られた貯水池（モンコンチャイパッター寺院）



収入をもたらしてくれる。

しかし「新しい理論」はすべての病気を治す魔法の薬ではない。陛下は次のように述べられた。

「東北部カーラシン県カオウォン村での成功例が示すように、『新しい理論』はそれに適した場所で行わなければなりません」

ため池作りのもう1つの利点は、掘った土を滋味の乏しい農地に撒くことで作物の成育がよくなることである。またモンスーンの間には洪水を防ぐため、池や農地の周囲に土を積み上げて土手を作るのにも利用できる。いずれにせよ、農民は辛抱強く取り組む必要がある。



「新しい理論」により開発された農地



「ある地域では、雨が降っても池の底から漏れて水がたまらないこともあります。また、水をまったく手に入れることができない地域もあるのです」

この理論の主要な柱の1つに、多品種作物の栽培がある。また漁業や畜産も同時に行い、1年を通じて収入を得られるようにしなければならない。優れた複合農業では作物栽培と家畜の飼育が上手に組み合わせられている。これは世界市場向け単一品種栽培が始まる前のタイで数百年にわたり行われてきたものであり、さまざまな利点がある。平らな土地で作物を栽培する一方、斜面に家畜用の牧草を植えれば土壌流出を防ぐ効果がある。また作物と牧草を循環的に栽培することによっても土壌改良と流出防止につながる。家畜のふんが肥料として役立つことも広く知られている。収穫が減る乾季には家畜から得られる収入によって生活を安定させることができる。

「新しい理論」の重要な部分を占める樹木について、農民は畑の作物への日差しを遮る邪魔な存在として扱いがちである。土地面積が限られていると、耕地を少しでも増やそうと木を切ってしまうことすらある。どの場所にどんな木を植えるかも重要である。例えば池の周りでは水分を大量に吸収するユー



カ리를避け、土壤を固めるのに役立つ果樹を選ぶことなどが挙げられる。陛下は作物の収穫後にそのまま蒔くことのできるマハマメ、アフリカクサネム、アンバリアサなどを適した樹木として勧められた。大きな木は土壤に潤いを与え、涼しい木陰を生み出す。また、建築材や炭として役立つ竹、ココナツ、パームヤシ、ユーカリなどの樹木も紹介された。

野菜や花を合わせて栽培するにはいくつか理由がある。サツマイモやタロイモ、長インゲン、ナスは自家消費、販売用として価値があるし、漢方薬や香辛料として用いるジャスミン、ビンロウ、コショウ、ホーリーバジル、ミント、レモングラスなども副収入をもたらしてくれる。

農民が「新しい理論」によって成功を収めるためには、政府機関の職員に相談した方がよい。土壤によっては作物の栽培に適さない場所もあるため、助言を受けることで無駄な投資を防ぐことができる。

「健康な土壤」は持続可能な農業の主要な条件であり、病害に強い丈夫な作物を育てる。そのため土壤の状態には細心の注意をはらわなければならない。

2区画目の30%のスペースは、1年間食べるのに十分なコメを雨季の間に栽培するために用いられる。洪水などの自然災害が減れば、農民は政府の援



助に頼らなくてもよくなり、政府予算の節約にもつながらる。「新しい理論」では、5ライを稲作にあてれば1世帯が1年間食べるのに十分であると計算している。これにより農家が収穫期以外の時期に高値でコメを買う必要もなくなる。

もう1つの30%の区画は果樹、野菜、ハーブなど他の作物の栽培に使う。残りの10%の土地は住居、家畜の飼育などに使用する。「新しい理論」に従えば、コメと果樹をそれぞれ5ライの面積で作付けするためには年間約10,000m³の水が必要となる。これらの農産物から得られる収入は食費と衣服代を賄うのに十分な額となるだろう。

複合農業は限られた資金でも行うことができ、気候や経済状況の変動にも柔軟に対応できる。効率性や管理のしやすさという点では単一品種栽培の方が



「新しい理論」にもとづく農業の実践（ピクントーン開発研究センター）



優れているが、不作の年には経営が行き詰まる恐れがあり地域社会の安定にも影響を及ぼす。多品種栽培の場合は需給状況によっては個別の農産物価格が大きく変動することもあるが、リスクを分散することができる。

「新しい理論」の実践にはタイの農村に昔からある助け合いの文化の復活が求められる。村人が総出で稲刈り作業をする伝統的な「**ロンケーク**」の慣習を活用すれば、人々の団結心を高めるだけでなく人件費を抑えることもできる。社会が発展し、道徳が向上するために地域社会は重要な役割を果たす。国王陛下は人々が宗教を通じてより強く結びつくこと



「新しい理論」にもとづく土地利用のモデル
住居、池、畑、野菜畑、樹木、水田で構成されている



を勧められた。例えば**モンコンチャイパッター寺院プロジェクト**では、僧侶は活動に参加した住民の精神的、道徳的な支援を行うと同時に陛下の農業理論の普及にも努めている。

「注意深く一歩後ろに下がる、という姿勢が求められます。簡素な方法をもう一度見直し、最新の機械や技術に頼らないこと。前進するにはまず後退する必要があります」¹

国王陛下は「新しい理論」の第2段階として、第1段階で成功を収めた農民が農産物をみずから市場で売するために「**協同組合**」を組織することを推奨された。協同組合では作物の品種選びから土壌や灌漑制度の整備までの過程で組合員が互いに協力し、販路拡大や共同倉庫へのコメの貯蔵、精米なども共同で行う。その他保健衛生センターの設置、融資、子どもの教育支援などの活動も行う。

第2段階で成功を収めたら、次は経営効率の向上を目指してより大きな機関と交渉を行う。これは必要な活動資金を集めるためにコミュニティー基金を設立したり、銀行や協同組合企業などから外部資金を獲得したりすることを意味する。これらの資金を元手に組合が農民から直接コメを買い入れて精米できるようになれば、農民はより高値でコメを売る

¹ 1997年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



ことができる。調達した現金で日用品を安く仕入れて売ることもでき、各家計の支出が抑えられるうえに販売による副収入が生まれる。

「新しい理論」では土地の利用区分に関する計算法が示されているが、土地の大小に応じて柔軟に調整することができる。

国王陛下は「新しい理論」の実践にあたって生じる可能性のある諸問題について認識されていた。1995年の誕生日に際してのお言葉では、次のように述べられた。

「『新しい理論』の実践はそれほど単純なことではありません。どの場所で、どのような条件で、どれだけの予算をかけて行うかによって異なります。『新しい理論』が広く知られるようになると、だれもがその恩恵を期待するようになりました。政府に池を掘ってくれと皆が求めてきますが、そんなに簡単なものではないのです」¹

「新しい理論」を忠実に実践しようとするれば、一生をかけて農業を研究し、経験を積み重ねていくことが求められるだろう。日本やオーストラリア、米国の多くの研究者が複合農業を世界の農業問題へ

¹ 1995年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



の対処法として提案する努力を続けてきたが、今日までだれもが利用可能な解決策を示すには至っていない。国王陛下の「**新しい理論**」に対する関心は農民だけでなく政治家、企業、一般国民の間でも高まった。1997-98年の経済危機でタイは大きな打撃を被り、人々は限られた資金を利用してどう生き残るかを考えなければならなくなった。「新しい理論」は地方の貧しい農民たちに身の回りにあるものを利用して生計を立てる方法を教えた。危機から脱する道を示してくれるものとして都会の人々の間でも広く支持され、「**少ないものを最大限に活用する**」という考えが認められるようになった。

「足るを知る経済」

「足るを知る経済（セータキット・ポーピヤン）」

とは、国王陛下が経済危機のずっと前から四半世紀以上にわたりタイ国民の生活指針として示されてきた概念である。経済危機に直面した後も、陛下はグローバル化時代のさまざまな変化のなかで安定的で持続可能な生活を営むための方法としてこの考えを強調された。

「足るを知る経済」の哲学

「**足るを知る経済**」とは家庭から地域社会、政府



までのあらゆるレベルにおいて国民の生活や行動の指針となる、いわば生活哲学である。政府による開発と行政においては、特にグローバリゼーション時代の経済開発を「中道 (middle path)」の考えに沿って進めることを重視する。「足るを知る」とは、身の丈に合っているかを重視し、よく考えて行動し、内外の変化による影響からみずからを守る力を備えるという意味である。物事を実行するにあたっては思慮深い姿勢で、計画から実践までのすべての段階でさまざまな学問分野の知識を利用することが求められる。国民、特に政府職員、学者、企業家はみずからに高い倫理基準を課し、道徳心と誠実さをもって活動しなければならない。また、正しい知識と忍耐力、努力、英知、慎重さを身につけることにより、外部世界の物質的、社会的、環境的、文化的な面での急速かつ広範な変化に対処することが求められる。

近年の国王考案開発プロジェクト

タイ国民がどれだけ質素な生活を心がけても、洪水で農作物や交通網が被害を受けその努力が水泡に帰するということが20世紀末にしばしば起こった。人的な要因であれ自然が引き起こしたものであれ、環境問題は世界全体に大きな影響を及ぼしている。タイに特有の問題は、よく知られているように乾季



には干ばつが起こり、モンスーンの時節には洪水に見舞われるというものである。国王陛下は水資源にかかわるさまざまな問題に特別な関心を払い、干ばつや洪水に苦しむ国民を長年支援し続けてこられた。数千もの国王考案プロジェクトが立ち上げられ、目覚しい成果をあげたものもある。環境問題によってもたらされる苦しみを和らげるため、陛下はプロジェクトの成功を強く望まれた。1988年に陛下が考案し1993年に政府の支援が決定した「**パークパナン流域開発プロジェクト**」は興味深い事例の1つである。パークパナンは南部ナコーンシータンマラート県の名の知られた港町であるが、海水の浸入により土壌の塩分濃度が高まり住民が困難に直面することになった。190万ライの地域をカバーするこのプロジェクトが完成すれば、海水の浸入を防ぐ水門の内側に7,200万m³の淡水をためることができる。



ナコーンシータンマ
ラート県を流れる
パークパナン川



「猿の頬プロジェクト」

1995年、タイは未曾有の大洪水に襲われた。中部地方の大部分の地域が浸水し、他の地方にも深刻な被害をもたらした。同年12月4日、陛下は誕生日祝賀のために訪れた人々を前にして幼い日の思い出を引用しながら次のように述べられた。

「5歳の頃私は猿を飼っていて、バナナをやる
と噛んでから膨らませた頬にため込んでいたの
をよく覚えています。この『猿の頬プロジェクト』
の起源は私が5歳のときまで遡るもの
です。それからもう63年も経ってしまいま
した」

陛下は、水が十分にあるときに乾季に利用できる
ようためておくのが「猿の頬プロジェクト」であ
る、として次のように説明された。



「猿の頬プロジェクト」
のシンボルマーク



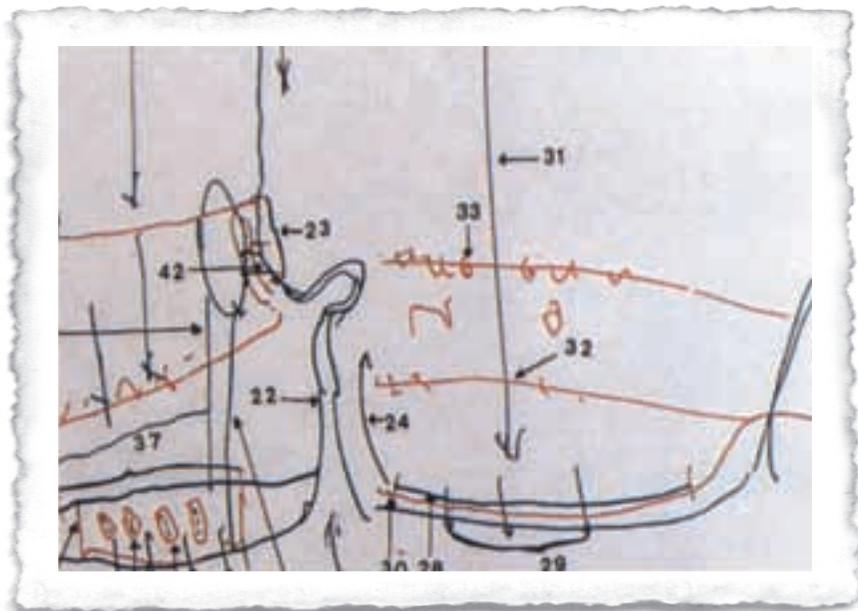
実物の「猿の頬」



「猿の頬プロジェクト」について説明される国王陛下（チットラダー王宮）

「後で使うために水をためておけるよう『猿の頬』を作らなければなりません。洪水時に満潮になると、溢れた水をどこかへ逃がさなければ浸水被害を引き起こします。干潮で海水が下がると、溢れた水は川に戻ることができなくなり、洪水被害はそのままになってしまいます。そこで、溢れ出た水をためる『猿の頬』が必要になるのです。『猿の頬』からは時機を見計らって放水します」

このプロジェクトを実行すると数週間で水位が下がり、冠水していた農地や道路が姿を表すようになった。バンコクや地方の住民は大喜びで陛下に感謝した。陛下の考案によりチャオプラヤー河西岸



猿の頬プロジェクトについて自ら図を描いて説明する



猿の頬プロジェクト
について説明される
国王陛下

にある各運河の東西両端に多数の水門やポンプ設備が設置され、排水、浚渫、拡大工事が施されたが、これらの方法が正しかったことが証明された。運河が『猿の頬』として溢れた水を効率よくためられるよう、バンコク北郊のランシット運河から東郊のダーン運河まで、水が海までスムーズに流れるよう浚渫工事が行われ、ごみや水草が取り除かれた。

「猿の頬プロジェクト」はターチン川下流、サムットサーコーン県のマハーチャイ・サナムチャイ運河



マハーチャイにある水門・排水施設



バンコク東部のプロジェクト関連施設



及びスナックホーン運河、バンコク西部、サラブリー県、アユタヤ県、パトゥムターニー県、サムットプレーカーン県、そしてノンタブリー県東部までをカバーしている。アユタヤは14世紀まで遡る歴史をもつ古都であるが、地理的に洪水の被害を受けやすい。陛下は既存の運河だけでは不十分であり、景観に配慮した貯水池を新たに作ることで洪水問題を解決し、同時に古都の美しさを守れると考えられた。

パーサックチョンラシットダム・プロジェクト

「パーサックチョンラシットダム」は1989年に陛下が考案された。陛下が特に高い評価を与えられたプロジェクトの1つで、洪水対策として期待を集めている。全長4,880メートル、幅187メートル、高さ36.50メートル、貯水量9億6,000万 m^3 を誇る、このタイ最長のアースダム（土製ダム）の着工は、政府の予算支出が決まる1994年まで待たなければならなかった。2億4,500万立方メートルの貯水能力を有するナコーンナーヨック県北部水源開発プロジェクトとともに、モンスーンの季節に水をためて乾季に利用されるだけでなく、洪水対策としても役に立っている。1994年12月4日、ドゥシット



パーサククチョンラシットダム



パーサククチョンラシットダム完成式典で管理センターを視察

ダーライ王宮でのお言葉で陛下は次のように述べられた。

「パーサククやナコンナーヨックのプロジェクトは多くの国民に幸福をもたらしました。協力してくれた人々に感謝しなければなりません。また、住民の理解と協力を得るために尽力したナコーンナーヨック県知事¹、ロップリー県知事²の活動も評価されるべきです」

¹ クンイン・チャラットシー・ティーピラット（クンインは首相夫人など女性に与えられる高い位）

² マヌット・ワッタナコーメン氏



チットラダー王宮内に退避した学生らと謁見する国王陛下（1973年10月14日）



第 18 章

国民の危機に

タイ

国王は憲法の下に存在し、プーミポン国王自身にも政治的な役割を果たそうというお考えはない。しかし国家が危機に瀕し、他の打開策が見つからないとき、政府が頼りにするのはいつも国王陛下である。

陛下は政府にとって頼れる存在であるだけでなく、国民が心を1つにするうえでも中心的な役割を果たされてきた。1973年と1991年に国家が重大な危機に直面した際、国民が陛下の威信を頼りにしたことがその例としてあげられるだろう。

1970年から1973年にかけて政府の民主改革の遅れに対する不満が高まり、1973年10月6日に政府が13名の大学生を逮捕したことがタマサート大学での大規模な抗議集会へとつながった。

同年10月10日、当時の首相タノーム・キッティカチョーン陸軍元帥は国王陛下に拝謁し、状況を報告するとともに陛下のご判断を仰いだ。陛下は、政府が武力行使を避け、平和的な解決策を探るようにとの意向を表明された。政府は学生らの要求を受け



入れたが、事態は容易には收拾できなかった。

同年10月13日にはタマサート大学の外にも集会が拡大し、参加者たちの感情は一層の高まりを見せた。多くの国民も政府の約束は信用できないと考えた。学生グループの指導者たちは陛下に拝謁し、事情を説明したうえで陛下のご判断を仰いだ。陛下は学生たちに、政府の約束を信じ、集会を平和裏に解散するよう求められた。陛下は国民の父として、仲裁役として、また賢明な助言者としての役割を果たされたが、その後に悲劇が待っていた。

翌14日の朝、集会を解散した人々が帰り始めたとき、陛下の居所であるチットラダー王宮周辺の軍施設に近づくのを制止しようとした警官隊と一部参加者が衝突した。警官隊は警棒と催涙ガスを使って排除しようとしたため、驚いた人々は王宮敷地内へと逃げ込んだ。陛下が警備隊に門を開けるようにと指示されたのである。避難した約2,000人のなかには怪我をしたりショック状態に陥ったりした者も多数含まれていた。一方、軍と警察が一般市民に暴行を加え、殺害しているという噂がバンコク中にまたたく間に広まった。これが1973年10月14日にラーチャダムヌーン通りで起きた騒乱事件の契機となった。翌日、平和を保つことができなかった2人の政府指導者タノーム陸軍元帥とプラパート・チャールサティエン陸軍元帥は職を辞し、国外へと



サンヤー・タマサック
学長

去った。

危機が迫ったとき、平和を取り戻す役割を果たしたのも国王陛下であった。陛下は国の秩序を速やかに回復するため、中立的な立場にたち広く尊敬を集めていたタマサート大学の**サンヤー・タマサック学長**（当時）を臨時首相に任命した。

これは民主主義制度下のタイでは前代未聞のことであり、国王陛下が政治に直接関与した唯一の出来事であった。2日後、閣僚を率いて認証式に臨んだ新首相に対し、陛下は、事態はよい方向に向かうとの考えを示しつつも、慎重な姿勢で対処する必要があるとして次のように述べられた。

「現在の問題は極めて複雑な様相を示しています。政府には国の平和と発展のために行う通常の仕事以外に、変化への対応が求められています。変化には物質的なものと精神的なものがあります。物質的変化とは何かを建築することであり、ゼロから作り上げることもあれば、破壊されたものを修復することもあります。精神的な変化も同様で、政府は国民が良い価値観をもち、正義と発展を目指して進むことができるよう努める一方で、先週起きたような事件による精神的な損失を回復させなければなりません。この事件は実に驚くべき変化をもたら



しました。すべての国民が尊厳と誇りをもち、安心して暮らせるよう、正しい政治への切望によって起こった精神的な変化です。政府は国民に民主主義を与えると約束し、6ヶ月以内に憲法を制定すると声明を発表しました。しかし、治安などあらゆる制度が混乱したままです。すなわち、本来政府の役割である精神的・物質的清廉さを維持し、浄化するという仕事を国民に委ねているのです。新政権には、さまざまな役割を政府に戻すという特別の責務があります。これは民主政治のもとでの政権樹立という目的達成のためです。つまり、指導者は国を発展させ、向上させていく者でなければなりません。民主政治というのは、国民から国を運営する人物を下院議会に選び、下院が政府の責任者である内閣を決めるというものです。現在の内閣は国民によって選ばれた人々ではありませんが、最善を尽くして職責を全うするために選出されました」¹

緊迫した状況のなか、陛下は国家の建て直しのため迅速に行動された。抗議集会はなおも続いていたが、新政権は事態を収拾することに成功した。国民が民主政治を取り戻すため、陛下は閣僚とともに

¹ 1973年10月16日、チットラダー王宮でのサンヤー・タマサック首相と閣僚に対するお言葉。



粉骨碎身で働かれた。そしてこの目的を達成するため、あらゆる社会階層と職業を代表する人々からなる**国民代表者会議**が設置された。また、陛下は各職業分野の国民代表から構成される**憲法制定議会**の設置も提案された。そして国民代表者会議の開会にあたり陛下は次のように求められた。

「我が国にとって真の利益、職業、学術、そしてさらには広い見解、思想を代表する憲法制定議会となることを望みます」¹

1973年12月28日、憲法制定議会の議員選考が完了した。開会式でのお言葉から、陛下が国民に真の利益をもたらす民主主義政権の誕生を望まれていることが十分にうかがえる。

「選考の結果を見て、本議会がさまざまな集団、いろいろな職業の人々から構成されていることに満足しています。互いにかけて離れていた人々が、ここにこうして集まり、意見を交換し、見解を聞き、そして愛する国を望ましい方向に導くため皆であらゆることを決めてくれるでしょう」²

¹ 1973年12月18日、タイ国ラーチャトリンマイ協会における開会式でのお言葉。

² 1973年12月28日、ドゥシット王宮アナンタサマーコム宮殿における国家立法議会開会式でのお言葉。



国民はとうとう自分たちの将来をみずから決める機会を手にしたのである。

陛下は国民の幸福のために数多くの活動をしてこられ、そのうえで憲法に定められた職務も果たされている。例えば、各種法律への署名がそれである。政治的に不安定な状況が続くなかで王制はもっとも安定した制度として国民の信頼を得てきた。非常事態が発生して希望を失ったとき、国民は国王陛下に助けを求めるのである。

タイ国民がクーデターを過去のものとして忘れ去りつつあった1991年、陸軍上層部の一部が憲法にもとづいて選ばれた政権から権力を奪い、文民の**アーナン・パンヤーラチュン氏**を首相に指名した。

1992年には国会議員選挙が行われた。この選挙で勝利した政党は**スチンダー・クラープラユーン陸軍大将**に首相就任を要請した。バンコクの間層は過去20年間¹前進を続けてきたタイの民主主義が脅かされていると感じ、多くの人々が抗議集会に参加し首相の辞任を求めた。

同年5月15日、王宮前広場（サナーム・ルワン）での抗議集会に集まっていた人々が政治改革を要求し国会に向かって進み始めた。ラーチャダムヌーン

¹ 1973学生革命以後の経過年数。



通りで警備にあっていた兵士たちは彼らがドゥシット王宮に向かっていると信じ、武器をもたない人々に向けて小銃を発砲した。数千人が危険な状態から逃れようとするなかで多数の死傷者が出た。国家は最大の危機ともいうべき事態に直面した。軍部は戒厳令を布告し、市中は混乱状態に陥っていると報じられた。国内外のマスメディアが流す情報には相矛盾する内容が入り混じり、何百万人もの人々が不安な状況に置かれた。

そうしたなか、国民は国王陛下の英知の力を再び目のあたりにすることになった。1992年5月20日、状況が悪化の一途をたどるなかで、陛下は対立する2つの勢力の指導者に謁見し、内戦と称された危機的な状態からタイを救われたのである。

国内のすべてのメディアがこの様子を生中継で伝えた。テレビ画面に映ったのは、椅子に座った国王陛下の前に、抗争の端緒となった対立する双方の指導者が膝をついてゆっくりと進み出る場面だった。陛下は穏やかではあるが断固とした口調で次のように述べられた。

「なぜこのようにあなた方を呼び寄せたのか、不思議には思わないでしょう」¹

¹ 1992年5月20日、スチンダー・クラブラユーン首相及びチャムローン・シームアン氏に対するお言葉。



国王陛下は危機打開を図りスチンダー首相（右端）、民主化運動指導者の
チャムローン氏（左から2人目）と謁見した（1992年5月20日）

陛下はこの2人、スチンダー首相と民主化運動指導者のチャムローン・シームアン氏に対し、対立の理由は当初から明白であったとしながら、人命が失われ、公共の財産にも損害をもたらした事態について「あるのは損失ばかりです。国民の精神にとっても国の経済にとっても、その損失がいったいどれほどになるのか、まったく計り知れないほどです」¹と述べられた。

¹ 1992年5月20日、スチンダー首相及びチャムローン氏に対するお言葉。



そして、次のように続けられた。

「いま、国の至るところで国民は危険に脅え、
国が没落してしまうのではないかと恐れています。
こうした事態を解決するのは困難です」¹

陛下は2人に対し、すべての国民が賛同するに
ちがいない問いを投げかけられた。

「それでだれが勝者になるというのですか。
だれもなれないでしょう。これは極めて危険な
ことです。敗者しか生まれないのです。対立し
たどちら側も敗者です。最大の敗者は国家なの
です」²

双方の指導者が自尊心を捨てて陛下のお言葉を受
け入れたため、国を2つに引裂いた騒乱は直ちに収
束した。国民が必要とするときに再び危機を救っ
てくださった陛下の英知と行動に、人々は心から尊敬
の念を抱いた。

陛下はその後、以前と変わらぬ公務に戻り、国の
発展のために活動を続けられている。

¹ 1992年5月20日、スチンダー首相及びチャムローン氏に対
するお言葉。

² 同上。



米国議会で演説する国王陛下。後列はニクソン副大統領（左）と
サム・レイバーン議長（1960年6月29日）



第19章

親善訪問

19

92年5月の出来事がテレビを通じて世界中に伝えられると、タイ国民の精神的、道徳的支柱としての国王陛下の存在は外国でも広く知られるようになった。1995年6月、国際的に定評のある週刊誌『アジアウィーク』は「アジアの偉大な20人」の1人に国王陛下を選んだ。記事には以下のように記されている。

「国王は国の最下層にある人々にさえ手を差し伸べてきた。政治家としてではなく政治に影響を与えることで、国王は伝統的な王室を近代的で進歩的な民主主義にとって不可欠な存在に変えた」¹

この記事では1950年以降、陛下が尽力してきたさまざまな活動も紹介されている。陛下は社会福祉や地方開発プロジェクト視察のため全国いたる所に足を運び、なかでも国民生活に直結した植林と灌漑に特別な関心を寄せてこられた。陛下は政治には関わらず国民のことだけを気遣ってこられたが、

¹ *Asiaweek*, June 1995.



「(国王が) 安定を導く力が求められていると感じた時には、静かに、しかし力強く行動される。発されたシグナルがタイの歴史を変えたことも一度ならずあった」¹

国王陛下は地方開発における長年の活動により世界的に尊敬を集めている。国王考案プロジェクトにはイスラエル、日本、台湾など海外から支援を受けているものもあり、陛下が持続可能な開発の指導者であることは外国の人々にも知られている。それでも陛下が外国に出かけられたのは過去30年間にたった一度、それも1994年に隣国ラオスを訪問されただけである。陛下は国が苦境にあるとき、貧困に苦しむ国民の傍にいて彼らを助けたいと望んでいるので海外には出かけない、とされる。これは広く知られた事実である。



1960年と61年、国王、王妃両陛下は米国とヨーロッパ諸国を親善訪問された。また、多くの国の指導者によるタイ訪問を受け入れてこられた。陛下は外国訪問に際してその理由を尋ねられ、次のように明確に答えられた。

「この外国訪問は公式訪問であり、国家元首としての責務です。現代においては小国も大国

¹ Asiaweek, June 1995.



ワシントン・ナショナル空港に到着された国王、王妃両陛下を
アイゼンハワー大統領が出迎えた（1960年6月28日）



大勢のニューヨーク市民の歓迎を受ける国王陛下（1960年7月5日）



ディズニーランドを訪問した国王陛下ご一家を
ウォルト・ディズニー氏(中央)が出迎えた

も相互に依存しなければならない時代であるというのが共通理解になっています。民族や人種に関係なく、すべての人が兄弟のように関わっています。お互いをよく知り、良い関係を築かなければなりません。

普通の親族や兄弟だったら良い関係を築くためお互いを訪ねて行ったりしますが、何百万人ものタイ国民が外国に出かけていくことは難しいので、国王が代表して各国を訪問するのです。私は訪問先の人々にタイ国民の親善の意を伝え、タイについてよく知ってもらい、



映画『G.I.ブルース』の撮影現場でエルビス・プレスリーと談笑される両陛下

好意を持ってもらうよう最善を尽くします」¹

1960年6月14日から7月15日の両陛下による
米国公式訪問は大きな成功を収めた。米国議会での
演説のほか、ハリウッドでは映画『G.I. ブルー
ス』を撮影中だった人気俳優のエルビス・プレス
リーとの対面も実現した。

首都ワシントンでのアイゼンハワー大統領との
会談で、陛下は大統領の質問に次のように応じた
が、そこには陛下の優れた国際感覚が表れている。

¹ シリキット王妃陛下『外国公式訪問の思い出』バンコク出版、1973年、91ページ。



「この国で生まれた私にとって、アメリカは私のふるさとともいえるでしょう。今回の訪問は誠に喜ばしく、この地に帰ってきたことを非常にうれしく思っています」

音楽は陛下にとって友好の架け橋作りの強い味方である。1960年7月4日、陛下は**ネルソン・ロックフェラー**ニューヨーク州知事宅での晩餐会に招かれ、そこで著名なジャズ演奏家である**ベニー・グッドマン**と同席した。食事の後、陛下はグッドマンと1時間半ほどジャムセッションを行い、翌日も彼の自宅があるマンハッタンハウス22階で2時間にわたって共演を楽しまれた。陛下はサクソフオンを演奏され、グッドマンがクラリネット、**ジーン・クルーパ**がドラム、**テディー・ウィルソン**がピアノ、**アービー・グリーン**がトロンボーン、そして**レッド・ノボ**がビブラフォンを担当した。演目は「シーク・オブ・アラビー (Sheik of Araby)」、 「ハニーサックル・ローズ (Honeysuckle Rose)」、「陽のあたる通りで (On the Sunny Side of the Street)」などであった。終了後、陛下はグッドマンからセルマー社製のサクソフオンを贈られた。陛下はその後も音楽を通じて多くの交友関係を築かれた。1962年のマラヤ連邦（現在のマレーシア）公式訪問では、陛下は**トゥンク・アブドール・ラーマン**首相の求めに応じ、高原リゾート



ベニー・グッドマンの自宅で著名なジャズ演奏家たちと共演される国王陛下。





の町タナ・ラタにある別荘でラジオ・マラヤ・オーケストラと共演された。

諸外国を訪問しタイ国民の友好の意を伝えたいという陛下の希望は、数百年にわたり外交活動を続けてきた歴代の国王に通じるものである。1960年7月19日－23日には**英国**を訪問されたが、陛下は両国の関係が長い歴史を持つことを深く理解されていた。1487年に英国人が初めてタイを訪れ、1684年にはタイの使節団が英国を訪問した。ヴィクトリア女王より通商条約締結の命を受けた**サー・ジョン・ボウリング**は**タイ国王ラーマ4世**に拝謁した。それ以来、タイの教育制度では英語が第1外国語として定められてきた。

スイスからロンドンのガトウィック空港に到着した国王、王妃両陛下は、英国民の盛大な歓迎を受けた。両陛下を乗せた専用機がフランス国境を越え英国領内に入ると、英国空軍のRAFジャベリン戦闘機6機が護衛についた。空港から王室専用列車でヴィクトリア駅に到着した両陛下を、**エリザベス2世女王陛下**と**アレクサンドラ王女殿下**、**エディンバラ公爵フィリップ王子殿下**が出迎えられた。儀仗兵司令官はプーミボン国王陛下に対し、閲兵の要請をタイ語で行った。そのあと両陛下は女王陛下とともにオープンカーでバッキンガム宮殿に向かわれ



ロンドンのヴィクトリア駅に到着された両陛下を、エリザベス2世女王陛下とエディンバラ公フィリップ王子殿下が出迎えた



馬車でバッキンガム宮殿に向かう国王、王妃両陛下とエリザベス2世女王陛下



た。両陛下の姿をひと目見ようと、通りの両側には大勢の人々が集まった。

(左から) フィリップ王子殿下、エリザベス2世女王陛下、国王、王妃両陛下

この訪問の際、女王陛下は**ロイヤル・ヴィクトリア・チェーン (The Royal Victorian Chain)** 勲章をプーミボン国王陛下に授与された。陛下はその返礼として**マハー・チャクラー・ボロマラーチャウオン勲章**を女王陛下に授与された。また、本物の象牙がついたチーク製の象の彫刻が記念品として女王陛下に贈られた。女王陛下からは純銀製のトレイ付きコーヒーカップセットが贈られた。

タイは**フランス**とも数百年にわたり友好関係を築いている。1960年10月、同国を公式訪問した両陛下をフランス国民は温かく歓迎した。**シャルル・**



フランスで名誉騎兵隊
を閲兵する

ドゴール大統領が両陛下を空港で出迎え、歓迎の祝宴がエリゼ宮で催された。フランス訪問のハイライトは、パリのオペラホール「**パレ・ガルニエ**」でのオペラ鑑賞であった。小さな宝石が散りばめられた白いタイシルク・ドレスとダイヤの王冠をお召しになったシリキット王妃陛下は、ドゴール大統領のエスコートで1,200人の観衆の前に登場された。フランス国歌の演奏後、**ショパン**作曲、**フォーキン**振付けによるバレエ『**レ・シルフィード (Les Sylphides)**』が上演されたが、ほとんどの観衆は王妃の姿を見ようとして舞台に集中できなかったという。幕間後には**ジョージ・ガージュウィン**作・**ジーン・ケリー**演出『**パ・ド・ドゥ (Pas de Deux)**』が上演された。

両陛下のヨーロッパ諸国歴訪は大きな成功を収めた。両陛下は親しい友人を得るとともに、国家レベルでタイと訪問国との末永く続く友好関係を



両陛下はドゴール大統領夫妻を招き晩餐会を主催された

築かれた。お2人の親しみやすい印象は訪問先の国民の心に深く刻まれた。

米国およびヨーロッパ14カ国歴訪を終えた国王、王妃両陛下が帰国されたのは1961年1月18日のことであった。両陛下を乗せた専用機が着陸した瞬間を国営ラジオ放送が全国に伝えた。国中の寺院で僧侶による読経が行われ、祝福の鐘が一斉に打ち鳴らされた。空軍最高司令官の制服姿の国王陛下とタイシルクのドレスを召された王妃陛下が機内から姿を表すと国王賛歌が演奏され、21発の祝砲が放たれた。両陛下は帰国の儀を執り行うため専用車で王宮内ワット・プラケーオへと向かわれた。



ボードウィンベルギー国王(右)と国王、王妃両陛下(1960年)



スイスを訪問した両陛下はペティピエール大統領(右)の
歓迎を受けた(1960年、ベルン)



バチカン市国でローマ法王ヨハネ23世と会見する両陛下（1960年10月）



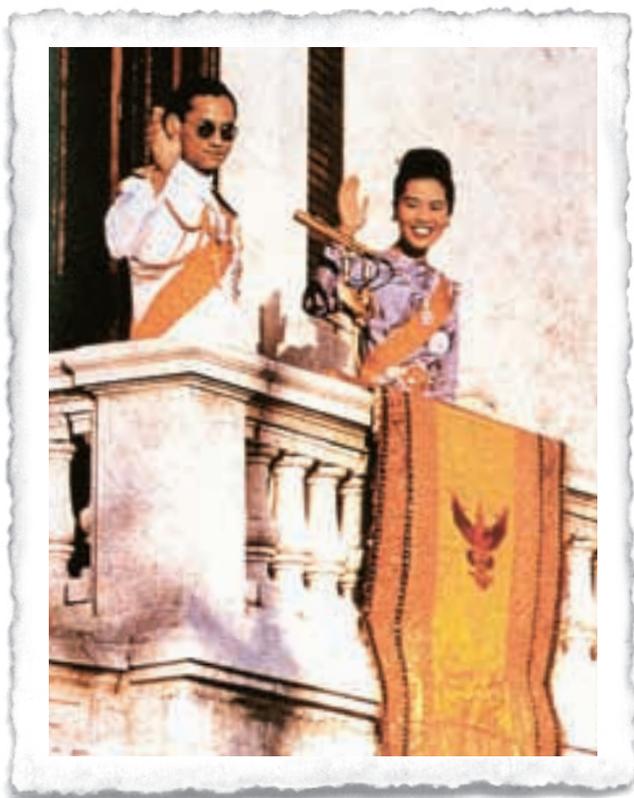
1963年の日本訪問では天皇、皇后両陛下と会見



ヨーロッパ諸国公式訪問から帰国した両陛下を多数の国民が出迎えた（1961年1月、バンコク）

翌1月19日、両陛下はアナンタサマーコム宮殿のベランダに姿を見せられ、国民の歡喜に応えられた。宮殿前の広場から当時の首相、**サリット・タナラット陸軍司令官**が国民を代表して祝辞を申し述べた。

「この度の両陛下の外国訪問が観光のためではなく、各国の人々のタイへの理解を深め、諸国との間に親密な関係を築き、タイ国の榮譽を高めるという重要な目的のために行われたことは、全国民の承知するところであります。両陛下は国家の指導者としてこの重責を見事に



ご帰国の翌日、アナンタサーマーム宮殿のバルコニーから
国民に手を振る両陛下



果たされました。両陛下の卓越した知徳、臨機
応変の機智により、各国で名誉に相応しい歓迎
を受け、大きな評判を呼びました。タイ国民は
この度のご活躍を大変誇りに思い、訪問先から
喜ばしいニュースが刻一刻と伝えられるたび、
我らの国王陛下が諸外国でも敬意をもって受け
入れられたことに感激せずにはいませんで
した。両陛下のお力により、外国の人々のタイ
に対する理解がより一層深まりました。タイを
広く世界に紹介するにあたり、この度のご訪問
ほど成果を得られる方法は他にありません。世
界に誇れる素晴らしい国王を戴くタイは恵まれ
た幸せな国であります」¹

¹ タイ政府観光局『タイ国民を困苦よりお護りくださる王』、
57-58ページ。





第 20 章

尊敬する我らが国王



ここまで本書を読んだ方は、プーミポン国王について既に多くの知識を得たことだろう。1999年、国王陛下の72歳の誕生日を記念して行われた祝

賀行事の様子はテレビを通じて世界に伝えられ、タイ国とその国王についてより広く知られるようになった。陛下は1953年にアジア諸国歴訪中であつたリチャード・ニクソン米国副大統領（当時）に対して述べたみずからの言葉を、今日までずっと守ってこられたといえる。

1969年7月、米国大統領となつたリチャード・ニクソン氏は16年前のアジア歴訪を次のように振り返っている。各国の指導者に「発展のためにもっとも必要なのは何か」と質問したところ、「国内問題を解決するため軍事力を強化することだ」と答える人もいれば「経済開発である」という人もいた。しかしニクソン大統領がもっとも強く印象に残つた答えは、プーミポン国王によるものであつたという。



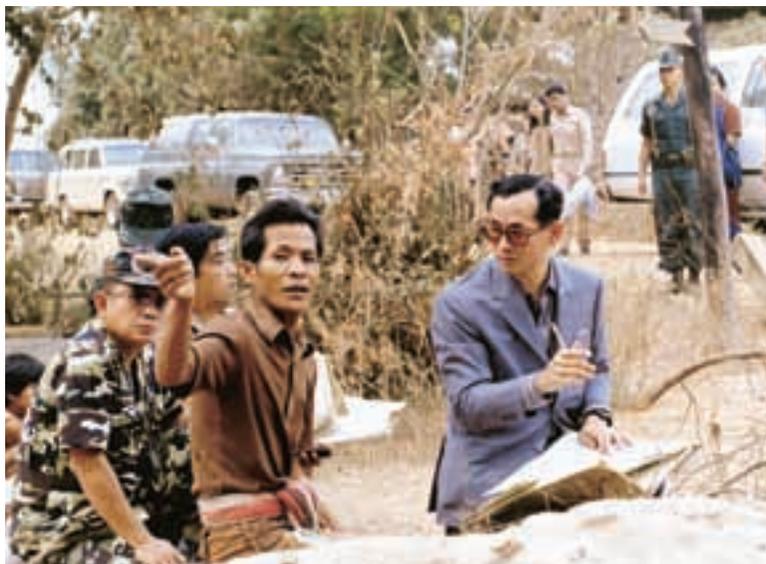


国王陛下は国家の発展における情報技術の役割を重視している

「アジアでも世界のどこにおいても、何よりも必要なのは『理解すること』です」¹

当時まだ26歳であった国王陛下は、国の発展と繁栄に必要な条件をはっきりと示された。一般市民に広く早く情報を伝えるメディアがなかった時代のことである。陛下は国民が何を求めているかを自国の政府に伝えるとともに、世界に向けて発信された。陛下の活動が成功を収めた理由の1つには、陛下がコミュニケーション能力に優れ、国民の声によく耳を傾けてこられたことがある。陛下は人々が本当に必要としているものをよく理解し、もっとも適切な方法で手を差し伸べてこられた。みずから

¹ 1969年7月28日、タイを訪問したニクソン米大統領の発言。



無線を使って指示している場面や、コンピューターに向かってしている場面から、陛下が国民と直接コミュニケーションを図りたいと希望されていることが分かる。そして穏やかではっきりとした言葉づかいから、父親が子どもに対するような姿勢で陛下が国民に接しようとしていることが感じられる。陛下は一般の人々が日常会話で使うような簡素で平明な表現を用いられる。国民を理解するよう努力すると同時に、そうした自分のことを皆に理解してもらう機会を努めて作られている。

農村開発の参考とするため地元住民の意見に耳を傾ける

問題の原因を根本まで深く追究する陛下の姿勢は、他に例を見ないほどである。多くの国の指導者



は首都とその周辺の開発にまず目を向けるが、陛下はタイにとって農民がいかに大切な存在であることを認識し、山岳民族の諸問題を理解し、救いの手を差し伸べた最初の人物であった。国内すべての県に足を運び、必要に応じて道路の建設を指示し、住民の生活改善のために活動された。陛下のこうした活動により、だれにも助けてもらえず忘れ去られていた人々が、水道や電気を利用できるようになり、より良い暮らしを手に入れることができた。

環境保護活動が一般に広まるずっと前から、国王陛下はこの分野で活動されてきた。山岳民族の焼畑農業を止めさせるために力を尽くし、その土地に適



ロイヤルプロジェクトは1988年にマグサイサイ賞（国際理解部門）を受賞した



農業開発プロジェクトにおいて陛下が最も優先されるのは水源の開発である



した他の作物の栽培を勧めてこられた。そのおかげでケシ栽培が減少し、他の農産物への転換に成功した。1988年、「ロイヤルプロジェクト」はアジアのノーベル賞と称される名誉ある賞「**マグサイサイ賞**」を受賞した。一連の活動に対する高い評価により、国王陛下の優れた能力は世界の人々の知るところとなった。300近い山岳民族の村が34ヶ所のロイヤルプロジェクト運営センターの支援を受け、少なくとも14,098世帯の生活が改善したことが確認されている。国王陛下こそがこれらすべての活動の依りどころなのである。

歴代の政府は山岳民族のケシ栽培問題を解決できなかったが、その大きな原因は他の有効な選択肢を与えることができなかつた点にある。国王陛下は長期的な視点に立ち、何かを止めさせるには同等またはそれ以上の価値のあるものを代わりに与えなければならない、ということを理解されていた。ケシ栽培は85%も減少し、山岳民族は涼しい気候に適した野菜や果物、そしてコーヒー豆を栽培するようになった。

もし陛下がただ農民に助言や農産物の種を与えたりするだけであったなら、これほどの成功を収めることはなかつたであろう。陛下はみずからの努力によって、農民にとって土地がどれほど大切なもので



あるかを学ばれた。学術研究と実験から得られた成果は必ず実用化された。陛下はあるとき、宮殿のベランダで植物を栽培し、どのように土壌が流出するか実験された。砂を含んだ土壌に水をかけて混ぜると砂だけが残るという事実を時間をかけて自分の目で確認するためであった。

すでに述べたように、国民を助けるため数々の努力を重ねてきた陛下は海外からも尊敬を集めている。陛下は海外のさまざまな機関から毎年のように賞を授与されるだけでなく、この上ない賞賛の言葉を陛下に捧げる人もいる。1995年、米国の**マックス・ボーカス**上院議員は、陛下を議会演説で次のように称えた。

地方訪問の際には住民の自宅に立ち寄りプロジェクトの参考情報を集められることもある



村落の指導者たちから聞く話は陛下が開発プロジェクトを考案する上で有用な情報となる

「近代化に成功し繁栄を享受する現在の東南アジアにあって、タイはこれを支える主要国のひとつです。バンコクは世界的な大都市であり、商業センターとしての役割を果たしています。これらの成功の多くは国王陛下の賢明なお導きによるものです。陛下はみずから手本を示すことで国民を導いてこられました。仏教徒の王としての伝統的な十正道、すなわち、布徳、持戒、犠牲、公正、温和、努力、不怒、不圧、忍耐、不誤を陛下は身をもって体現されました。また陛下はみずから行動することによって国民を導かれました。国王、王妃両陛下は数十年という長い歳月を辺境地域に住む貧しい民のため



雨中での活動



いかなる天候、時間、
場所であっても活動を
続けることをいと
わない

に捧げてられました。全国73県¹すべてに足を運ばれ、対話を通じて国民との親密な関係を築いてられました。こうした活動の成果は公衆衛生の向上や国民皆教育の達成、伝統的な手工艺品や織物の復活などにはっきりと表れています」²

しかしながらこの言葉は、陛下がどのようにしてそうした成果を収めることができたのかをすべて説明するものではない。陛下がいつも夜遅くまで仕事をされているとはいえ、本来、立憲君主制の下

¹ 現在76県。

² 1995年6月9日、マックス・ポーカス米国上院議員の演説
“Tribute to King Rama IX of Thailand”





に存在する国王であり、政治や軍事に関する権限はない。だれも国王の言葉を聞いてそのとおりに実行する必要はないはずである。新聞の投書欄には、国の問題をわずか2、3節の文章で解決できると期待した人々からの意見や提案が溢れんばかりに掲載されている。国民はすべて解決してくれる白馬の騎士を切望しているが、たった1人の騎士が解決できるほど問題は少なくはない。1932年の民主制移行以来、多くの人間が政治指導者になりたがったが、真の指導者とは他のすべての指導者たちから尊敬される人物でなくてはならない。その人物とはすなわち、**国王**である。

国王陛下はタイにおける意思疎通の困難さについて次のように発言されている。

「ある人の見方ともう1人の見方が正反対であった場合、互いに調整して適切な出口を探ろうとしないのなら、話し合っても無駄です。議論を重ねるほど混乱が生じてしまい、事情を知らない周りの人間はますます心配になるでしょう。今のタイは、ある人がこうだと言えばもう1人はいや違うといい、一般国民はどうすればよいかわからず不安を募らせているという状態です。根本の考え方がまったく異なる人同士がかみ合わない議論をすれば『全く違うことを同



時に話す』ということになります。同じテーマについて話しているように聞こえるが、実際はまったく違うことを話しているのです。これでは出口も見えず、成果も期待できません」¹

そして陛下は「国の開発においても、自己を向上させるためにも、もっとも重要なのは他人と力を合わせること」²であり「道理をわきまえて行動すること」³である、と強調されている。

陛下は、自分1人だけで行動するだけでは十分ではないと認識されている。物事を実現するための論理と必要性を理解するためには、皆が明確な方法でお互いの意見を交換しなければならない。1992年12月4日のお言葉には次のような一節がある。

「公務員でも、ビジネスマンでも、一般の人々でも、タイ人は皆しっかりと自分の考えをもたなければなりません。ちょっと立ち止まって考えてみるという程度のことで十分です。問題が生じたときにすぐに口を開くのではなく、まず考えるのです。たった1秒でも価値があり

¹ 1993年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

² 1973年7月26日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。

³ 1992年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



ますから練習してください。考えれば間違いを犯すことはありません。間違いを犯さなければ問題は災いに発展せず、よい方向へとむかいます」¹

¹ 1992年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



毎晩放映されるテレビの王室関連ニュースやドキュメンタリー番組では、陛下の柔軟な姿勢を見ることができる。技術的な問題や地域特有の障害に直面したプロジェクトを断念することも恐れない。各地を訪問し全国の人々の意見に耳を傾けてこられた陛下が「話す前に考える」ことについて話されたのは、十分な教育を受けていない国民は発言すべきではないという意味ではない。立ち止まって考える、というのは次のような意味であると陛下は述べられた。

「建設的思考とはつまり、冷静な気持ちで、自分の損得を抜きにして、国または社会のためにいかにして物事をなすべきかを理性をもって



考えることです」¹

1人ひとりの国民は個別の問題を抱え、自分と家族にもっとも利益があるようにと望んでいる。そうした状況のなか、国王陛下はどのようにして国民の個別の要求を聞きつつ社会全体に利益をもたらすような活動ができたのだろうか。陛下のお言葉によれば、社会のためにみずからを犠牲にするというのは、社会と自分がともに生き残れる

範囲内で貢献するということである。

いずれにせよ、「犠牲」という言葉も頻繁に使えば聞き慣れてその大切さが伝わらなくなる。陛下はこの点についてよく理解されており、1992年12月4日には御誕生日祝賀に訪れた人々を前に次のように述べられている。

「自己犠牲という言葉はよく耳にしますが、協力という言葉も知らなければなりません。協力という言葉も聞き飽きたという人もいるかも

¹ 1992年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



しません。それは与えることであり、助け合うことです。何を与えるのかといえば、それは思いやりの気持ちです」

これはあくまでお言葉として発せられたのであるが、さまざまなやり方で実行に移すことができる。陛下は個人資産を投じて多くのプロジェクトを設立されたほか、自身のために公的な資金を浪費しないようにと気を配られている。これも国民のことを考



えた犠牲といえるだろう。過去数十年間、王室専用車の列のために道路を通行止めにしたよう警察にしばしば要請されていた。1992年12月4日の御誕生日祝賀の際には、陛下の銅像を建立する計画が1970年にもち上がったという話を引用しながら、ある高級官僚に対して次のように言葉をかけられた。

「銅像はまだ作る必要はありません。その代わりに道路を作ってください。環状道路です。これは私の夢なのです」¹

みずからの権利を犠牲にすることは普通の人から見ればたいしたことではないかもしれない。しかし、国の最高の地位にあり、忠誠と尊敬の対象である国王が特権を放棄することは大きな影響をもっている。陛下はお言葉や活動を通じて、タイ国民と世界の人々に自己犠牲と社会貢献のあり方を示されてきたのである。

数百ページにおよぶ本書には、50年以上もの長きにわたり、肉体と精神を国民のために捧げてこられた陛下の変わらぬ姿が描かれている。普通、人は時代の流行に合わせて変化し、関心を向ける対象もその都度変わっていくものである。しかし、タイ国

¹ 1992年12月4日、チットラダー王宮における国王誕生日祝賀式典でのお言葉。



民の心のなかにはつねに尊敬する国王陛下の姿がある。陛下は永遠にタイ人の精神的、思想的な拠りどころとして存在し続けるのである。

たみびと

民人のこころのなかにあらせらる

シヤムの大地を統^すべりし「国の力」

バラシ・チャート

祝福に満つはその御名にふさわし

「プーミボン国王」

忠愛は全土に遍^{あまね}く



Bibliography (参考文献)

Armed Forces Information Office, Supreme Command Headquarters. **Everything Begins in the Countryside.** Bangkok : Armed Forces Information Office, Supreme Command Headquarters, 1989.

Asia Time. (2 July 1988)

Bangkok Post ed. “Long Live His Majesty the King.” **Bangkok Post.** (1991)

Batson, Benjamin A. **The End of the Absolute Monarchy in Siam.** Singapore : Oxford University Press, 1984.

Batson, Benjamin A., ed. **Siam’s Political Future : Documents from the End of the Absolute Monarchy.** Ithaca : Cornell University Southeast Asia Programme, 1974. (Data Paper No. 96)

Bhumibol Adulyadej, His Majesty King. **A Memoir of His Majesty King Bhumibol Adulyadej of Thailand.** Bangkok : Office of His Majesty’s Principal Private Secretary, 1987.

_____. **Royal Addresses and Speeches,** 1988.

_____. **Royal Addresses and Speeches.** Bangkok : Office of the Prime Minister, 1975.

_____. **Royal Addresses and Speeches : Complete Collection.**

_____. **Royal Advice.** Bangkok : Office of His Majesty’s Principal Private Secretary, 1992.

_____. **Royal Speech.** Bangkok : Committee on Environmental Awareness, 1989.

_____. **Royal Speech.** Bangkok : Office of His Majesty’s Principal Private Secretary, 1992.

Bhumibol Adulyadej, His Majesty King. **Royal Speech.** Bangkok : Office of His Majesty’s Principal Private Secretary, 1990.

_____. **Royal Speech.** Bangkok : Sub-committee to Promote Development of Democratic Practice in the National Identity Board, 1991.

Boonsom Martin, and others. **Our King.** Bangkok : Dhurakijpundit University, 1987.



- Chaipattana Foundation. **Activities of the Chaipattana Foundation 1993.** Bangkok : Chaipattana Foundation, 1994.
- Chalermplap Thawiwong. **Palace Customs.** [n.p.], 1971.
- Chittrapat Krairiksh. **Kings of the Royal House of Chakri.** Bangkok : Office of Her Majesty's Principal Private Secretary, 1985.
- Chula Chakrabongse, His Royal Highness Prince. **Lords of Life.** Bangkok : D.D. Books ; London : Alvin Redmond, 1960.
- Committee for the Rattanakosin Bicentennial Celebrations. **Illustrated Handbook of Projects Undertaken Through Royal Initiatives.** Bangkok : Committee for the Rattanakosin Bicentennial Celebrations, 1982.
- Committee for the Rattanakosin Bicentennial Celebrations. **The Chakri Monarchs and the Thai People : a Special Relationship.** Bangkok : [n.p.], 1982.
- Committee to Collect and Classify His Majesty's Activities Concerning Education, Religion and Culture. **The Activities of His Majesty King Bhumibol Adulyadej Concerning Education, Religion and Culture.** Bangkok : Kurusapha Press, Ministry of Education, 1988.
- Davies, Reginald. **The Royal Family of Thailand.** Nicholas Publications, 1981.
- Davis, Bonnie. "Painting by His Majesty King Bhumibol Adulyadej." Long Live His Majesty the King. **Bangkok Post.** (5 December 1989)
- _____. "The Royal Camera Buff." **Bangkok Post.** (1989)
- Department of Curriculum and Instruction Development. **Projects Undertaken on the Initiative of His Majesty the King.** Bangkok : Department of Curriculum and Instruction Development, 1977.
- Fine Arts Department. **The Coronation.** Bangkok : Fine Arts Department, 1987.
- Finestone, Jeffrey. **The Royal Family of Thailand : the Descendants of King Chulalongkorn.** England. White Mouse Editions. Thailand : Phitsanulok Publishing, 1989.
- Food and Agricultural Organization of the United Nations. **The King and Agriculture in Thailand.** Bangkok : Regional Office for Asia and the Pacific (RAPA), Food and Agricultural Organization of the United Nations, 1987.
- Foreign Correspondents Club of Thailand. **The King of Thailand in World Focus.** Bangkok : Foreign Correspondents Club of Thailand, 1988.



- The Future is Abundant : A Guide to Sustainable Agriculture.** Arlington, USA : Tilth, 1982.
- Gray, Denis and McDowell, Bart. “Thailand’s Working Royalty.” **National Geographic.** 162 (October 1982)
- Hoskin, John. “His Majesty the King as Artist.” **His Majesty King Bhumibol Adulyadej.** Bangkok : Thai Airways International, 1988.
- Huai Hong Khrai Royal Development Study Centre. “Huai Hong Khrai Royal Development Study Centre.” (Thai leaflet)
- Jarunphan Isarankura na Ayutthaya. “His Majesty the King and International Relations.” **Diligent More Than Complaining.** Bangkok : Thai Language and Books Society, Under Royal Patronage, 1988.
- _____. “The King and Foreign Affairs.” **Our King.** Bangkok : Dhurakijpundit University, 1987.
- Kanok Wongstrangan. **Trends of Politics and Government in H.M. the King’s Royal Advice.** Bangkok : Thai Studies Institute and Research Section, Chulalongkorn University, 1988.
- Kanokporn Boonsong and Apisit Eimnoh. “**Integrated Management System for Mangroves Conservation and Shrimp Farming : the Case of Khung Kraben Bay, Chanthaburi Province, Thailand**”, Paper presented at Ecotone IV, Bangkok : Thailand National Commission for UNESCO, 1995.
- Kanda Thammongkol, Khun, “His Majesty’s Genius in Languages.” **Language Criticism Magazine.** Special Edition. Bangkok : Language Institute of Chulalongkorn University, 1987.
- Karawik Chakraphandhu, Mom Chao. “His Majesty the King’s Painting.” **Priew.** (1990)
- The Katavethin Foundation. **The Music of His Majesty King Bhumibol Adulyadej.** Bangkok : The Katavethin Foundation, 1987.
- Khan Rattamontri. **The History and Works of Field Marshal Sarit Thanarat,** Bangkok : [n.p.], 1964.
- Leaders.** Vol. 5, No. 2, (April-June 1982)
- Look.** (27 June 1967)
- MacDonald, Alexander. **Bangkok Editor.** New York : Macmillan, 1949.



Manich Jumsai, Mom Luang. **Their Majesties' State Visit to England, France and the Federal Republic of Germany in 1960.** Bangkok : The Rotary Club of Patumwan, 1987.

Maund, Laurie. **The Royal Ceremonies Past and Present.** Bangkok : National Identity Board, 1990.

Ministry of Agriculture and Co-operatives. **Royal Rainmaking Project.** Bangkok : Ministry of Agriculture and Co-operatives, 1986.

Ministry of Education. **The Thai Museum at Nordcapp.** Bangkok : External Relations Division, Ministry of Education, 1989.

Moments in Southeast Asian Sports. [n.p.] : Presko Public Relations, 1985.

N. Tantemsapya. "Sustainable Agriculture in Thailand." **Thai Environment Institute Quarterly Environment Journal.** Bangkok : [n.p.], 1995.

Nanasamvara, Somdet Phra (sermon). **Ten Thousand Days on the Throne.** Bangkok : Foundation for the Promotion of Buddhist Meditation in Thailand, 1977.

Naradhiwas Rajanagarindra, Her Royal Highness Princess. **From Small Princes to Young Kings.** Bangkok : [n.p.], 1987.

National Identity Board. **Thailand in the 90's.** Bangkok : National Identity Office, Secretariat of the Prime Minister, 1991.

_____. **Chakfa Sudin** Vol. 4. Bangkok : National Identity Office, Secretariat of the Prime Minister, 1988.

_____. **Chakfa Sudin** Vol. 5. Bangkok : National Identity Office, Secretariat of the Prime Minister, 1990.

_____. **Chakfa Sudin** Vol. 6. Bangkok : National Identity Office, Secretariat of the Prime Minister, 1991.

_____. **Chakfa Sudin** Vol. 7. Bangkok : National Identity Office, Secretariat of the Prime Minister, 1992.

Office of His Majesty's Principal Private Secretary. **A Memoir of His Majesty King Bhumibol Adulyadej of Thailand.** Bangkok : Office of His Majesty's Principal Private Secretary, 1987.

_____. **Compilation of Publications in English on the Chakri Dynasty.** Bangkok : Office of His Majesty's Principal Private Secretary, 1983.



Office of His Majesty's Principal Private Secretary. **Royal Ceremonies for the Rattanakosin Bicentennial.** Bangkok : Office of His Majesty's Principal Private Secretary, 1982.

_____. **The Office of His Majesty's Principal Private Secretary : Past and Present.** Bangkok : Office of His Majesty's Principal Private Secretary, 1987.

Office of the Royal Development Projects Board. **His Majesty the King's Approach towards Sustainable Agriculture.** Bangkok : Office of the Royal Development Projects Board, 1995.

_____. **Royal Development Projects :** Bangkok : Office of the Royal Development Projects Board, 1993, 1994.

_____. **The Royal Yanasangvararam Voramahavihan Monastery : Areas Utilization Development Plan.** Bangkok : Office of the Royal Development Projects Board, 1993.

Office of the Special Committee to Coordinate Royal-initiated Projects. **Royal Activities Concerning the Environment, Cassia fistura Science.** Bangkok : [n.p.], 1991. pp. 16-18.

Poon Kesjamras, (ed.) **His Majesty the King's Photographs in the Development of the Country.** Bangkok : The Photographic Society of Thailand under Royal Patronage of H.M. King, 1992.

"Record of Important Events and Collected Royal Photographs." **Siam Rath.** (1987) : 17.

S. Tulyanon. "A Great Artist." **The Royal 5th December Foundation,** Bangkok : Medical Media, 1986.

Saengsoon Ladawan, Mom Rajawongse. **The Royal Wedding Ceremony : the Coronation and Throne Hall Rites.** Bangkok : [n.p.], 1950.

Secretariat Office of the Co-ordinating Committee for Royal Development Projects. **His Majesty King Bhumibol Adulyadej and His Development Work.** Bangkok : Bangkok Printing, 1988.

SUPPORT Foundation. **Kings of the Royal House of Chakri.** Thailand : SUPPORT Foundation, 1985.

Tanin Kraivixien. **His Majesty King Bhumibol Adulyadej : Compassionate Monarch of Thailand,** Bangkok : Katavethin Foundation, 1982.



Thailand Illustrated. (April-July 1988)

Thailand National Commission for UNESCO. **The 100th Anniversary of the Birth of His Royal Highness Prince Mahidol of Songkla.** Bangkok : Thailand National Commission for UNESCO, 1991.

Thak Chalermtiarana, ed. **Thai Politics 1932-1957.** Bangkok : Social Science Association of Thailand, 1978.

Thongthong Chantarangsu. "State Visits." **Sor Khor Chor News.** (1988) : 9-11.

UNDP. **Sustainable Development of Natural Resources.** [n.p.] : UNDP, 1988.

V. Panyakul. "Paper presented to IFOAM Asian Continental Meeting", 19-22 August. Bangkok : [n.p.], 1993.

Van Beek, Steve. **Royal Automobile Stables of Siam.** Bangkok : Castrol (Thailand), 1994.

Vasit Dejkunchon, Pol. Gen. **Incident in Bangkok.** Bangkok : Praphansarn Marketing, 1973.

Vensky, Gabriele. "The Princess Who Descended from Heaven." **Die Zeit** (2 March 1984)

Vilas Manivat. **Kukrit Pramoj : His Wit and Wisdom, Writings, Speeches and Interviews.** (Comp.). Bangkok : Duang Kamol, 1983.

Wales, H. G. Quaritch. **Siamese State Ceremonies.** Richmond : Curzon Press, 1992.

Warren, William. "A Queen's Gift." **Reader's Digest.** (June 1984)

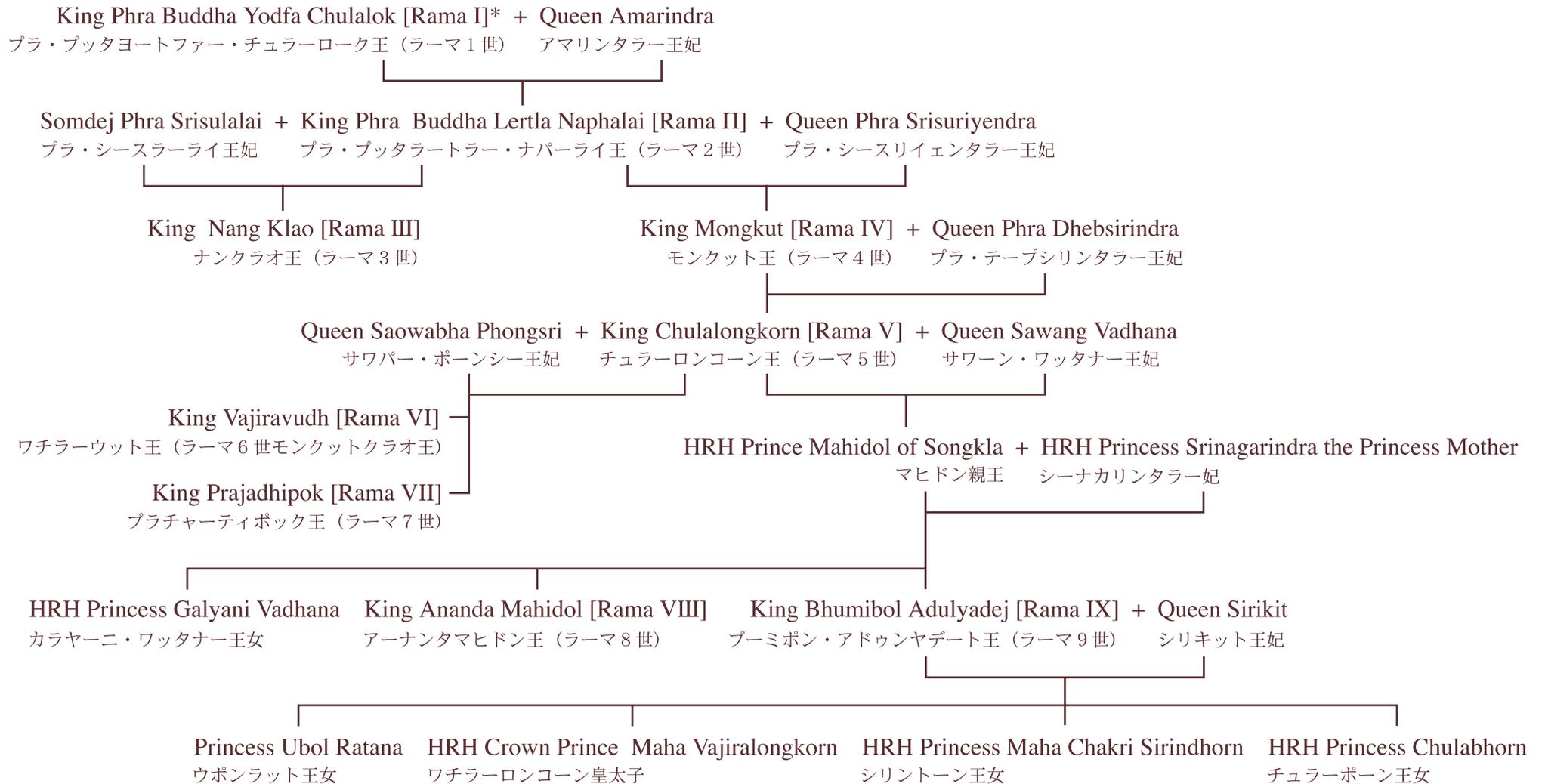
Wright, Joseph J., Jr. **The Balancing Act.** Bangkok : Asia Books, 1991.



Appendix



The Royal House of Chakri (チャクリー王家 系図)



* ワチラーウット王はチャクリー王家の歴代先王に英語の「ラーマ1世」から「ラーマ5世」の称号を与えた。これ以降すべてのチャクリー王家の王に「ラーマ」の称号がつくようになった。



The Publication Committee

Advisor

President of Thai Airways International Co., Ltd.

Chairperson

Dr Suvit Yodmani

Vice Chairperson

Khunying Kullasap Gesmankit

Members

Ms Dhachakorn Hemachandra	Ms Malithat Promathatavedi
Khunying Rattanaporn Chatrapong	Ms Somlak Vongngarmkam
Khunying Songsuda Yodmani	Ms Srinith Boonthong
Mr Tinakorn Bhuvapacchima	Dr Prapod Assavavirulhakarn
Ms Valliya Pangsrivongse	Ms Angkanit Yingprayoon
Ms Aranya Rosenberg Promnog	Dr Art-ron Chetsumon
Mr Chaiwat Suebsantiworapong	Dr Karl E. Weber
Ms Natalia Kazbekova	Dr Nunghatai Rangponsumrit
Dr Parichart Jumsai na Ayudhya	Ms Pornanong Niyomka Horikawa
Dr Prapin Manomaivibool	Ms Rassamee Krisanamis

Member and Secretary

Ms Linda Isarankura na Ayudhya

Member and Assistant Secretaries

Mr Nopporn Boonkaew

Mr Sombat Suthamrak

Ms Saijai Yingsakul



Editorial Board

Chief Editor

Khunying Kullasap Gesmankit

Editors

Ms Dhachakorn Hemachandra	Ms Malithat Promathatavedi
Khunying Rattanaporn Chatrapong	Ms Somlak Vongngarmkam
Ms Srinith Boonthong	Ms Linda Isarankura na Ayudhya
Mr Nopporn Boonkaew	Mr Sombat Suthamrak
Ms Saijai Yingsakul	
Ms Angkanit Yingprayoon	Ms. Aranya Rosenberg Promnog
Mr Chaiwat Suebsantiworapong	Dr Karl E. Weber
Ms Natalia Kazbekova	Dr Nunghatai Rangponsumrit
Ms Pornanong Niyomka Horikawa	Dr Prapin Manomaivibool

Acknowledgements

General Prem Tinsulanonda
Mom Chao Bhisadej Rajani
Mr Khwankeo Vajarodaya
Dr Sumet Tantivejkul
Pol. General Vasit Dejkunchon
Bureau of the Royal Household
The Office of His Majesty's Principal Private Secretary
The Royal Project
The Office of the Royal Development Projects Board
The National Identity Office
Bureau of Royal Rainmaking and Agricultural Aviation
Bangkok Metropolitan Administration



English Text

Mr Richard William Jones

Photographic Credits

Bureau of the Royal Household

The Office of His Majesty's Principal Private Secretary

The Office of the Royal Development Projects Board

The National Identity Office

Bureau of Royal Rainmaking and Agricultural Aviation

Bangkok Metropolitan Administration

Japanese Edition Translators

Mr Shuichi Takahashi (高橋秀一)

Ms Pat-on Phipatanakul

Japanese Edition Editors

Ms Pornanong Niyomka Horikawa

Ms Mineko Yoshioka (吉岡みね子)

Artwork

Ms Sukanya Charukarn

Technology Promotion Association (Thailand-Japan)

